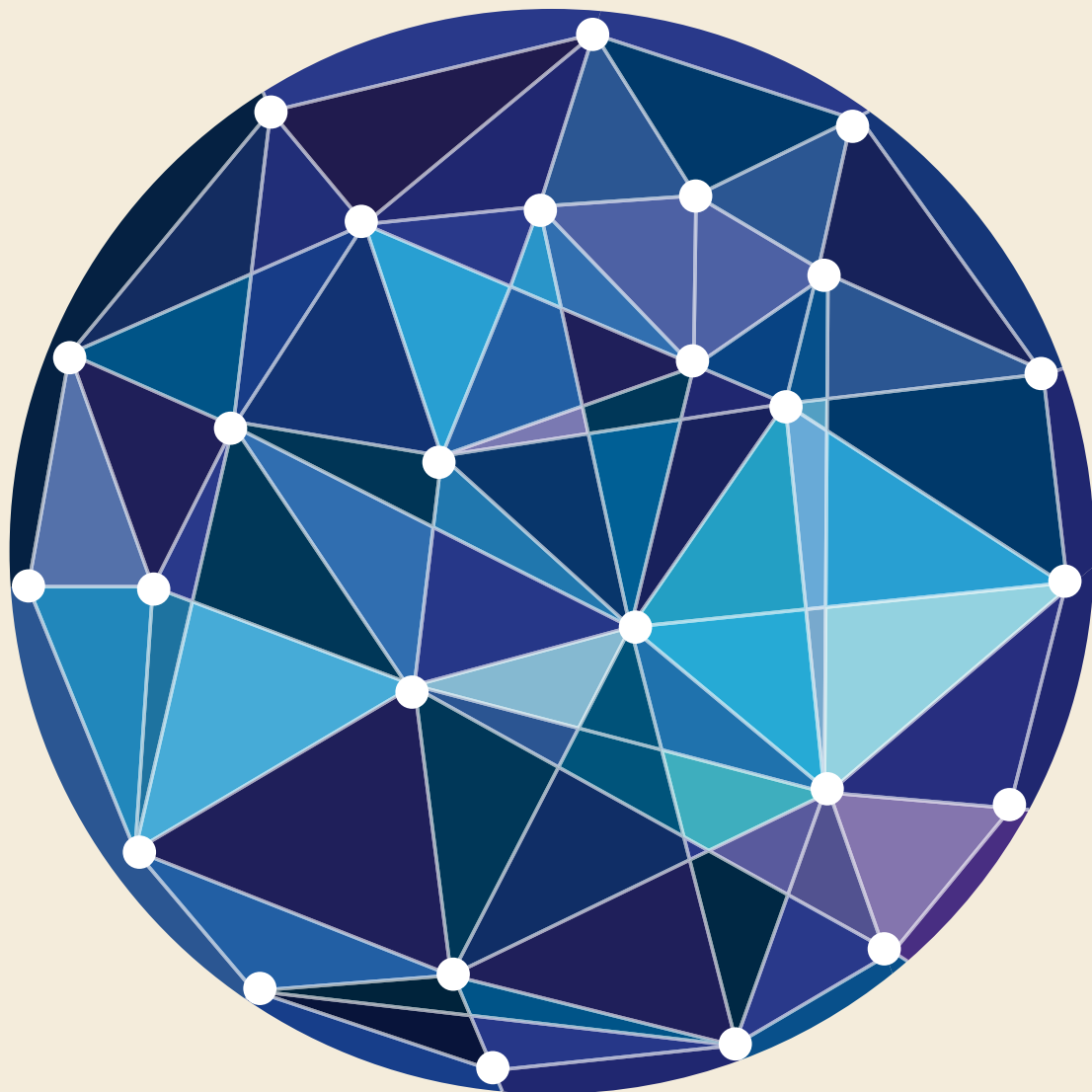


国立大学法人 秋田大学 AKITA UNIVERSITY

高校生のための 研究者・研究内容紹介

令和3年度



国際資源学部

Faculty of International Resource Sciences

教育文化学部

Faculty of Education and Human Studies

医学部

Faculty of Medicine

理工学部

Faculty of Engineering Science

秋田大学組織図 [教育組織]

国際資源学部

国際資源学科

- 資源政策コース
- 資源地球科学コース
- 資源開発環境コース

教育文化学部

学校教育課程

- 教育実践コース
- 英語教育コース
- 理数教育コース
- 特別支援教育コース
- こども発達コース

地域文化学科

- 地域社会コース
- 国際文化コース
- 心理実践コース

- 附属幼稚園
- 附属小学校
- 附属中学校
- 附属特別支援学校
- 附属教職高度化センター

医学部

医学科

- 看護学専攻
- 理学療法学専攻
- 作業療法学専攻

保健学科

附属病院

理工学部

生命科学科

生命科学コース

物質科学科

応用化学コース

材料理工学コース

数理・電気電子情報学科

数理科学コース

電気電子工学コース

人間情報工学コース

システムデザイン工学科

機械工学コース

土木環境工学コース



Link it

**秋田から世界へ。
世界から秋田へ。**

基
本
理
念

- 国際的な水準の
教育・研究を遂行します。
- 地域の振興と地球規模の
課題の解決に寄与します。
- 国の内外で活躍する
有為な人材を育成します。

高校生のための研究者・研究内容紹介について

平成29年4月に開設した秋田大学高大接続センターでは、高校生に対して知的な学びの機会を提供し、高校生をより深い学問世界、研究世界に誘うための「高大接続講座」や、高校生が大学の研究活動や最先端の取り組みに直接触れる機会を提供する「出前授業」、「研究室訪問」等の取組を実施しています。

本冊子「高校生のための研究者・研究内容紹介」の作成は、こうした取り組みを更に前に進めるための第一歩であります。高校での進路指導・進学指導資料として、また、高校における「総合的な探究の時間」や「課題研究」、「キャリア教育」の実践を支援するための参考資料として、更には、大学教員を高校に招聘する「出前授業」・「アカデミック授業」の開催や高校生の「研究室訪問」を計画する上で参考にする等、様々な場面での活用をお願いします。教育委員会にあっても、高校教育に係る事業の展開等において必要に応じて御活用頂ければ幸いです。

本冊子が、高校教育と大学教育の円滑で効果的な学びの接続に少しでも寄与することができれば幸いです。関係の皆様には本冊子の御活用をお願い申し上げるとともに、本冊子に関する御意見、御感想をお待ちしております。

なお、本冊子に関するお問い合わせ、御意見、御感想、さらには出前授業や研究室訪問等の御要望に関しては、秋田大学高大接続センター事務局まで御連絡くださるようお願い致します。

秋田大学高大接続センター事務局

総合学務課・高大連携室 TEL.018-889-3045

E-mail : setsuzoku@jimu.akita-u.ac.jp

目 次

■ 国際資源学部 P. 1 ~ 6
■ 教育文化学部 P. 7 ~ 20
■ 医 学 部	
医学部 医 学 科 P. 21 ~ 36
医学部 保健学科 P. 37 ~ 43
■ 理 工 学 部 P. 44 ~ 62
■ 各 セ ン タ ー P. 63 ~ 65

国際資源学部

Faculty of International Resource Sciences

持続可能な
資源開発と
未来の地球の
ために



Challenge your future

国際資源学部は、資源を網羅的に学ぶことができる我が国唯一の「資源学」を対象とした学部です。世界最先端教育・研究を通じて、世界をフィールドに活躍できる資源スペシャリストを養成します。

国際資源学科

- ▶ 資源政策コース（文系）
資源に関する素養を身につけた国際人になろう！
- ▶ 資源地球科学コース（理系）
資源が分布する地域を解析・抽出できる技術者を目指して！
- ▶ 資源開発環境コース（理系）
新たな資源開発の時代を拓く技術者として羽ばたこう！

ここに注目！

- 世界の資源学をリードする教育研究スタッフ
- 文理融合による新たな資源学教育
- 充実した英語教育と英語による専門知識の習得
- 国際的な資源学実習～全員が海外に飛び立つ「海外資源フィールドワーク」～
- 最新の資源学研究を通じて未来の地球を考える

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
資源政策コース	教授 安達 毅	持続可能な資源供給を目指した資源経済学の研究	安達ゼミでは、資源経済学の観点から、金属・エネルギー資源の生産・消費・リサイクル・廃棄までのライフサイクルにおける、さまざまな社会・経済・環境にかかわる資源問題の解決を目指した研究を行っています。資源に関する理系の知見を生かして、経済学・金融工学・システム工学の手法を用いた文理融合型の研究を通じて、持続可能な資源供給を目標に世界に向けて提言を行っています。
資源政策コース	教授 縄田 浩志	持続可能な資源管理	これからの私たちには、経済、社会、環境のバランスをとりながら、「資源」に向きあうことが求められています。私は、地域の生態系に即したコミュニティ開発、環境負荷が低く社会的に公正な資源開発、資料利用に関する在来知識の応用といった、環境科学と人文社会科学を架橋する研究を行っています。社会がどれほど自立のかつ持続的でありうるかといった、地域と地球を架橋する将来像を、現場に根ざした「持続可能な資源管理」として一緒に考えていきましょう。
資源政策コース	教授 三宅 良美	・プラグマティクス（語用論） 主な研究対象言語：インドネシア語、マレー語、ジャワ語（英語、日本語） ・言語とポライトネス（特に現代ヘブライ語） ・言語とジェンダー論 ・ポリティカル・ディスコース分析	言語プラグマティクスと、文化、社会・政治・経済との関連性を探っています。具体的な研究内容は多岐にわたるが、2014年以降に行っている研究は、1. ナラティブ分析：インドネシアの人々の過酷な経験の語り、感情の語りは、言語形態と関係性をもっているか。2. 言語とトランス・ジェンダー研究：日本語とインドネシア語に観察されるトランスジェンダー言語の語彙、発音、メタファー、文法の特徴を研究している。3. インドネシア語、ジャワ語における情報構造：指示語、Evidentiality、態、統語論などの面から各言語の会話を分析した。4. ポライトネス理論：「直接的で、ポライトネスに欠ける」とされるイスラエルの会話を、言語学のポライトネス理論から見えてきた。
資源政策コース	教授 宮本 律子	アフリカ言語学、異文化コミュニケーション	価値観の異なる人々と円滑なコミュニケーションをとることのできる能力が今ほど求められている時代はないといっていでしょう。異なる背景や価値観を持つ人々の間に起こるコミュニケーションの研究をしています。さらに、コミュニケーションの核となる言語の研究として、特にアフリカの音声言語や視覚言語（手話）を中心に調査をしています。
資源政策コース	准教授 小田 潤一郎	CO2排出削減につながるエネルギーの使い方	私たちの日常生活においてCO2排出量を少なくしようとすると、より費用がかかったり、不便になったり、より時間がかかたりします。発電部門や産業部門（製造業）でもCO2排出量を削減しようとすると、高コストになります。このようにCO2排出削減は他の目標と「トレードオフ」の関係にあります。このトレードオフをできるだけ小さくするエネルギーの使い方（エネルギーシステム）を分析し、それを実現するための提言を行っています。
資源政策コース	講師 稲垣 文昭	国際政治から見たエネルギー資源問題	我々の日常生活に不可欠な石油の値段は何故乱高下するのか。エネルギー資源の安定確保はどのようにすれば可能なのか、などの疑問を出発点として、主にユーラシア大陸におけるエネルギー資源を巡る対立について、その原因や解決手段について国際政治の観点から研究しています。その上で、地球規模での統治秩序である「グローバル・ガバナンス」のあり方を模索し、日本が国際政治の場裏で取るべき施策・戦略についても考えています。
資源政策コース	講師 Cacali Evan	Second Language Acquisition and Cultural Studies	I focus my research on how people learn a new language; how motivation, imagined selves, and other mental constructs influence learning. I am also interested TV and films develop characters, and more interestingly, how these characters fit into the linguistic and semiotic landscape of the larger text.

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
資源政策コース	講師 Eric Kuo Han Ku	Language Teacher/Learner Identity	My main research interest is in the relationship between identity and language learning/teaching. As people learn/teach a foreign language, their identities (or their understandings of who they are) often change, impacting the process of learning/teaching a foreign language. My research tries to gain a better understanding of how identity and language learning/teaching influence each other and how that can help us improve approaches to language learning/teaching.
資源政策コース	助教 阿部 和美	インドネシアの国民統合問題	世界には、一つの国の中に様々な民族が存在していて、ある民族が自分たちの国を作ろうと、その国からの分離独立を求めている場合があります。インドネシアのパプア地域に着目し、パプアの人々がなぜ分離独立を求めているのか、インドネシア政府はパプアの人々に対してどのような姿勢を示してきたのか、インドネシアと関係が深い日本やアメリカなどの国際社会は、パプアの状況に対してどのような発言をしてきたのか、というテーマを研究しています。最大のテーマは、パプアの紛争をどのように解決できるのか、です。
資源地球科学コース	教授 Agangi Andrea	Geochemistry and ore deposits.	My research involves field and laboratory observations to study geological processes that lead to formation of ore deposits. Such processes may include volcanic-tectonic activity and associated circulation of hydrothermal fluids in the Earth's crust. I am particularly interested in how geological processes have changed through time and how that may have affected ore-forming processes.
資源地球科学コース	教授 荒戸 裕之	油田・ガス田・シェールオイル・メタンハイドレート等の新しい探査技術の開発	太陽光などの再生可能資源に注目が集まる現代においても、石油や天然ガスは私たちの豊かな生活に不可欠のエネルギー資源です。これらの可燃性エネルギー資源は地下深部や深い海底下にあるために、現代地球科学の最先端知識をもってしても簡単に見つけ出すことはできません。しかも、日本列島や周辺の海域、あるいは世界各地にもまだ探査できていない地域海域が残されています。これらを効率よく調べ、新発見を導き出すために、新しい技術や考え方を多方面から研究しています。
資源地球科学コース	教授 大場 司	災害をもたらす火山噴火と資源との接点	大きな被害をもたらした平成26年の御嶽山噴火など、現在でも世界中で火山災害がおきています。我々は日本や海外で火山活動を調査し、噴火活動の履歴、噴火の起源、噴火メカニズムを解明することで火山災害の軽減に貢献するとともに、そのような噴火と鉱床ができる環境との関係、地熱ポテンシャル、電力施設等の安全性の評価といった、火山と資源との関係についてくわしく研究しています。
資源地球科学コース	特別教授 佐藤 時幸	超微小化石を使って地球の歴史を復元する	海洋に堆積した泥岩には1g中数百億個の微小化石を含みます。この特徴を生かし、世界各地の海洋底から採取した約4万点の試料や、世界の油田地下深部から採取された試料の微小化石を解析し、地球が数億年前から現在までに経験した様々な環境変動や石油資源形成のメカニズムについて研究を行っています。また、共同首席研究員として実施した国際深海掘削プログラムでは過去200万年間の地球の環境変動を詳細に総括しました。
資源地球科学コース	教授 渡辺 寧	鉱物資源の評価、成因に関する研究	地球内部でのマグマ活動、熱水作用、地球表層での風化、堆積作用等の過程で元素や鉱物がどのように移動・濃集し鉱物資源を形成するかを研究しています。また社会の求める元素や鉱物がどこにどれだけ存在するか、資源として利用できるものかどうかの判定、利用可能にするための方策の探求も行っています。
資源地球科学コース	准教授 越後 拓也	天然鉱物の生成過程および生体鉱物の機能に関する研究	地球の固体部分を構成する最も基本的な物質である「鉱物」の研究を行っています。研究対象となる鉱物は、高温のマグマが冷え固まってできた鉱物から植物細胞の内部でつくられる鉱物まで様々です。野外で採集してきた鉱物の化学組成や結晶構造を分析するのはもちろん、実験室で天然環境を再現した鉱物合成実験を行うこともあります。こうした研究を通して、地殻内部や地球表層で起きている現象、あるいは生体内で鉱物が担っている役割を原子レベルから明らかにすることを目指しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
資源地球科学コース	教授 Stephen Obrochta	古環境、古気候、古海洋復元	私は日本国内の湖や陸から遠く離れている太平洋、大西洋などで調査を行っています。数ヶ月掘削船で滞在する場合があります。得られる堆積物は昔の気候変動についての貴重な情報を保存しています。例えば、氷床の消長のタイミング、海水温や海水順の変化を明らかにできます。
資源地球科学コース	准教授 千代延 俊	地下を探索する学問	化石や化学、物理の手法を用いて地下の地質の状態を調べています。地下地質を調べることによって地震発生メカニズムを解明する研究や石油・天然ガス資源の発見に繋がる研究を進めています。
資源地球科学コース	准教授 山崎 誠	地層の観察と微小な化石の分析による地球環境の復元	地層の詳しい観察や地層の中に含まれる微小な化石の分析から、私たちの暮らす地球のかつての環境を復元します。人類活動に必要な資源が、地球の歴史の中で、いつ頃・どのような環境で生成されるのかを明らかにする研究をしています。
資源地球科学コース	准教授 高橋 亮平	金属鉱床学: 金属資源の生成機構の解明	金や銀などの貴金属、銅や鉛、亜鉛などのベースメタル、その他のレアメタル等の金属鉱床を地質学的に記載し、どのように鉱床が形成されたのかを明らかにする研究を行っています。実際に国内外の金属鉱床で地質調査を行い、鉱床が生成するためにどのような地質学的な出来事があったのかを明らかにします。得られた知見は、新しい資源探査や開発の指針として役立てられます。
資源地球科学コース	講師 西川 治	岩石鉱物の破壊と変形	断層や褶曲構造の観察と実験等によって、岩石鉱物の破壊と変形について調べています。得られた知見をもとに、地形や地質構造の発達過程の復元や活断層の活動評価など、過去と現在の地殻変動を解明することを目指しています。
資源地球科学コース	助教 星出 隆志	海洋プレート誕生の現場をさぐる	地震や火山噴火の原因となる日本列島に沈み込む海洋プレートは、東太平洋に南北に連なる「中央海嶺」と呼ばれる海底火山の地下で作られています。最近、米国の科学掘削船により、中央海嶺のそばで誕生したばかりの海洋プレートから、奇妙な縞模様を持つ「斑れい岩」という岩石が世界で初めて掘削採取されました。この「模様」を、最新の分析機器を使って化学分析し、海洋プレート誕生の謎を明らかにしようとしています。
資源地球科学コース	助教 坂中 伸也	地表から地下深部までを地上にいながら詳細に調べる研究	地下の状態や構造を知りたいとき、実際に掘削するのが確実な方法です。しかし、実際に掘削するには労力や費用が必要だったり、埋没文化財などのように掘削することによる破壊を避けなければいけないことがあります。また、現時点で人類が地下を掘れる深さには限界があります。電流や電磁波、または磁気や重力を用い、地表近くから地下100km程度までの構造を詳細に探査するための研究を行っています。地下探査は、資源開発、土木建築、地震・火山防災、地熱調査、文化財調査、地質調査や地球科学の解明など幅広い応用が期待され、活用されています。
資源地球科学コース	助教 Pearlyn Manalo	Understanding how elements move through the Earth	Most of the elements that we use in our daily life (such as Fe, Ni, Cu, Au, Ag, etc.) were taken from the rocks of Earth. Recent advances in technology also reveal that previously lesser known elements (such as Sb, Ce, Dy, Nd, etc.) have important uses as well. I am interested in understanding how these different elements move through the different parts of the Earth. I also would like to understand how these elements become concentrated enough to form an ore deposit.
資源地球科学コース	助教 松井 浩紀	微化石を用いた南極から熱帯までの古環境研究	顕微鏡で観察できるプランクトンなど微小生物の化石「微化石」を研究しています。微化石は地層の年代を示す示準化石として、また当時の環境を示す示相化石として活用することができます。私は、約6600万年前から現在にいたる新生代という時代に注目して、南極海や熱帯太平洋などの過去の海洋環境を微化石から復元しています。研究を通じて、現在の地球環境がどのように成立したかを詳細に理解したいと考えています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
資源地球科学コース	助教 青木 翔吾	固体地球進化・地球生命環境史の解明	地球史46億年の間に、固体地球内部ではどのような物質循環が起きていたのか?生命はいつ・どのように誕生・進化したのか? を岩石試料の地球化学・年代学的な解析から解明する研究に取り組んでいます。 現在は特に以下の3つの研究を行なっています。 (1)モンゴルゴビ砂漠における白亜紀恐竜進化史の復元 (2)低温高压型変成帯における物質循環プロセスの年代学的な制約 (3)アジア大陸東縁部における花崗岩/バソリス形成年代と形成プロセスの制約
資源開発環境コース	教授 石山 大三	元素循環に基づく元素濃集と拡散の研究	地殻上部での流体や水の移動に伴う元素循環機構の解明と金属元素の濃集と拡散の研究を行っています。その応用として資源の形成機構の解明や環境影響評価手法の開発を行っています。
資源開発環境コース	教授 今井 忠男	コンクリートの中に入れる丸い砂の製造方法について	コンクリートはセメントが3割と骨材と呼ばれる砂利・砂が7割できています。しかし、環境規制で天然の砂が採取できないため、人工的に岩盤を砕いて砂利・砂を作り、ジェット流を利用して微細な粒子を丸く研磨する技術を開発しています。
資源開発環境コース	教授 川村 洋平	スマートマイニングの構築	ICTを活用した次世代の"高度情報化鉱山操業"(スマートマイニング)を開発する研究を行っています。人工知能(ディープラーニング)やAd-hoc通信といった最先端のソフトウェア技術やIoT技術などを適用し、安全・高効率な鉱山操業を目指します。また、鉱山VR(バーチャルリアリティ)システムの開発も行っています。
資源開発環境コース	教授 柴山 敦	都市鉱山を含む資源生産・分離技術の開発	鉄や銅、レアメタルなどの金属は鉱物資源から生産されます。大切な資源に変わりはありませんが、現在、地球上の天然鉱石は低品位化、劣質化が進み、次世代を見越した分離技術が必要になっています。資源を安定して供給するためには「都市鉱山」からの回収、いわゆるリサイクルも重要です。このような背景のもと、天然あるいは人工的に生産された資源を効率よく、かつ持続的に生産・利用するためのハイブリッドな研究開発を進めています。
資源開発環境コース	教授 長縄 成実	石油・地熱開発のための掘削技術の開発	新たな石油・天然ガス資源の探究、次世代再生可能エネルギー「超臨界地熱発電」実現のために、より深く、より高温・高压の地下を目指した高度掘削技術に関する統合的な研究開発を行っています。
資源開発環境コース	教授 藤井 光	地中熱利用システムの普及促進を目指した技術開発	地球温暖化は人類にとって深刻な問題ですが、地表近くの地盤が持つ「地中熱」を利用することにより温暖化を軽減でき、さらにヒートアイランド現象も緩和できます。しかし、地中熱の利用には井戸を掘る初期コストが高いという問題点があり、国内ではあまり普及が進んでいません。そこで、我々は、フィールド試験や数値シミュレーションなどを通じて、低コストかつ環境負荷の小さいシステムを提案するための研究を行っています。
資源開発環境コース	准教授 小川 泰正	重金属類による環境汚染について	主に重金属類による土壌や河川の汚染についての調査、研究を行っています。その中でも、日本一の酸性度を誇る秋田県玉川温泉由来の有害元素の河川水中での拡散、河川流域への分布に関して、分子、イオンレベルで調査しております。その他にも、資源産出国の鉱山開発に伴う河川流域や土壌汚染についての研究も行っています。
資源開発環境コース	准教授 木崎 彰久	環境保全型資源開発のための岩盤工学に関する研究	自然エネルギーとして現在普及が進められている温泉発電・地熱資源開発における配管内スケール対策を目的としたウォータージェットデスケール技術の開発、環境低負荷エネルギーとして注目されている水溶性天然ガス資源開発に関するウォータージェットパーフォーレーション技術開発、深部地殻熱抽出や低品位資源開発等を目的とした岩盤内透水性向上およびき裂遮水性向上法に関する研究等、環境保全型資源開発のための岩盤工学に関する研究を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
資源開発環境コース	准教授 高崎 康志	銀および銅電解に及ぼす都市鉱山由来不純物元素の影響	鉱石から金属を製造する”製錬”分野では、都市鉱山由来の二次原料に関する問題が発生しています。二次原料中には鉱石にあまり含有されていない元素が多く含まれており、従来考慮しなくても良かった元素が様々な問題を引き起こしています。私の研究では、各種不純物が銀や銅の電解に及ぼす影響について調査しています。悪影響を及ぼす元素を見出すことで操業トラブルを回避したり、新規プロセスの開発に挑戦しています。
資源開発環境コース	准教授 芳賀 一寿	高度資源処理技術の開発に関する研究	有害な不純物(ヒ素など)によって汚染されているため開発に着手できない資源(未利用資源)を有効利用するための分離技術の開発に関する研究を行っています。その他、電子機器廃棄物(E-waste)のリサイクルに関する研究や、特定の金属を選択的に抽出するための金属抽出剤の創成に関する研究も併せて行っています。
資源開発環境コース	准教授 Mahdi Saadat	Resource Informatics and Geotechnics	The aim of our research is to contribute in development of new computer techniques and ICT solutions to understand and overcome ore body recovery challenges – in mining industry– with the strategic objective of enhancing and promoting computational techniques, computer-aided simulations, artificial intelligence & machine learning technologies, and laboratory innovations for encouraging sustainable mineral resource recovery, hazard mitigation, and responsible use of earth’s natural resources.
資源開発環境コース	特任講師 Altansukh BATNASAN	Mineral processing, Extractive metallurgy	My research topic addresses to recover and beneficiate precious metals, base metals, and rare earth elements from natural ores and secondary resources using mineral processing, hydro- and pyro-metallurgical processes. My current research intends to remove impurities from low-grade iron ore by improving the iron grade via a combined method consisting of mineral processing techniques, hydro-and pyro-metallurgical approaches.
資源開発環境コース	助教 阿部 一徳	地中に埋蔵される石油の回収量増加に関する研究	通常の原油生産では、油層内に埋蔵されている原油のうちの20%程度しか回収できず、多くの原油が油層内に残存することになります。本研究では、この原油回収量を改善するために、調整塩水・ガス・ケミカル・ポリマー流体を油層内に圧入する方法を検討しています。高圧容器を用いた流体流動実験やコンピュータシミュレーションによる解析を行うことで、油層内における流体の挙動を予測し、原油の高効率な生産手法の確立を目指しています。
資源開発環境コース	助教 Bina Saeid	Energy Resource Engineering	My research interests lie in the field of energy systems modeling particularly in renewable energy such as geothermal energy, wind energy, solar energy and so on. It mainly focuses on the assessment of the 100 percent renewable electricity considering geophysical and environmental factors. As well as, my more recent work has focused on the ground source heat pump performance and characterizing the ground hydro-thermal parameters.
資源開発環境コース	特任助教 鳥屋 剛毅	人工知能を用いたリモートセンシング画像の解析	リモートセンシングは、人工衛星や航空機などで空から撮影を行う技術です。非常に高い高度を航行するため、広範囲を効率よく撮影することができるという大きなメリットがあります。しかし、それらの画像データはデータ量が非常に大きく、また特殊なセンサを用いているため人手による解析は困難です。そこで、深層学習(Deep Learning)などの機械学習によって構成した人工知能を用いてその画像を解析することで、資源開発に役立つ技術の研究をしています。

教育文化学部

Faculty of Education and Human Studies

人を育て
地域をつくる



Challenge your future

教育文化学部は、教員をめざすための「学校教育課程」と地域で活躍する公務員・企業人をめざすための「地域文化学科」の2つで構成されています。学校教育課程、地域文化学科は、あなたの求める学びを深めるための様々なコースを用意しています。
さあ、あなたはどのコースで未来にはばたきますか。

学校教育課程

- ▶ **教育実践コース**
小学校、国・社・家・音・美・体の教員をめざす人
- ▶ **英語教育コース**
英語の教員をめざす人
- ▶ **理数教育コース**
数学・理科の教員をめざす人
- ▶ **特別支援教育コース**
特別支援学校の教員をめざす人
- ▶ **こども発達コース**
幼稚園教員・保育士をめざす人

地域文化学科

- ▶ **地域社会コース**
地域の再生・創造をめざす人
…理論（法学・経済学・社会学）と実践（フィールドワーク）を両輪にした実践知
- ▶ **国際文化コース**
地域と世界の架け橋をめざす人
…地域の文化を世界に、世界の文化を地域に
- ▶ **心理実践コース**
公認心理師（国家資格）や臨床心理士、スクールカウンセラーをめざす人
…こころを科学し、こころを支える

ここに注目！

- 東北地区で5年連続教員就職率 No.1
(2020年国立教員養成系学部)
- 全国学力トップレベルの秋田を支えている教師は秋大出身者（小学校で半数以上）
- 全国学力トップレベルの秋田の学校現場で実践知を学ぶ

ここに注目！

- 地域の企業・団体と連携した実践的教育プログラム（北都銀行、魁新報社をはじめとした多くの連携先）
- 充実した単位互換制度と支援体制に支えられた留学（英語圏、中国語圏、韓国語圏からヨーロッパまで広がる提携校）
- 公認心理師、臨床心理士養成を見据えた一貫した教育プログラムと豊富な現場実習（大学院臨床心理士養成コースでの臨床心理士資格合格率約90%）

■ 教育文化学部

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
学校教育課程 教育実践コース	特別教授 阿部 昇	探究型の国語の授業づくり	現在「アクティブ・ラーニング」「主体的・対話的で深い学び」といった教育方法が重視され始めています。子どもが、自分たちで課題を見つけ出し、グループや学級でそれを探究し解決していく授業です。秋田県では「探究型授業」として、以前から重視されてきました。そういった探究を重視した国語の授業について研究しています。どのように指導すれば、豊かで深い学びが生まれるのか。また、確かな国語力が育つのか。小中高の先生方との共同研究を重視しながら研究を進めています。
学校教育課程 教育実践コース	教授 遠藤 敏明	スウェーデンのスロイドとその教育	北欧家具やスカンジナビア・デザインがいかに創られるのかを知るため、スウェーデンの大学にあるスロイド・インスティテュートで学びました。スロイドとは、日本の工作、工芸、手芸、クラフトから彫刻領域まで含みます。木材・金属や繊維・布などの身近な素材を利用した立体造形活動全体を表す言葉です。現在の研究テーマは、木を素材として「もの」を作り出すこと、その形を導き出すプロセスを明らかにして教育に役立てることです。
学校教育課程 教育実践コース	教授 三戸 範之	柔道の指導法、技能向上に関する研究	柔道の技や戦術の構造、練習法、指導法について、武道方法学およびスポーツ心理学の立場から研究を行ってきました。最近では、授業などで柔道初心者が安全に無理なく学ぶための投げ技の段階的指導法を開発し、その効果を明らかにする研究を行っています。柔道の技能を適切に向上させ、楽しさを味わわせることができるよう、指導法や練習法の改善に貢献できる研究を進めていきたいと考えます。
学校教育課程 教育実践コース	教授 外池 智	社会科教育、歴史教育、平和教育、地域の教育資源を活用した教育研究	戦後75年が経ち、今新しい平和教育、歴史教育が求められています。そうしたいわば「次世代の平和教育」を調査・研究しています。また、秋田には授業の題材となるべく地域の教育資源が豊富です。社会科教育研究室では、2年次での「社会科巡見」、そしてそれを踏まえた3年次での「社会科授業づくり演習」を連関させ、身近な地域素材や、地域の教育資源を活用した授業構成演習を実施しています。
学校教育課程 教育実践コース	教授 長瀬 達也	秋田県自由画教育運動の研究	図画教育は明治期から始まりましたが、教科書などの図版を模写するだけで、子供の自由な表現を否定していました。このような図画教育に反対した洋画家の山本鼎は、大正7年に自由画教育を提唱しました。自由画教育は発祥の地である長野県や、東京だけではなく、全国各地でも多様な進展を見せていて、北東北の秋田県でも実践されました。この過程を当時の『秋田魁新報』などによって研究することで、美術教育の未来を考えています。
学校教育課程 教育実践コース	教授 成田 雅樹	作文の指導方法及び評価方法の研究	主に小中学校国語科の指導法研究をしています。音声言語教育や、説明的文章及び文学的文章の読解学習指導、語彙や文法等の言語事項指導の研究もしてきましたが、特に「書くこと」に関する研究をしています。戦後の作文教育の研究成果や実践事例を参考に教材開発や、アメリカ版全国学力学習状況調査等を参考に評価法開発をしています。研究成果は、小中学校の国語教科書や漢字指導法の解説書などに生かしています。
学校教育課程 教育実践コース	教授 吉澤 恭子	フランスの学校音楽教育制度に関する研究	フランスの学校教育における音楽科カリキュラム・学習内容、教材・教科書、さらに音楽教員養成や現職教育等に関する研究を行っています。フランスの小学校の音楽は「芸術実践と芸術史」の領域に含まれ、実に多様な学習活動が展開されています。近年は音楽学習におけるダンス実践の意味・意義を探るべく、現地でのフィールドワークや教材分析をとおして、小学校教員養成のためのダンス教材の作成に取り組んでいます。
学校教育課程 教育実践コース	准教授 石井 宏一	デザイン方法論としての「情報表現」に関する研究	デザイン学の立場から「情報表現」に関する研究を行っています。情報をデザインするためには「メディアテクノロジー」と「アート」を融合し、情報に「かたち」を与えて「人間の感覚」に適合させる、すなわち「情報表現」が必要です。これを実現する上で、本研究ではCG、プログラム、デザインプロセス、数理的規則性等の考え方に着目し、それらに関する情報表現的可能性の探究を目的とした造形実験を通じて「新しいデザイン」の発見を目指しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
学校教育課程 教育実践コース	准教授 伊藤 恵造	地域づくりとスポーツ	大都市郊外のニュータウンにおけるコミュニティの再編過程に着目して、地域づくりとスポーツに関する研究を進めています。具体的には、住民が日常的に行うスポーツ実践が、地域の生活課題の解決にどのように関わっているのか、あるいは、関わっていないのかを明らかにしたいと思っています。
学校教育課程 教育実践コース	准教授 為我井 寿一	声楽演奏法・指導法	声楽は「身体が楽器」という発想を持って演奏することから、声の出し方である発声法が重要です。また、歌う際には客観的に自分の声を聞いて、「正しく判断できる耳」を持つことがポイントとなります。現在は、専門的な発声法や声楽演奏解釈の仕方等を学校音楽教育における音楽授業で、教員が児童・生徒に分かりやすく歌唱指導を行うためにはどのような「言葉掛け」や「歌唱指導法」がよいかを考察しています。
学校教育課程 教育実践コース	准教授 堀江 さおり	家庭科における消費者教育の効果的な実践に関する研究	日常生活で商品・サービスを手し、消費する過程には様々なトラブルが潜んでいることがあります。これらのトラブルを解消するためには、消費者として消費生活に関する必要な知識の修得、必要な情報の収集等、自主的で合理的な行動のできる消費者となるための学習、すなわち消費者教育の実施が求められています。生活を扱う家庭科において、自立した消費者を育てるためにふさわしい学習とはどのようなものなのかを研究しています。
学校教育課程 教育実践コース	准教授 松本 奈緒	体育学習における学習者の認知研究	学習者がどのように体育の学習を捉えたか、何を学習したのかについて研究しています。具体的には、小学校中・高学年を対象としたムーブメント教育、中学生を対象とした体ほぐしの運動の授業やリズムダンスの授業を研究の対象としています。研究方法については、漫画のせりふ等に用いられる「ふきだし」に学習者に自由に記述してもらうふきだし法、体育の授業について絵に描いてもらいその絵を分析する描画分析を用いています。
学校教育課程 教育実践コース	准教授 山崎 義光	20世紀の日本文学	1901年は明治34年、2000年は平成12年。日本の20世紀は明治・大正・昭和・平成にまたがります。20世紀の「世界」を特徴づけるのは政治・経済・文化におけるグローバル化と大衆化です。第一次「世界」大戦から第二次大戦後までの20世紀半ば、文化的発信の中核を文学(者)が担い、時代の動きを多角的に斬新に表現しました。時代・社会のなかから生まれながら、それを超えて読まれる文学の文化的な価値について研究しています。
学校教育課程 教育実践コース	講師 石原 慎司	指揮法、および、音楽科教育に関する研究	音楽科でどのような授業が可能なのか、どのような学力が得られるのか、効果的な授業方法論とは何かなど、多くの問いに答えるべく研究をしています。加えて、指揮法は音楽科の授業を担当する教師にとって必要不可欠な技術ですが、これを授業で用いる際の教育効果についても関心があります。指揮の実技研究は、ヨーロッパでオーケストラを指揮したり、大学内でオーケストラを編成して音楽会を企画するなどしています。
学校教育課程 教育実践コース	講師 加納 隆徳	社会科教育学(主に公民系教育分野)、法教育論	学校における社会科の授業をより良くするために、教科に関わる目標や内容、方法に関わる教科教育学について研究をしています。そのなかでも、法教育と呼ばれる分野を中心に研究を進めており、「法」や「ルール」は必要なのか?、「ルール」を守る理由は?といったことを、学校で取り扱えるように、教材開発・実践研究を行っています。最近では法教育に関わって、参加型学習の研究も進めており、「話し合い」活動の意義や方法についても関心をもっています。
学校教育課程 教育実践コース	講師 松下 翔一	アスリートの競技力向上に関する研究	スポーツにおけるアスリートは、自らの能力を限界まで高めながらパフォーマンスを競うべく、各種のスポーツ特性に適した専門的体力や技術力、戦術力を身に付けますが、私は各種のスポーツパフォーマンスを効果的に高めるトレーニング理論を構築し、新しいトレーニング方法論を開発する研究を行っています。主に、ジャンプ力を効果的に高めるトレーニングや、技術の動作分析、指導におけるコーチングモデルの開発などを中心に、研究しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
学校教育課程 教育実践コース	講師 渡邊 和仁	運動時の呼吸循環応答とその調節機構	運動を行うとからだの様々な機能が活性化します。それがどのような仕組みによって起こるのか、またそれが個人によってどのように異なるのかについて、主に呼吸や血液循環の反応を中心に研究を行っています。最近では、特に暑熱ストレスや体水分損失(脱水)による影響に着目し、その解明に向けて検討を進めています。その成果をもとに、スポーツ活動時の安全性向上や質の高いトレーニング法の開発等へ応用することを目指しています。
学校教育課程 英語教育コース	特別教授 佐々木 和貴	シェイクスピア及び英国17～18世紀の演劇	「ウィリアム・シェイクスピア(1564-1616)の作品が、17～18世紀にかけてどのように演じられていたのか、そしていつ頃から、現在のように特別に偉大な作家として崇められるようになったのかの解明」が、現在の研究テーマです。具体的には、当時のシェイクスピア作品の様々な改作や俳優の演技スタイルの変化を取り上げて、この時代にシェイクスピアが、どのように演じられ、また読まれていたのかを、主に歴史的な視点から考察しています。
学校教育課程 英語教育コース	教授 佐々木 雅子	異文化間コミュニケーションによる英語学習	学習してから使うのではなく、使いながら学習していく方法を研究しています。初めて自炊する大学生を想像して下さい。作らないことには食べられないので作ります。食べる(聞き読み)ことに興味を持ち、必要に応じて学びながら(インタラクション)、試行錯誤を繰り返して作り(話し書き)、腕を上げていきます(英語力を伸ばす)。異文化間コミュニケーションも英語を使わないことには始まりません。その過程での英語学習を追究しています。
学校教育課程 英語教育コース	教授 星 宏人	形態論、統語論、意味論、語用論等の観点からの言語研究	形態論、統語論、意味論、語用論、人間による文解析等の様々な観点から総合的に言語を研究しています。最近ではNoam Chomskyの生成文法やWilliam Croftらの認知言語学の背後にある言語哲学、言語能力と言語運用の関係(cf. John A. Hawkins, Ruth Kempson, Wilfried Meyer-Viol & Dov Gabbay, etc.)、言語習得、パラメータの有無(Noam Chomsky, Frederick J. Newmeyer, Peter W. Culicover, etc.)等に興味を持って研究を進めています。
学校教育課程 英語教育コース	准教授 PATERSON ADRIAN DAVID	応用言語学 ①他言語試験法 ②語彙と定型語の習得 ③言語における複雑適応系	①英語学習者の実力を計る為に、より良い試験の作り方を研究する。 ②英語学習者の言葉と定型句(言葉と同様に使う文が節)の習得と会話の中での使用による効果の分析をする。 ③言語学の研究者は様々な専門分野を研究している。しかし、自分の専門分野だけではなく幅広い視野を持って研究に取り組むことが重要である。
学校教育課程 英語教育コース	准教授 若谷 保彦	若林俊輔の英語教育論の分析	英語教育学者の若林俊輔(1930～2002)は、教科書、英和辞典、英語教育雑誌の執筆及び編集、ラジオ・テレビの語学放送の監修など、英語教育の様々なジャンルで活躍しました。また日本の代表的な英語教育関係雑誌『英語教育』(大修館書店)に特集記事を最も多く執筆しています。現在の研究テーマは、若林が英語教育のどの分野に関してどんな発言をしたのか、また氏の英語教育論がどのように発展したのかを調査・分析することです。
学校教育課程 英語教育コース	講師 平良 一史	異文化学習とその心理的影響	異文化学習が学習者にどのような心理的影響を与えるのかを研究テーマとしています。特に、留学先における学生の学びと心理的変化との関係について関心があります。留学先の文化、社会、歴史を学び、その地域の人々と交流することで引き起こされるアイデンティティ発達について研究しています。今後は、異文化理解の活動がどのような心理的影響を学習者に与えるのかを研究していきたいと思っています。
学校教育課程 理数教育コース	教授 石井 照久	水生生物の発生研究と異常・生息調査、生物教材開発	目立たない水生生物を主な対象にして、生息調査、異常(奇形)調査、生殖方法の解明などを行っています。この研究の一環で八郎潟から秋田県内で初の生息報告となった水生生物(シナカイメン、マツモトカイメン、チクビドリ、ヤマトヒドラ、オオマリコケムシ、ヒメテンコケムシ、ムカシカイミジンコ、ゴミマルカイミジンコなど)を報告しています。また、生物教材の開発研究も行っていて、最近では解剖教材の開発に力をいれています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
学校教育課程 理数教育コース	教授 岩田 吉弘	海洋における微量元素の移動の定量的評価に関する研究	海水中に含まれるリン、鉄、亜鉛などの微量な化学元素は海洋における生命活動に重要な役割を果たしています。藻類などの一次生産者が海水からこれらの微量元素を取り込む生物濃縮の定量的なデータは、生態系の生物生産と物質移動の評価に重要です。研究室では、海洋のモデルとして海産プランクトンを培養し、微量元素の含有量を粒子加速器を用いた最新の機器分析により定量し、海水中の存在量との比較などの評価を行っています。
学校教育課程 理数教育コース	教授 宇野 力	数理統計における逐次解析	数直線上において、コインを1回投げる毎に、表が出たら+1、裏が出たら-1進むという動きはランダム・ウォークと呼ばれ、これをいつ止めるのかは、期待利得を最大に、あるいは期待費用を最小にする問題と関わってきます。ランダム・ウォークを停止させる条件のことを停止規則といいます。停止規則に関する性質を色々調べ、得られた性質を統計学における推定や検定などの問題へ応用する研究(これを逐次解析という)を行っています。
学校教育課程 理数教育コース	教授 佐藤 学	発展的に考える算数・数学の授業の研究	算数・数学の授業では、教科書の問題や先生が提示する問題を解決していきます。あなたは、その問題に取り組む意味や昨日の問題との違いについて、考えたことはありますか。問題を解決することはもちろん大切ですが、問題の解決から「別の解決方法はないか」「いつでも解決できるか」「数量や条件、場面を変えてみるとどうなるか」といった新たな問いが生まれることが望ましいです。このような学習を可能とする授業の構築に向けた研究を進めています。
学校教育課程 理数教育コース	教授 林 信太郎	火山地質学、火山教育に関する研究	火山を対象として、火山の噴火史を地質学や歴史火山学の手法を使って研究しています。例えば、火山噴火の中でも大きな災害要因となっている火山泥流については、フィールドでの調査、大型機器を使った分析、過去の人が書き残してくれた古文書を読み解くなどして、その実態や影響範囲、流動のメカニズムを明らかにします。また、むずかしい火山現象に関する概念を、こどもたちにわかりやすく伝えるための研究もしています。
学校教育課程 理数教育コース	教授 林 正彦	超伝導などの量子現象とその応用に関する理論的研究	極低温や電子・分子などの微小な世界は「量子力学」というわれわれの日常とは違う法則に支配されており、興味深い現象の宝庫です。超伝導現象や室温とは異なる電気伝導現象は面白いだけでなく、人類の次世代技術の源でもあります。また、これらの現象は電子間相互作用など理論的な取り扱いが困難な問題も含むチャレンジングな研究課題です。私は、数学やコンピュータを駆使して、新しい現象の発見や量子の世界の美しい理解を目指しています。
学校教育課程 理数教育コース	准教授 大内 将也	簡約可能概均質ベクトル空間の分類	18世紀の終わり頃、群の概念が確立し、現在までに、群と様々な数学的対象との関係が発見され、多くの研究がなされています。その1つに、概均質ベクトル空間(PV)があります。PVとは、いくつかの多項式の共通零点全体として表される群Gが、表現 ρ によって、ベクトル空間Vに作用し、殆ど空間全体に広がる軌道をもつときの(G, ρ , V)のことです。私は、どのようなPVが存在するのかに興味をもち、主に、PVの分類を行っています。最近では特に、PVの構造と構成について研究しています。
学校教育課程 理数教育コース	准教授 河又 邦彦	ウミホタルにおける雄と雌の決まり方	生物の雌と雄は染色体により自動的に決まると思っている人は多いのではないのでしょうか。ヒトの場合、性染色体がXXであれば女性、XYであれば男性になります。しかし、染色体によらない性決定も結構あるのです。ワニは砂の中に卵を産みますが、砂の温度が高いと卵は全て雄になります。戦略的な理由がちゃんとあるのですが、ここでは割愛。ウミホタルも生まれた後に性が決まることが明らかになってきました。なぜ、どうして、を研究しています。
学校教育課程 理数教育コース	准教授 清野 秀岳	酵素反応を手本にした触媒反応	生物の体内では様々な化学反応がバランス良く進み、生命にとって必要な物質やエネルギーをつくり出しています。それらの反応は人工的な化学反応よりもはるかによく制御されていて、人間にとっては未だに難しい光合成や常温窒素固定なども実現しています。触媒としてこれを仲立ちしているのが酵素ですが、私の研究ではその作りや仕組みを手本にして、二酸化炭素や窒素などから有用物質を作るための人工触媒を開発しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
学校教育課程 理数教育コース	准教授 原田 潤一	微分方程式の解の形状変化について	波の伝搬や熱の拡散など多くの物理現象は微分方程式を用いて記述されます。この微分方程式の解がどのように変化していくかを数学的に調べることが大きなテーマです。その中でも衝撃波など、状態が急激に変化するものについて、それがどのように起こり、数学的にどのように記述されるのかに興味を持っています。波の伝搬や熱の拡散など、単純な現象であっても、数学的には複雑で多様なものが現れてきます。新たな現象を求め日々取り組んでいます。
学校教育課程 理数教育コース	准教授 本谷 研	東北地方における積雪分布の時空間変動の研究	毎年東北地方には沢山の雪が降りますが、雪は人々の生活や稲作に必要な水資源として大切な反面、生活に支障をもたらす厄介者でもあり、時には大きな災害をもたらすこともあります。こうした雪の降り方・積もり方・融け方を気象データ(気象官署やアメダスの観測値)や物理過程モデル(地表面での水やエネルギーのやり取りで雪の積もり方や融け方を表す)で再現することで、雪の積もり方の年ごとの違いや、平地と山地といった場所による違いなどを調べています。
学校教育課程 理数教育コース	准教授 山口 祥司	三次元多様体のトポロジーと幾何構造	数学の中で図形について研究する分野を幾何学といいます。幾何学の中でも図形をぐにやぐにやと連続的に変形させても変化しない性質を研究する分野をトポロジーといいます。三次元の図形(三次元多様体と専門用語でいいます)では、従来の図形の形を合同などで調べる研究とトポロジーの研究が密接に関わることが判明してきました。三次元の図形のトポロジーとその形の特徴(幾何構造)について研究をしています。
学校教育課程 理数教育コース	講師 加藤 慎一	数学的なプロセスを重視した算数・数学の教材と授業デザインに関する研究	主体的・対話的で深い学びという授業改善の視点を基軸にして、算数・数学教育における豊かな学びを具現するために必要となる数学的なプロセスを重視した教材と授業デザインについて、理論と実践の往還を大切にしながら研究を行っています。特に、小・中・高等学校における関数指導、対話のある授業づくり、授業過程におけるICTを活用した指導法に関する検討を行っています。
学校教育課程 理数教育コース	講師 田口 瑞穂	小学校理科教育における野外観察学習について	理科の学習では、生物の観察や川・土地の観察、天体の動きの観察など、様々な野外観察学習を行います。それらの学習に児童生徒が主体的に取り組むにはどうしたらよいか、楽しく学習しながらも深い学びにつながるようになるにはどのような授業方法が効果的なのか、などについて研究しています。最近では、ジオパークを利用した野外観察学習や、防災教育について研究を進めています。
学校教育課程 理数教育コース	講師 原田 勇希	理科学習における個人差に関する心理学的研究	人によって得意教科が異なることは皆さんの経験からもわかると思います。特に理科や数学に関しては特徴的な個人差があります。私はこうした個人差が生じるメカニズムを研究しています。現在では視空間認知の個人差、つまり“脳の個人差”が関わることが分かってきました。このような理科教育における現象を科学的に追究してメカニズムの解明を目指す基礎研究と、それに基づいた教育実践に取り組んでいます。
学校教育課程 特別支援教育コース	教授 武田 篤	障害のある子どもへの支援	言語病理学の立場から、発達障害や聴覚・言語障害のある子どものコミュニケーション力や言語力を育てる支援の在り方を中心に研究を進めています。具体的には、ことばのない自閉症児のコミュニケーション支援のあり方、人工内耳や補聴器を使用する子どもの早期支援のあり方、発達性読み書き障害のメカニズムの検討などに取り組んでいます。
学校教育課程 特別支援教育コース	教授 藤井 慶博	インクルーシブ教育と共生社会に関する研究	わが国では、共生社会の形成を目指して、「障がいのある子どもと障がいのない子どもがともに学ぶ」というインクルーシブ教育が進められようとしています。このような中、障がいのある人と障がいのない人が相互に理解を深め、互いの尊厳を尊重し支え合う学校教育のシステム作りや社会の在り方について研究を進めています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
学校教育課程 特別支援教育 コース	准教授 鈴木 徹	自閉症スペクトラム障害の ある子どもに関する研究	自閉症スペクトラム障害のある子どもが他者とのコミュニケーション場面でつまづいてしまう要因とその支援方法に関する研究を行っています。具体的には、コミュニケーション場面での自他の行動や因果関係の理解に着目し、「なぜできないのか」ではなく「なぜ出来るのか」という視点を大切にしながら研究を進めています。
学校教育課程 特別支援教育 コース	准教授 谷村 佳則	特別支援教育の教育課程 と授業づくり	平成19年度より特別支援教育制度がスタートし、複数の障害種に対応した特別支援学校が誕生しました。この複数の障害種に対応した特別支援学校における教育課程編成の在り方と工夫について、授業づくりとの関係から実際的な研究を行っています。また、授業づくりでは、実践研究を大切にしながら個別の指導計画の作成と活用の在り方から研究を行っています。
学校教育課程 特別支援教育 コース	准教授 前原 和明	障害児者の社会参加に向 けた教育及び就労支援	障害児者の社会参加及び就労支援をキーワードに様々な研究に取り組んでいます。具体的には、学校から社会への移行支援における連携のあり方、自己理解及び自己決定の支援方法、就労支援における支援プログラムの検討、就労アセスメントのツール開発及び方法論の検討などの研究に取り組んでいます。
学校教育課程 こども発達コース	特別教授 秋元 卓也	児童生徒が楽しいと思える 学校生活とは	児童生徒がわくわくしながら学校生活を送れるようにするには、校長先生をはじめとする先生方がどんな目標をもって、どのように児童生徒とかわかり、どうやって力や勢いを一つにまとめて行けばよいのかを検討しています。児童生徒の成長を喜びとして、自身の成長を力強く求めているような先生の姿を目指しています。
学校教育課程 こども発達コース	教授 鎌田 信	教育政策、学校経営	教育委員会と教員養成系大学との連携による教員及び、管理職育成の在り方について研究を進めています。教員の大量退職がはじまっている現状において次の校長、教頭となる管理職の育成が課題となっています。次期管理職の年齢層の教員が減少する中において、管理職の資質能力の育成を図るためにはどうすればよいのか検討しています。また、これまでの学校の再編整備についての検証も進めています。
学校教育課程 こども発達コース	特別教授 栗林 守	学校経営、教職研修の進 め方についての研究	学校という場所は子どもたちや教職員などが居て「学び」の活動が日々行われています。教員側から見ると学校は組織として動いています。子どもたちが毎日笑顔で元気に学べる学校となるために、学校が組織としてうまく動くことが必要になります。そのためにはどうすればよいのかということについて、教員の役割や研修の在り方などの面から考えています。特にスクールリーダーやミドルリーダーと呼ばれる学校を牽引する人たちに焦点を当てています。
学校教育課程 こども発達コース	特別教授 小松 睦子	学校経営に関する実践的 研究	今日の複雑化・多様化する教育課題に、学校はどのような体制でどう対応していくべきか。全教職員がベクトルを一つにした協働的な職員集団の学校、保護者や地域を巻き込み一体となった「チーム学校」、地域や行政等も含めた地域で運営する「コミュニティースクール」などを中心に、学校や地域の様々な実態に応じた学校経営に関する実践的研究に取り組んでいます。
学校教育課程 こども発達コース	教授 佐藤 修司	教育行政・学校経営におけ る法と政策	チーム学校やカリキュラムマネジメント、コミュニティースクール、教職員の長時間労働、教職員及びスクールリーダーの養成・研修など、教育行政や学校経営の歴史と現状、課題、政策を踏まえた改善方策を探っています。いじめや体罰、東日本大震災など、教育及び学校における危機管理、子どもや保護者、教職員の権利の実現も大きなテーマとしています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
学校教育課程 こども発達コース	教授 田仲 誠祐	秋田県の学力向上施策及び実践的研究リーダーの育成に関する研究	秋田県の小中学生の学力が継続的に良好な状況であることの要因について、特に、教育行政、人的要因(教員)、秋田型授業の特性に焦点を当てて研究を進めています。人的要因については、キーマンとなる実践的研究リーダーに求められる資質・能力、効果的な校内研修を進めるための基盤的要因、授業研究において教員の「深い学び」が実現するための契機を明らかにすることを目指しており、教職大学院における効果的な教員養成・研修のためのカリキュラム開発にも取り組んでいます。
学校教育課程 こども発達コース	教授 原 義彦	生涯学習施設の経営診断についての研究	地域には、すべての人々が生涯にわたって行う学習やスポーツ、文化活動などの場として、生涯学習施設があります。図書館、博物館、公民館などがその代表です。それらの施設がその機能を十分に果たしているか、施設を活用するにあたってどのような問題点があるか、改善すべき点は何かということ、病気を発見して治療することに見立てて行うのが経営診断です。経営診断にはそのための技法が必要で、目下、公民館の経営診断技法の開発を行っています。
学校教育課程 こども発達コース	教授 山名 裕子	子どもの数量やことばの理解を「遊び」から考える	みなさんは子どもの頃、どんな遊びをしていましたか？鬼ごっこ、砂場遊び、お店やさんごっこ、おままごと…それとも今から考えるとよくわからないけど楽しかった遊び…様々なことが思いだされるのではないのでしょうか。私は研究として、このような遊びの中で、結果として身につくであろう、数量の感覚や概念、そしてことばの獲得過程などを発達的に明らかにしようと思っています。それは、子どもが自ら考えていく中で獲得されるであろう「学び」の発達過程の研究でもあります。
学校教育課程 こども発達コース	准教授 小池 孝範	近代教育思想の再検討—多様な「教え」と「学び」の可能性—	現代に生きる私たちは、大人になるために教育や学校に通うことが当たり前で、必要不可欠だと思っています。しかし、一方で教育や学校が様々な問題や課題を抱えていることも事実です。こうした問題や課題に応えるための手がかりを、学校がなかった時代の教えや学び、様々な文化の中や学校以外で行われている様々な教えや学びなどから探っています。具体的には、近代以前の日本や地域社会の中での教えや学びについて研究しています。
学校教育課程 こども発達コース	准教授 櫻庭 直美	よりよい授業づくりに向けた取組について	県内の小・中学校の教員等として勤務してきた経験を基に、子どもたちが主体的に取り組む、魅力ある授業にするために必要なことについて、学力等に関する諸調査の結果分析や教師の支援の在り方、学校としての組織的な取組の効果など、様々な視点から検討しています。また、秋田の高い教育力を支えてきた教育施策や学校の特色ある取組についても関心をもっています。
学校教育課程 こども発達コース	准教授 鈴木 翔	思春期の友だち関係と恋愛に関する実証的研究	思春期の友だち関係や恋愛について、さまざまデータを分析し、実態を明らかにする研究をしています。分析に用いるデータは様々ですが、今皆さんが生きている「社会」を特定の角度から切り取ったデータを複合的に用いて、まだ知られていない真実に辿り着こうとする試みが続けています。その分析結果をもとにして、現代の学校にある様々な問題を解決する糸口を探しています。
学校教育課程 こども発達コース	准教授 瀬尾 知子	子どもにとっての食事の大切さの研究	子どもにとっての食事は、ただ栄養を取り入れることを目的としているのではなく、食べることを通して、他者とコミュニケーションをとったり、食べ方や振る舞いなどの文化を学んだりしています。そして、子どもに関わる大人がどのような行動をとるのかによって、子どもの思考や社会性に影響を与えています。その中で、実際に子どもたちにどのような影響を与えているのかを研究しています。
学校教育課程 こども発達コース	准教授 細川 和仁	子どもの学びを支える教師の「わざ」とは？	学校において、子どもの学びを支える「よい授業」とは何か？ということテーマに、学校現場におじゃましながら研究しています。「よい授業」には、子どもの学びを支える専門家(プロ)としての教師の「わざ」が関わっていると思うのです。特に最近では、先生が子どもにかけることばそのものだけでなく、ことばがけをするタイミングや間合い、視線といった、非言語的な部分の「わざ」にも関心があります。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
学校教育課程 こども発達コース	講師 保坂 和貴	子どもの遊びを豊かにする演劇的プログラムの開発	即興劇(インプロ)に影響を与えたスポーツの「シアターゲーム」をもとに、日々の遊びを豊かにする「遊びのプログラム」を考えています。子どもたちの遊びの世界は現実と想像が混じり合っています。ホールの片隅が「ケーキ屋さん」、積み木が「ショートケーキ」、うそだけどほんとの世界。遊びはそういう世界を行き来する営みなのかもしれません。そこで心や身体がどのように働き、人がどのように成長・発達するのかを解き明かすことが課題です。
地域文化学科 地域社会コース	教授 池本 敦	地域食資源の活用と健康増進を目指した食品機能学	地域には、廃棄される農作物や天然の山菜など、未利用の食資源が豊富にあります。これらを有効活用して健康食品や化粧品素材として活用する研究を行っています。特に食素材の持つ生理機能に着目し、付加価値を高めるのが目的です。また近年、食の欧米化に伴って生活習慣病が増加しています。主な原因は脂質の過剰摂取ですが、これらを防ぎ、健康寿命を延長するにはどのような食生活が望ましいのか、栄養学的研究を行っています。
地域文化学科 地域社会コース	教授 石沢 真貴	地域コミュニティと住民参加の変容に関する社会学的研究	少子高齢化、産業構造の変化、グローバル化といった社会変動が地域コミュニティに暮らす人々の社会関係にどのような影響を及ぼしているのか、どのような地域課題に対してどのように取り組もうとしているのか、地域コミュニティの変容プロセスと人々のコミュニティへの関わり方について研究をしています。伝統的な文化・産業を再評価する動向に注目し、地域再生にどのように活用できるかという課題にも関心をもって研究しています。
地域文化学科 地域社会コース	教授 和泉 浩	都市や芸術(音楽)など社会のさまざまな現象や問題について研究しています。	専門は社会学です。社会学はさまざまなことについて研究できることが魅力の一つです。これまで、社会学の理論をはじめ、都市、まちなみ・景観、まちづくり、観光、芸術・音楽、教育、メディア、医療、防災・減災、ジェンダーなどについて研究を行ってきました。現在は、それらの研究も組み合わせ、聞くこと、見ることといった感覚と社会の関係について、音楽を中心とした研究などを行っています。「好き」や「良い」「きれい」「すばらしい」と感じるものをなぜそう感じるのか? そのことを社会や歴史との関係から考えています。
地域文化学科 地域社会コース	教授 上田 晴彦	インターネット望遠鏡等を利用した地域活性化	もともとはN体シミュレーションと呼ばれる数値実験をおこない、その空間分布パターンを解析することを中心に研究をおこなってきました。しかし近年はインターネットを経由して遠隔地にある望遠鏡を操作することが出来るインターネット望遠鏡を利用し、イベント等を開催することで地域活性化を図ることをメインに研究しています。また最近では天文遺跡等を活用し地域活性化につなげることも、研究テーマとしています。
地域文化学科 地域社会コース	教授 篠原 秀一	水産物流通・大都市僻遠臨海地誌の地理学研究	生産から加工・流通・消費に至る水産関連地域を、漁獲物の水揚げ漁港を中心に経済・文化地理学的に地域調査して研究しています。地域振興上の資料ともなるように、銚子、境港、焼津、長崎など大漁港の水産関連空間を考察し、大都市僻遠臨海地域(北海道稚内・羅臼・標津・根室、鹿児島県長島・垂水、沖縄県宮古島・糸満など)の水産地誌を作って土地柄を比較対照します。北欧等海外の水産地域事例、地域水産ブランドにも関心があります。
地域文化学科 地域社会コース	教授 林 武司	地域の水環境・水資源の保全と活用	水は、地球上の地形や気候、火山活動などの様々な環境や自然現象と深くかかわる環境因子であり、また人類にとって不可欠な資源でもあります。研究では、国内外の様々な地域を対象として、水の循環のしくみ(地表水・地下水の起源や流れ方など)や水質組成などの水環境の特徴や、水環境への人間活動の量的・質的影響(水量の減少や汚染など)を調査によって明らかにし、水環境の保全や持続的な利活用のための適切な方策を検討しています。
地域文化学科 地域社会コース	教授 林 良雄	情報技術の教育、人文科学への応用	教育の分野では情報モラルに十分注意を払いながら、情報技術を取り入れると、従来にない新しい教育ができるようになります。また、人文科学では、例えば方言研究でデータベースを作り、研究者間での情報共有をしたり、地理情報システム(GIS)で地理的な分布をわかりやすく表示したり、分析することができるようになります。私は情報技術をこのような分野にどのように応用すればより効果的かを研究しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
地域文化学科 地域社会コース	准教授 植村 円香	定年退職者を核とした地域農業のあり方	農村では、新たな農業の担い手が模索されています。それでは、実際にどのような人が就農しているのでしょうか。実は、定年退職者が多いのです。定年退職者は、農地管理、健康管理、年金+ α としての所得を確保するためなど、様々な目的で就農しています。このような定年退職者の就農目的は、地域によって異なる傾向がみられます。そのため、私は、定年退職者が農業を続けることができるよう、地域の実態に即した地域農業のあり方について研究しています。
地域文化学科 地域社会コース	准教授 臼木 智昭	公共部門の経営分析	著名な経営学者のドラッカーは「マネジメント(経営学)とは教養である」と言っています。「教養」とは、ものごとを正しく捉えるための基礎的な知識のことです。企業だけでなく、国や地方自治体といった公共部門など、さまざまな組織が抱える問題を、経営学の視点で捉え直し、地域や社会がより良い方向に向かうための方策について研究しています。
地域文化学科 地域社会コース	准教授 小野寺 倫子	環境の法的保護への市民参加における民事法の役割	環境保護制度の中心は、環境によくない行為を規制し、違反には制裁を課すというものです。しかし、環境をよりよいものにしていくには規制・制裁だけでは不十分です。環境に配慮した商品やサービスを選択したり、自分の所有する土地上で環境保全を行ったりして、市民一人ひとりが環境の法的保護に積極的に参加できるような社会の仕組みを作り出していくにはどうしたらいいのか、日本とフランスの法制度を比較しながら研究しています。
地域文化学科 地域社会コース	准教授 佐々木 重雄	コンピュータープログラミングとインターネット環境	プログラミング方法論とネット環境とを行ったり来たりしながらの研究をしています。プログラミングは、コンピュータに自動処理をさせる手段として生み出されました。それが発展するにつれ、情報処理にまつわる知識を表現したり伝達したりする道具としての側面が重要視されるようになってきました。それをさらに発展させて、知識をまとめるそのまま情報処理につながり、ネットでも共有できる電子ノートブックを作れないものか、挑戦しています。
地域文化学科 地域社会コース	准教授 中澤 俊輔	災害発生時の警察の警備活動と応急対策	日本で地震や台風などの自然災害が発生した時、警察は被災地の治安確保や人心安定、人命救助のためにどのような活動を行ってきたのか、関東大震災や伊勢湾台風などの大規模災害の経験がその後の警察の警備活動と制度にどのように影響したのかを、歴史的な視点に立って研究しています。また自然災害と並んで、テロや戦争といった非常事態に際して、近代日本の警察がどのように対策を構じたのかについても研究しています。
地域文化学科 地域社会コース	准教授 成田 憲二	植物の適応戦略と気候変動による影響	植物は様々な方法で環境に適応しています。特に砂漠や高山・寒冷地では厳しい環境に適応した特殊な形や成長パターンを持っているので、それら植物の変わった生態を現地で調べることで環境と植物の関係を明らかにしています。また、これらの環境は気候変動の影響を受けやすいため、そこに生育する植物の様々な生態を調べることをとおして地球規模の変化を明らかにする研究を行っています。
地域文化学科 地域社会コース	准教授 西川 竜二	健康・快適で持続可能な居住環境とライフスタイル	建築学(特に建築環境)の専門から、持続可能で暮らしやすい建築・都市環境とライフスタイルを研究しています。現在は、冬に住宅でのヒートショック(建物内の室温温度差による血圧上昇等)で脳血管疾患等を発症してしまう高齢者が非常に多いことから、住宅の実測調査や、統計資料から県・市町村で住環境が健康に与える影響を分析するなどして実態把握と改善提案の研究を継続しています。また、まちの景観やにぎわいに関する研究なども行っています。
地域文化学科 地域社会コース	准教授 益満 環	シティプロモーションによる地域活性化	シティプロモーションとは、「地方自治体の魅力を広く情報発信することで、知名度や認知度の向上を目指す活動」です。これにより交流・定住人口の増加等の効果が期待されています。現在、学生とともに宮城県登米市、秋田県横手市、秋田県大仙市と共同で新たな街の魅力を掘り起こし、SNS等で国内外に広く情報発信しながら、地方自治体の活性化に取り組んでいます。「地方自治体が維持していくためには、どのようなシティプロモーションの方法が有効か？」を理論と実践の双方から研究しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
地域文化学科 地域社会コース	特任准教授 保坂 正智	実習を通じて学生の企画力・発信力を伸ばし、地域社会に役立つ学生を育成する。	地域文化学科3年次学生は、選択必修授業の地域連携ゼミで企業職員等との協働を通じ、クリアすべき課題等に対して自ら真摯に考え、それを周囲に発信して共通理解を深め、実践に繋げることによって社会人基礎力の向上を図っています。私は文科系の学生がその能力を最大限に発揮できる実習先を開拓しつつ、円滑に実習を行なうための態勢づくりを担っています。
地域文化学科 地域社会コース	講師 荒井 壮一	ニュー・ケインジアンのマクロ経済学と金融政策	マクロ経済学の視点から、インフレーション・ターゲティングや名目金利の下制限約(マイナス金利政策)といった内容を含む金融政策の研究をしています。近年では特に、DSGEあるいはニュー・ケインジアンと呼ばれる理論的枠組みの中で、多様な家計行動(特に異なるタイプの家計およびその人口割合・動学の変化)を考慮することによって、複雑な現実経済をできる限りの確に捉えるためのモデルを構築することに取り組んでいます。
地域文化学科 地域社会コース	講師 棟久 敬	思想・良心の自由、信教の自由が保障するもの	みなさんが日常生活において思ったこと、感じたこと、考えたことや信じているもののような心の中の活動が憲法19条の保障する思想・良心の自由や20条の保障する信教の自由によってどこまで保障されるのか、どんな精神活動であれば憲法の保障を享受できるのか、一般的には受け入れられないような考えや一般には信じられていない宗教でも信教の自由の保障を受けるのかなどの問題について諸外国の憲法と比較しながら研究しています。
地域文化学科 地域社会コース	講師 高橋 環太郎	島嶼地域を対象とした観光に関する研究	観光はほとんどの島嶼地域において地域経済や社会を考えるうえで重要な役割を果たしています。私は主に統計学の手法を用いて「観光が経済にどのように影響しているか」や「どういった要因で観光客が訪れているか」といったことを島嶼地域を対象に研究しています。ただし、観光を議論するには現地の様子を把握しなければ、薄い議論となってしまいます。対象となった地域については現地調査も行いながら実証的な研究ができるように心がけています。
地域文化学科 地域社会コース	講師 WAN JIANGYUN	国際経済と貿易の政策、発明促進の政策	私は主にゲームの理論を使って色々な経済や社会の仕組みを研究しています。ゲーム理論は人間や企業の行動を科学的に分析する理論です。今は、医療費の高騰を抑えるためにジェネリック薬品の導入は有用ですが、ジェネリック会社間の競争をゲーム理論を応用して研究しています。
地域文化学科 国際文化コース	教授 大橋 純一	日本語方言の諸相とその動態に関する研究	私の研究テーマは、日本語がたどってきた変容の歴史を方言に残る古語の実態を通して明らかにすることです。そのために、地域や人を幅広く対象に据えて実地調査を行います。また、発音の微妙な訛りなどは機械分析にかけてその特徴を客観的に把握したりもします。方言研究は、基本的には地域言語の“今”を見つめる学問ですが、同時にその“過去”や“歴史”を探る営みでもあります。この研究の面白さ、そして意義深さは、まさにその点にあるといえます。
地域文化学科 国際文化コース	教授 志立 正知	中世軍記と地域における歴史認識形成の関係性	『平家物語』をはじめとした軍記やその周辺の文学作品と、地域における歴史認識の形成の関係性について研究しています。今日でこそ文学作品と扱われる軍記ですが、江戸時代までは歴史叙述とみなされ、その記事が先祖や地域に関する歴史認識形成に影響してきました。秋田でも、前九年合戦・後三年合戦に取材した文学作品をベースとした源義家伝承が、県内各地に広がっています。こうした現象の具体的な姿や社会的・文学的背景について研究しています。
地域文化学科 国際文化コース	教授 長谷川 章	ソ連映画・アニメーションの芸術観と現代ロシア文化への影響	ソ連は抑圧的な国家でしたが、その後半期の1960年代以降は映画やアニメーションにおいて非常にユニークな作品が数多く作られました。そうした作品は良心の自由を求める人々の隠れ家のような役割も果たしていました。このような当時の映像芸術と社会の関係を考察すると同時に、現在のロシアではかつてのソ連映画がどのように受け取られているか、それが現代ロシア人の自己イメージにどのような影響を与えているかについても研究しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
地域文化学科 国際文化コース	教授 渡辺 英夫	近世北日本地域社会の研究	北日本社会を中心に、江戸時代の政治や経済の問題を研究しています。佐竹氏支配の秋田藩20万石は、日本史の教科書記述では理解しきれない側面をいくつも有しています。石高の持つ意味も、農村のあり方も特異で、史料の残り方も随分特殊です。こうした秋田藩を軸に、蝦夷地まで含めた北日本社会を、特に経済の側面から幕藩制国家の全体像に位置づけたいと考えています。高の数量解析、絵図の解読、アーカイブズの問題にも取り組んでいます。
地域文化学科 国際文化コース	准教授 内田 昌功	紀元前3世紀～10世紀の中国の都市と国家	都市を題材として中国の歴史について研究しています。都市の形態は、時代や地域によって大きく変わります。それは都市の構造に、その時代の特質や地域の文化や自然、また住んでいる人々の考え方が反映されるからです。文献資料や考古学の成果を使用し、かつての都市の姿をできる限り復元した上で、そこから社会や文化、思想、政治の状況などを読みとり、背後にある時代の特質について考えています。
地域文化学科 国際文化コース	准教授 大西 洋一	王政復古期以降のイギリス演劇	イギリス演劇を社会背景との関係から考察することが中心テーマであり、最近では特に、イギリス国内における「南北間格差」と呼ばれる社会的・文化的差異に焦点を当てながら演劇研究を進めています。とりわけ、「北イングランド」と呼ばれる地方の特色ある演劇伝統を、地域の基幹産業(たとえば炭坑業)と労働者階級および地域コミュニティの表象の変化を通じて検討することにより、現代英国演劇を多角的に捉えようと試みています。
地域文化学科 国際文化コース	准教授 小倉 拓也	現代フランス哲学を中心とした現代思想の理論的研究	古代ギリシアからの伝統を踏まえつつ、19、20世紀以降の比較的新しい時代の哲学や思想を研究しています。具体的には、19、20世紀に活躍した哲学者たちの書物を読み解きながら、そこから得られた知見をもとに、ひとが生まれ、老い、病み、死んでいくことをめぐる人間学的な観点から、言語、身体、他者、狂気、芸術、信仰、共同体などの概念化、理論化に取り組んでいます。また、湖のほとりで育ったこともあり、ライフワークとして「湖の哲学」を構想しています。
地域文化学科 国際文化コース	准教授 佐々木 千佳	イタリア・ルネサンス美術史、ヴェネツィア派絵画の作品研究	15～16世紀にかけてのルネサンス期の美術について研究しています。特に北イタリアの古都ヴェネツィアで制作された祭壇画をはじめとする絵画が、都市の成り立ちや文化的状況とどのように関わり、また役割を果たしていたのかについて考えています。あわせて、近代の黎明期に活動した芸術家たちによる作品制作状況を、当時の社会における芸術の在り方と共に考察することで、芸術家のアイデンティティ形成の特質を探っています。
地域文化学科 国際文化コース	准教授 佐藤 猛	英仏百年戦争下のフランス諸地方についての研究	ジャンヌ＝ダルクという名前を聞いたことがあるでしょうか。彼女が活躍した「百年戦争」に関心を持っています。日本で室町時代が開かれた頃、仏王と英王のあいだで始まった戦争です。この戦争が、フランスの人々にどのような影響や衝撃を与え、フランスという国がどう変貌したのかの解明が研究テーマです。最近では、仏北西部のアンジューという地方から、戦争の拡がりや終息の過程を考察しています。
地域文化学科 国際文化コース	准教授 高村 竜平	文化人類学・朝鮮半島の文化と近現代史	日本の農村研究から出発し、韓国特に済州島の文化・社会・歴史を研究しています。中心的な研究対象は墓をめぐる社会の動きです。墓は、死者の象徴でありながら、同時に不動産という「モノ」でもあり、宗教的な「ものの考え方」と、土地利用という経済・社会的な現象の両方に関わっている点がおもしろいところです。また国土の中心部と周辺部の関係にも関心があり、その一環として秋田の近現代史の研究も始めています。
地域文化学科 国際文化コース	准教授 辻野 稔哉	フランスの詩人アポリネールの芸術観と諸作品についての研究	20世紀初頭のフランスの詩人アポリネール(1880-1918)は、詩以外にも小説や美術評論などの分野で様々な活躍をしました。20世紀初頭のヨーロッパでは、新しいメディア(写真や蓄音機、映画など)の普及や、飛行機の実用化などによって人々の中に新たな感性が生まれていました。そうした中、アポリネールが言語による芸術の在り方をどのように考え、また新たな表現をどんな風に模索したかについて具体的な作品に即して研究しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
地域文化学科 国際文化コース	准教授 中尾 信一	アメリカ映画のジャンル論	アメリカ映画には、ミュージカル、西部劇、コメディ、メロドラマなど、様々なジャンルがありますが、それぞれに固有の定義や歴史の変遷があります。映画ジャンルは、観客が見たいと思う映画のタイプの指標であり、また、ジャンル映画はその時代の社会的な背景を何らかの形で反映します。単なる分類学から離れて、個々のジャンルの構造と歴史、産業内におけるジャンルの役割、観客とジャンル映画との関係、などについての研究を、個々の作品分析を踏まえて行なっています。
地域文化学科 国際文化コース	准教授 羽田 朝子	満洲国の中国人女性作家・梅娘の文学と日本イメージ	私の現在の研究は、日本の傀儡国家・満洲国で活躍した中国人女性作家である梅娘(メイニャン、1916-2013)の文学を取り上げ、彼女が日本をどのようにとらえ、それを作品化したのかを考察することです。梅娘は戦時体制へと向かいつつある時期の日本に滞在しており、その近代的なモダン文化を享受しつつ、一方で日本が軍国主義へ向かっていくのを目の当たりにします。こうした中で梅娘が抱いた複雑な思いや葛藤を、作品中に描かれた日本イメージから読み解いています。
地域文化学科 国際文化コース	准教授 Horton William Bradley	インドネシア近現代史、第二次世界大戦、医学史、女性史	20世紀のインドネシア、特に第二次世界大戦について研究しています。インドネシアに行かれた日本人女性、インドネシアの小説、慰安婦、「ジャカルタの首」に関する話、東ティモールの占領期とオーストラリア軍等を調べました。現在、第二次世界大戦中のインドネシアの公衆衛生とマラリア、戦後の日・イ・米関係史、及びインドネシアの図書館の歴史に取り組んでいます。インドネシアの占領期の日本語教育とインドネシア語の発展に関しても研究しています。
地域文化学科 国際文化コース	講師 中村 寿	ドイツ語圏(ドイツ・オーストリア・ドイツ語圏スイス)の文学と文化、ユダヤ人研究	20世紀ドイツ文学の傑作はドイツではなく、ウィーン、プラハから生まれています。しかも作家の圧倒的多数はユダヤ人でした。なぜ20世紀ドイツ文学には東欧出身のユダヤ人作家が多いのか。この問いを解決するために、わたしはドイツ語で書かれたユダヤ人新聞を読み始めました。ユダヤ人たちは、過去のドイツ文学を理想とし、それに劣らないユダヤ人の民族文学をドイツ語で想像・創造しようとしていたのです。現在も継続して、ユダヤ人によるドイツ語の出版物についての研究に取り組んでいます。
地域文化学科 心理実践コース	教授 柴田 健	来談者にとって効果的な心理臨床活動の探求	来談される方に対してどのような心理臨床活動を行うことが最も効果的なのかを、心理臨床実践を通して研究しています。特に、我々が体験する現実には社会的相互作用を通して構成されたものであると考える社会構成主義の認識論をベースに持った心理療法を、スクールカウンセリングや子ども、家族の臨床の中に取り入れて実践しています。また最近では、トラウマ体験をされた方や感情調節が難しい人への支援に関する実践研究もしています。
地域文化学科 心理実践コース	教授 中野 良樹	ひらめきはいつ、どのように生まれるのか?	私たちは時に、何かを突然ひらめくことがあります。それは難しい問題を考えている最中かもしれないし、ボーっとしている時かもしれません。共通しているのは、ひらめきは前ぶれもなく突然表れることです。なぜ、「突然だと感じる」のでしょうか?この謎について、タングラムというパズルゲームを解いている最中の手や眼球の動きを測定することで、洞察(ひらめき)が訪れるまでの思考や注意の過程を研究しています。
地域文化学科 心理実践コース	教授 北島 正人	医療心理臨床、心理療法と心理アセスメント	心理的な治療をより正確かつ効果的にするために、心理アセスメントを用いて対象者の心理状態、心理構造について評価する方法を研究しています。①自殺の準備状態ともなり得るバーンアウト(燃え尽き)症候群について、教師を対象としたバーンアウト現象の促進要因と介入プログラムの検討、②精神科患者を対象とした自殺リスクと関連する心理指標、③負の情動への態度が感情や行動の制御に及ぼす影響について研究しています。
地域文化学科 心理実践コース	准教授 木村 久仁子	福祉臨床支援をする人の支援	悩みごとや問題を抱えている人に対して、児童相談所や福祉事務所、市町村など福祉の現場で支援を行っている人達が、どうすれば相談者にとっても支援者にとってもよりよい支援ができるのかを研究しています。また、本当は困っている、あるいは周りからは困っているように見えても、自分からは支援を求めない人もいます。そのような人に対して、支援者がどのように関わるのか(あるいは関わらずに問題を解決するのか)も研究テーマの一つです。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
地域文化学科 心理実践コース	講師 綾部 直子	睡眠問題に対する心理的支援	睡眠問題(主に不眠症や概日リズム睡眠・覚醒障害)に対する心理的支援について、認知行動的アプローチから研究しています。また、教育現場における睡眠教育の普及にも携わっています。どの年代であっても睡眠とこころの健康は密接に関連しています。睡眠問題の改善により、人々がよりよい生活を送れるような支援方法の開発を目指しています。
地域文化学科 心理実践コース	講師 HOU YUEJIANG	学校の楽しさは発達とともにどう変わるか、また何によって影響されるか	発達心理学が専門です。特に児童期、思春期、青年期(およそ小学校～高校卒業くらいまで)の学校適応感に注目しています。具体的には、学校適応感にはどのような変化パターンがあるのか、学校適応感に個人差が生じる原因は何か、不登校になった児童生徒の心理学的メカニズムなどのテーマについて、質問紙調査から得られたデータを統計学的に分析して研究しています。

医学部

Faculty of Medicine

医療人育成
= 心+技+知



Challenge your future

医学部は、豊かな教養に支えられた人間性、学問の進歩に対応しうる柔軟な適応能力と課題探求・問題解決能力を養い、医学・健康科学に対する十分な理解をもとに、人々の健康と福祉に貢献できる国際的視野を備えた人材を育みます。

医学科

- ▶ 地域医療に貢献する医師
- ▶ 国際的視野を備えた医療分野の教育・研究者をめざす人

保健学科

- ▶ 看護学専攻
看護の心を理解し広く社会に貢献できる人に
- ▶ 理学療法学専攻
笑顔で寄り添い科学する心と技術で機能回復と生活を支援できる人に
- ▶ 作業療法学専攻
楽しさと生きる喜びを与えられる人に

ここに注目!

- 高い医師国家試験現役合格率
- 実践重視の医学教育
- 充実のシミュレーションセンター
- 早期臨床実習の導入
- 全県医療機関とのコラボによる統合卒前卒後教育
- 卒前からの女性医師キャリア形成支援

ここに注目!

- 高い国家試験合格率
(看護師・保健師・助産師・理学療法士・作業療法士)
- 就職率 100%(看護・理学・作業)(令和2年度)
- 大学病院をはじめとする多様な施設において、充実した臨床実習が可能
- シンガポール国立大学、チェンマイ大学との国際交流あり

■ 医学部医学科

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 形態解析学・器官構造学講座	教授 板東 良雄	難治性神経疾患の発症機序の 解明と治療法の開発	脳血管障害、認知症、多発性硬化症について病気の成り立ち や治療法の開発を行っています。また、幹細胞を用いた再生医 療の応用についても検討しています。
医学科 形態解析学・器官構造学講座	教授 板東 良雄	様々な疾患の病態形成にお ける血管-神経相互作用の 解析	近年、様々な疾患の病態形成に血管の動態変化や神経活動の 関与が明らかになってきています。そこで、心臓や腎臓などの 循環器系疾患において血管の動態変化や神経活動がどのよう に病気の形成に関わるのかに興味を持っています。
医学科 形態解析学・器官構造学講座	教授 板東 良雄 准教授 鈴木 良地	腸管粘膜免疫の抗原読み分 け機構の解明	免疫は自己と非自己を区別し、非自己を個体から排除する仕組 みです。腸管粘膜免疫組織は免疫組織ですが、非自己である 食物は排除しません。これには、非自己をさらに身体への障害 の有無で区別する仕組みが必要です。この読み分け機構を脂肪 酸結合タンパク質の発現局在を指標に研究しています。
医学科 細胞生物学講座	教授 八月朔日 泰和	神経細胞内シグナル伝達分 子の細胞内局在の解析	神経細胞はヒトを含む生物にとって、様々な臓器や細胞の動き をコントロールする為に重要な役割を担っています。神経細胞 が臓器の動きをコントロールする時に、細胞内で情報が処理さ れ、他の神経細胞などに信号を送ります。細胞内で情報が処理 される際に多くのタンパク質が働きますが、我々は、どのような タンパク質が神経細胞のどこで働いているのかを、自ら作製し た特異抗体というツールを使って、タンパク分子の局在を様々な 顕微鏡で観察できるようにして研究しています。
医学科 細胞生物学講座	准教授 山崎 正和 助教 鮎川 友紀	組織や器官がつくられる仕組 みの解析	ヒトを含む多細胞生物の器官を構成する細胞の多くは、無秩序 に存在しているわけではなく、特定の方向に従って適切に配置 されます。例えば、気管や卵管の内側は、線毛と呼ばれる小さ な毛を有する細胞によって構成され、全ての細胞の線毛が特定 の方向に動くことで異物の排除や卵子の運搬が行われます。 従って、この運動の方向性が異常となると、気管支炎や不妊な どが引き起こされます。我々は、分子遺伝学や数理モデルなど の手法を駆使して、細胞集団が同じ方向を向く仕組みを研究し ています。
医学科 細胞生物学講座	助教 吉川 究	ビタミンA貯蔵細胞について の研究	ビタミンAは眼の網膜において光を受容したり、全身の細胞で遺 伝子の転写を制御したりする大事なビタミンです。血中濃度は 常に一定範囲内におさまっており、この調節のために働いてい る細胞が肝臓のビタミンA貯蔵細胞です。この細胞は肝臓の病 気になるとコラーゲンなどを必要以上に合成し肝臓を硬くし肝機 能を低下させます。ビタミンA貯蔵細胞がどのようにビタミンAを 貯蔵するのか、またどのようにコラーゲンを産生するのかを研 究しています。
医学科 細胞生理学講座	教授 尾野 恭一 講師 岡本 洋介	心臓循環の生理学及び病態 生理学に関する研究	心房細動と呼ばれる不整脈は、心房が1分間に300回以上も不 規則に拍動することにより生じます。年齢が上がるにつれて発 生率が高くなり、高齢化が進む日本では罹患者が増えています。 動悸、息切れ、疲れやすいなどの症状が現れるだけでなく、 脳梗塞の発生率が高くなるため適切な治療が必要です。私たち は、電気生理学的手法や分子生物学的実験技術、コンピュータ シミュレーションを用いて心房細動の起こるしくみや治療法に 関する研究をおこなっています。
医学科 器官病態学講座	教授 後藤 明輝 講師 吉田 誠	肺癌、婦人科癌の病理学的 研究	患者さんの病変部を顕微鏡を用いて診断する病理診断や、病 院で亡くなった方を解剖して死因を明らかにする病理解剖を業 務として行っています。また、肺癌や婦人科癌(子宮癌、卵巣 癌)がなぜ起こるのか?、治療をしても再発や転移をして、どう して患者を死に至らせてしまうのか?といった疑問の解明に顕 微鏡での観察や、分子生物学的な実験で取り組んでいます。
医学科 器官病態学講座	教授 後藤 明輝 講師 吉田 誠	心筋細胞の形態変化とエネ ルギー学的特徴から心臓の 疾患を究明する。	心筋細胞は生命誕生から死ぬまでの間、休みなく収縮と拡張を 繰り返す、という特徴があります。もう一つ心筋細胞の構造上 の特徴が介在版の存在です。この介在版は心筋細胞が形を変化 させるときに活躍しますが、拡張型心筋症という原因不明の心 臓疾患で構造が壊れていることがわかりました。拡張型心筋症 の原因究明にせまる研究に取り組んでいます。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 代謝・内分泌内科学講座	准教授 藤田 浩樹 講師 森井 宰 助教 佐藤 雄大	糖尿病やその合併症の診断と治療に関する研究	生活習慣の欧米化に伴い、糖尿病が増加し、40歳以上では約3人に1人が糖尿病やその予備群です。糖尿病になると、腎臓や眼、心臓などに大きな障害が起きますが、これらの合併症の治療法は十分に確立されておりません。したがって、糖尿病やその合併症の的確な診断法と新規治療法の開発が求められています。当講座では、消化管から分泌されるホルモンのインクレチンに注目し、糖尿病とその合併症の治療への応用に関する研究を進めています。なまはげブルーサークルというロゴを用いた糖尿病撲滅のための啓発活動も秋田県内で行ってあります。
医学科 総合診療・検査診断学講座	准教授 植木 重治 特任准教授 守時 由起 准教授 嵯峨 知生	アレルギー性炎症の研究	現在、国民の2人に1人がなんらかのアレルギーを有しています。アレルギーは免疫細胞の過剰な反応によって起こる炎症であることがわかっていますが、その詳しいメカニズム、新しい検査と治療法を研究しています。
医学科 総合診療・検査診断学講座	准教授 植木 重治 特任准教授 守時 由起 准教授 嵯峨 知生	薬剤耐性菌と感染症に関する研究	薬剤耐性菌とは抗生物質が効かなくなった細菌のことです。抗生物質は人類の運命を大きく変えた20世紀最大の発明ですが、薬剤耐性菌が増えてしまうと、薬が効かない時代に逆戻りし、人類は再び感染症で苦しむ時代になることが危惧されています。薬剤耐性菌がどのように増えるかを解明し、耐性菌の増加を食い止めるにはどうしたらよいかを研究しています。
医学科 総合診療・検査診断学講座	准教授 植木 重治 特任准教授 守時 由起 准教授 嵯峨 知生	自己免疫性肝疾患の研究	自身の体を自身の免疫細胞が攻撃してしまう病気である自己免疫疾患の中で、肝臓の胆管上皮細胞を攻撃してしまう原発性胆汁性胆管炎という病気があります。疾患の進行を遅らせる治療法はありますが、進行を止める、あるいは治す治療法はなく、Bリンパ球と免疫の関係や新しい治療法の開発について研究をしています。
医学科 放射線医学講座	教授 橋本 学 講師 安倍 明 助教 高木 倫子 助教 和田 優貴	3D-IGBTを用いた子宮頸癌に対する根治的放射線治療技術の研究	子宮頸癌に対しては根治を目的とした放射線治療を行うことがあります。この際に子宮腔内から放射線照射を行うRALSという技術を用いますが、従来は2次元のレントゲン画像を参考に行われていたRALS治療を3次元のCT画像ベースで計画し、副作用の低減、および、治療成績の向上を目的とした研究を行っています。
医学科 放射線医学講座	教授 橋本 学 講師 安倍 明 助教 高木 倫子 助教 和田 優貴	食道癌に対する根治的・緩和的放射線治療に関する研究	食道癌に対しては根治や、症状緩和を目的とした放射線治療を行うことがあります。放射線治療の効果に影響する因子についての解析を行い、放射線治療成績を向上させることを目的とした研究を行っています。
医学科 放射線医学講座	教授 橋本 学 講師 安倍 明 助教 高木 倫子 助教 和田 優貴	甲状腺癌に対する根治的・緩和的放射線治療に関する研究	手術ができない甲状腺癌には分子標的薬という薬物療法がおこなわれますが、癌が気管や血管に浸潤していると分子標的薬は副作用のリスクが高いことがわかっています。手術できない甲状腺癌や、甲状腺癌の転移病変に対する放射線外照射の有用性や安全性について研究しています。
医学科 放射線医学講座	教授 橋本 学 講師 安倍 明 助教 高木 倫子 助教 和田 優貴	緩和的放射線治療の有効性、安全性に対する研究	癌病変による疼痛や出血に対して放射線治療が有効であることはわかっていますが、中には期待した効果が得られなかったり、思いがけない副作用が起きることがあります。緩和放射線治療の効果や副作用に影響する因子を研究することで、緩和放射線治療の有効性、安全性の向上を目指した研究を行っています。また、同一部位に再度放射線を当てる「再照射」に関する研究も行っています。
医学科 放射線医学講座	教授 橋本 学 講師 安倍 明 助教 高木 倫子 助教 和田 優貴	高齢者に対する放射線治療の研究	高齢化により、高齢の癌患者が増えています。御高齢の場合、体力の低下や合併症により、手術などの侵襲が高い治療ができない場合があります。放射線治療は比較的侵襲は少ないものを、高齢者では予期せぬ副作用を来すことがあります。高齢者に対する放射線治療の安全性や有効性についての研究を行っています。
医学科 麻酔・蘇生・疼痛管理学講座	教授 新山 幸俊 助教 山本 夏子	吸入麻酔薬による術後認知機能低下の機序と硫化水素の効果と役割	有毒ガスとして知られている硫化水素は脳内で微量に産生され、神経伝達調節・保護作用を持ち、ラットアルツハイマーモデルでの病気の進行を抑制し、記憶のシナプスモデルである海馬長期増強(LTP)の誘導を促進することが報告されています。また、高齢ラットでは海馬硫化水素の低下を認め、硫化水素を投与することでLTPの障害を軽減することもわかっています。我々は高齢者における脳内硫化水素の産生・作用機構の異常が、吸入麻酔による全身麻酔後の術後認知機能低下に関与していると仮説を立て、高齢ラットに硫化水素を投与して麻酔・手術を行い、学習・行動試験や電気生理学的実験により術後認知機能障害が抑制されるかどうかを検討しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 麻酔・蘇生・疼痛管理学講座	教授 新山 幸俊 准教授 木村 哲 助教 堀越 雄太	術後認知機能障害の発生における脳由来神経栄養因子とその前駆体が果たす役割	全身麻酔や手術後に生じる術後認知機能障害(postoperative cognitive dysfunction : POCD)が持続すると、生活の質が低下したり死亡率が高くなったりすることが知られています。POCD発生の機序は未だに解明されていません。我々は神経細胞の生存や再生、維持に重要な役割を果たしているタンパク質(脳由来神経栄養因子とその前駆体)に着目し、POCD発生においてこれらのタンパク質が果たす役割を解明するために研究しています。
医学科 麻酔・蘇生・疼痛管理学講座	教授 新山 幸俊 准教授 木村 哲 助教 堀越 雄太 大学院生 厨川 千香	術後認知機能障害におけるRhoキナーゼ阻害薬の予防効果と作用機序の探求	術後認知機能障害(postoperative cognitive dysfunction :POCD)は手術・麻酔を契機として発症する高次脳機能障害です。その発症には神経炎症による血液-脳関門の破綻が関与すると考えられていますが、Rhoキナーゼ阻害薬であるファスジルは神経炎症を抑制すると報告されています。我々はファスジルがPOCD発症を抑制する可能性があると考え、それを解明するために研究を進めています。
医学科 麻酔・蘇生・疼痛管理学講座	教授 新山 幸俊 講師 合谷木 徹 大学院生 根本 晃	術後認知機能障害における骨格筋制御因子ミオスタチンの役割	骨格筋衰退により認知機能が低下することは広く知られていません。反対に、運動負荷により認知機能が改善することも明らかになっています。術後認知機能障害に対する骨格筋量が及ぼす影響は未だ十分に解明されていません。骨格筋制御因子ミオスタチンノックアウトマウスを用いて、術後認知機能障害への影響を行動試験、海馬内神経栄養因子、免疫染色などを様々な観点から評価しています。
医学科 麻酔・蘇生・疼痛管理学講座	教授 新山 幸俊 講師 合谷木 徹 大学院生 根本 晃	高齢化に伴うサルコペニアを基軸とする術後認知機能障害の統合的理解	術後認知機能障害は高齢が1つのリスク因子となる。高齢化によりサルコペニアも発症率が上昇し、認知機能との関連も報告されています。しかし、術後認知機能障害とサルコペニアとの関連は解明されていません。われわれは不動化による2次性サルコペニアモデルラットを使用して、術後認知機能へ及ぼす影響およびサルコペニアを防止する各種の方法により、POCDを軽減できるか検討しています。その中で、運動負荷(リハビリテーション介入)による予防効果、薬剤による予防効果を調査し、原因・防止対策を探求しています。
医学科 精神科学講座	教授 三島 和夫	精神疾患の病態解明のためのレジストリ研究	精神疾患の病態解明に必要な臨床情報(精神症状、認知、覚醒、気分調節機能など)を系統的に収集して臨床研究を推進するためのプラットフォームを作成しています。
医学科 精神科学講座	教授 三島 和夫	自己免疫性脳炎と精神症状	脳炎は身体の疾患ですが、精神症状を生じ発症当初は精神科疾患と診断されるケースもあります。精神科を受診する患者さんから、脳炎を早急に診断し、適切な治療に導入する研究を行っています。
医学科 精神科学講座	准教授 太田 英伸	赤ちゃんの睡眠	赤ちゃんは胎児のときから出生後の睡眠の準備を始め、外界への適応をスムーズに行おうとしています。その睡眠のメカニズムを利用すると人工的に赤ちゃんの睡眠の発達をサポートすることも近年可能となってきました。
医学科 精神科学講座	講師 竹島 正浩	うつ病における生理的過覚醒の実態調査	生理的過覚醒と呼ばれる過剰な目覚めや過敏性はうつ病の病態の1つと考えられていますが、うつ病が回復した後に過覚醒が十分に改善していなければ再発リスクが高まります。その実態解明とメカニズムの研究を行っています。
医学科 精神科学講座	講師 竹島 正浩	精神科入院患者における静脈血栓塞栓症発症のリスク因子の探索	静脈血栓塞栓症(VTE)は突然死の原因となります。精神症状による活動性の低下や、精神医療で用いる向精神薬がVTEの発症リスクに関連しているか研究しています。
医学科 精神科学講座	助教 今西 彩	過眠症の眠気と発達障害の眠気について	過眠症での「眠気」と、発達障害での「眠気」は違うものなのかを、睡眠検査デバイス、心理検査、評価尺度などを用いて調べ、発達障害の患者さんの悩みである眠気メカニズムと治療法を研究しています。
医学科 微生物学講座	教授 海老原 敬 助教 高須賀 俊輔 助教 立松 恵	免疫細胞による炎症の記憶	最近、BCG接種によりコロナウイルス感染症を軽症化できるのではないかと噂を耳にしたことがあると思います。BCGとコロナウイルスは異なる病原体なので、免疫細胞の病原体に対する記憶という概念では、この現象は説明付きません。そこで、私たちは、免疫細胞による炎症の記憶に関する研究を進めています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 微生物学講座	教授 海老原 敬 助教 高須賀 俊輔 助教 立松 恵	遺伝子改変疾患モデルマウスの開発	病気が発症する仕組みは多くの動物で保存されています。胚性幹細胞(ES細胞)の遺伝子操作によって、特定の遺伝子機能が異常なマウスを作製しています。がんやアレルギー、炎症性疾患、神経変性疾患、心筋症、代謝異常症などのヒト疾患とよく似た病態を表すマウスを活用して、疾患原因の解明や治療法の探索を行っています。
医学科 微生物学講座	助教 高須賀 俊輔	成長障害の分子機構	細胞内のエネルギーを産生するミトコンドリアの機能障害は、さまざまな臓器・組織での臨床症状の発現につながります。私たちは、生後の発達障害を示すマウスの肝臓ミトコンドリアに、異常な脂質が蓄積していることを発見しました。この脂質の機能と発達障害が起きる仕組みの解明を進めています。
医学科 微生物学講座	助教 立松 恵	好中球分化制御についての研究	好中球は細菌感染に対する防御反応において非常に重要な細胞で、不足すると様々な感染症を引き起こします。好中球減少症に関連する好中球分化障害のメカニズムを解明するための研究を行っています。
医学科 救急・集中治療医学講座	教授 中永 士師明 准教授 奥山 学 特任助教 佐藤 佳澄	急性血液浄化療法の開発	重症患者に対して新しい血液浄化療法を開発し、生存率を向上させる研究を行っています。
医学科 救急・集中治療医学講座	教授 中永 士師明 特任助教 入江 康仁	新型コロナウイルス感染に対する漢方治療の研究	COVID-19に対する漢方治療の有効性について研究を行っています。
医学科 救急・集中治療医学講座	教授 中永 士師明	院内トリアージ方法の研究	救急搬送を円滑に行い、救命率を向上させるためのトリアージ(緊急度判定)の研究を行っています。特に秋田県内の介護施設からの救急搬送を円滑に行うために新しいシステムの構築を行っています。
医学科 分子生化学講座	教授 田中 正光 准教授 栗山 正 助教 伊藤 剛	がんのサポーター達	悪性腫瘍(がん)は癌細胞が主役として解析されてきましたが、最近はそのを取り巻く細胞達(間質細胞)が癌細胞を助ける、いえもっと積極的にリードしている様子が分かりつつあります。イクメンで優しかったジェダイもダークサイドに落ちてしまう事があるように、元々は正常組織だった間質細胞が、どういった経緯で癌細胞をサポートするようになるのか?その中には線維芽細胞、マクロファージや脂肪細胞など多種類の間質細胞が含まれます。これら癌のサポーター達の間でどういった連携をとっているのかを調べる事で、後方支援や癌細胞をけしかける事を止めさせる新規治療を目指しています。
医学科 分子生化学講座	教授 田中 正光 准教授 栗山 正 助教 伊藤 剛	ピンチの切り抜け方(がん生物学)	癌に対して多くの化学療法(抗癌剤による治療)が現在行われていますが、それらの薬に抵抗して耐性を持つことが、癌治療の大きな問題点です。実際の抗癌剤治療を受けた患者さんの標本を顕微鏡で見ると、元とはだいぶ顔つきが変わった癌細胞が多く見られる事があります。実はこれ、癌細胞が薬による死から逃れようとして変顔になっている現場ではないかと思いついて調べています。主に細胞分裂のシステムを特別にする事でピンチをやり過ごし、投薬を止めるとまた通常のモードに戻る仕組みなどを研究しています。
医学科 分子生化学講座	教授 田中 正光 准教授 栗山 正 助教 伊藤 剛	吸血鬼は伝搬する(がん生物学)	がん細胞は自身の情報を周囲に拡散して、それを受け取った正常な細胞の特性を変えさせ、がんにとって好ましい手下を作る。この手下を増やすには、癌細胞自身が一から正常細胞を教育してゆくだけでは非効率である。吸血鬼に噛まれると吸血鬼になるように、手下が新規の手下を作り出す連鎖的な機構がある事を調べています。この事はがん特有のサイトカインを産生する細胞を爆増する現象などに繋がり腫瘍の悪性度を促す原因になると考えています。
医学科 分子病態学・腫瘍病態学講座	教授 大森 泰文 助教 山本 洋平 助教 廣嶋 優子	細胞と細胞の会話を聞く	実は、細胞と細胞はいろいろな方法でおしゃべりをしています。人間社会と同じです。愛の言葉を囁き合ったり、悪口を言ったり、騙し合ったりもします。優しい言葉をかけられた細胞は素直に育ちますが、いじめられた細胞は非行に走ってしまい、このような細胞が将来「がん」になってしまうのです。細胞と細胞の会話を盗み聞きすることで、「がん」の成り立ちと制御を研究しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 分子病態学・腫瘍病態学講座	教授 大森 泰文 助教 山本 洋平 助教 廣嶋 優子	皮下脂肪と内臓脂肪のどちらが患者か	皮下に脂肪が貯まると体型が崩れます。一方、内臓に脂肪が貯まると、いろいろな病気が発生します。これは、皮下の脂肪細胞と内臓の脂肪細胞の役割が違うからです。肝臓病を引き起こすのは皮下脂肪なのか内臓脂肪なのか、また2種類の脂肪細胞はどのように役割が違うのかを研究しています。
医学科 分子病態学・腫瘍病態学講座	教授 大森 泰文 助教 山本 洋平 助教 廣嶋 優子	細胞の被害妄想とがん	ストレスを受けると多くの人は落ち込んでしまいますが、中には逆に発奮する人もいます。細胞も同じです。ストレスによりむしろ元気に、攻撃的になってしまう細胞もいます。そして、ストレスもないのに「ある」と思い込んで、意味もなく元気になる細胞さえいるのです。これが「がん」の芽になる細胞ではないかと考えて研究しています。
医学科 消化器内科学・神経内科学講座	教授 飯島 克則 准教授 松橋 保	消化器内視鏡領域のデバイス開発	消化器領域は、内視鏡を用いた診断、治療が発達しています。内視鏡検査では、細い管を口、鼻孔、肛門から体内に挿入し、消化管に生じた病変を直接観察することで診断し、さらに、病変をみながら種々の治療法が開発されています。当教室でも秋田大学工学部と共同研究して、内視鏡関連の新しい治療デバイス開発、または、東京の企業と共同して、人工知能(AI)を用いた早期がんの拾い上げに関する研究をしています。
医学科 消化器内科学・神経内科学講座	教授 飯島 克則	飲酒(アセトアルデヒド代謝酵素遺伝子多型)と消化器癌の関連	秋田県は、食道癌、胃癌、大腸がんなどの消化管癌の死亡率が高く、全国でもワースト1-2位となっています。この原因の一つとして、秋田県で多いアルコール摂取が考えられます。アルコールは、体内でアセトアルデヒドに代謝されますが、このアセトアルデヒドには発がん作用があることが知られています。当教室では、アセトアルデヒド代謝酵素活性の個人差(遺伝子多型)と種々の消化器癌との関連についての研究をしています。
医学科 消化器内科学・神経内科学講座	教授 飯島 克則	消化器癌の性差に関する研究	食道癌、胃癌、大腸癌は、いずれも男性に多く発生することが知られており、その原因として、女性では、性ホルモンであるエストロゲンに発癌抑制作用があることが知られています。当教室では、食道癌とエストロゲンの関連について研究しています。
医学科 消化器内科学・神経内科学講座	助教 下平 陽介	炎症性腸疾患における小胞体ストレス応答の研究	炎症性腸疾患の病態に小胞体ストレス応答が関与していることが推測されています。腸管上皮細胞における小胞体ストレス応答について特にオートファジーやアポトーシスとどのように関わるかに着目して研究を行っています。
医学科 消化器内科学・神経内科学講座	講師 菅原 正伯 助教 鎌田 幸子	トウレット症候群の治療研究	トウレット症候群は重症なチック症状を主症状とする治療法がまだ確立されていない疾患です。トウレット症候群に対する有効な治療薬の研究を行っています。
医学科 消化器内科学・神経内科学講座	講師 菅原 正伯 助教 鎌田 幸子	神経難病の療養環境整備に関する研究	神経難病のように医療依存度の高い療養者のケアには、特殊な知識と技術が必要とされ、またコメディカルや地域医療との連携体制も必須です。療養支援ニーズについて分析し、難病患者さんを支援するより良いシステムの構築について研究しています。
医学科 血液・腎臓・膠原病内科学講座	教授 高橋 直人	お薬はさじ加減が重要：慢性骨髄性白血病の個別化治療に関する研究	慢性骨髄性白血病に対するチロシンキナーゼ阻害剤の薬物動態の検討から個別化医療を目指す研究を行っています。血中濃度と薬物の輸送蛋白や薬物代謝に関わる酵素に個人差があることから、より副作用を減らし治療効果を高めた治療方法の開発を目指しています。
医学科 血液・腎臓・膠原病内科学講座	教授 高橋 直人	がんが飲み薬だけで治る！慢性骨髄性白血病の薬物中止試験に関する臨床研究	がんを飲み薬だけで治す慢性骨髄性白血病に対する分子標的薬はがん治療のモデルケースです。一生飲み続けなければならないと言われていたチロシンキナーゼ阻害剤の中止試験を全国の多施設共同研究として行い、治療中止を成功させるためのサロゲートマーカー・バイオマーカーの検討から、より多くの患者が治療中止できる方法を開発し、将来の治療ガイドラインにつなげたいと考えています。
医学科 血液・腎臓・膠原病内科学講座	教授 高橋 直人 助教 小林 敬宏	免疫でがんを治す：造血器腫瘍における抗腫瘍免疫の研究	日本から世界に発信された腫瘍免疫を利用したがんの免疫療法がさまざまながんで効果をあげています。血液のがんに対する骨髄移植も抗腫瘍免疫を利用した治療ですが、お薬のみで抗腫瘍免疫を利用できる可能性があります。造血器腫瘍における抗腫瘍免疫のメカニズムについて研究し、臨床応用を目指しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 血液・腎臓・膠原病内科学講座	教授 高橋 直人 助教 池田 翔 助教 北館 明宏	なぜ細胞はがん化するのか： 悪性リンパ腫のマイクロRNA の研究	悪性リンパ腫などの細胞のがん化には遺伝子の異常の累積に加え、遺伝子の調整に関わっているエピゲノムの異常が知られています。マイクロRNAはエピゲノムによる制御機構のひとつで、特定のマイクロRNAの発現の低下や上昇が細胞の増殖や細胞死であるアポトーシスに関与していることを明らかにして、今後の治療法の開発につながる研究を行っています。
医学科 血液・腎臓・膠原病内科学講座	教授 高橋 直人 准教授 亀岡 吉弘 助教 北館 明宏	治りやすさ治りにくさを予測する： 悪性リンパ腫のPET-CTを用いた 予後予測の研究	PET-CTを使った代謝マーカーとリンパ腫の遺伝子発現プロファイルを組み合わせて疾患予後を予測し、層別化治療(より予後の悪いと予測される人には強い治療を、予後が良いと予測される人には減弱した治療を)を開発する研究を行っています。
医学科 血液・腎臓・膠原病内科学講座	教授 高橋 直人 助教 池田 翔	多発性骨髄腫の根治に向けた 治療法の開発	多発性骨髄腫は血液のがんの一つで高齢者に多く、難治性の病気です。特に骨髄のニッチの低酸素環境に潜む骨髄腫細胞が治療感受性がないことが知られており、低酸素環境でがん細胞内における特徴的な分子生物学的な変化を利用した治療方法を考案しています。
医学科 血液・腎臓・膠原病内科学講座	教授 高橋 直人 助教 斎藤 雅也 助教 加賀 一	腎臓病におけるトールライク レセプターの発現に関する研究	腎臓病の一つであるIgA腎症は、感染症を契機に発症し腎にIgAが沈着する疾患である。この疾患における末梢血単核球のトールライクレセプターTLR発現について検討し、TLR4はIgA腎症で有意に上昇していることを明らかにした。現在は、糖尿病性腎症や腎硬化症の末梢血単核球におけるTLR2と4のmRNA発現の検討し、病因との関連を明らかにし、TLRの阻害が治療戦略に成り得るか検討しています。
医学科 血液・腎臓・膠原病内科学講座	教授 高橋 直人 准教授 亀岡 吉弘	新しいお薬を開発する： 造血器腫瘍の発現に関する臨床 試験	造血器腫瘍の分子生物学的な研究から多くの分子標的薬が設計され、お薬となるまで世界中で開発臨床試験が行われています。秋田大学の血液内科では世界の最先端の治療方法を提供できるように多くの開発臨床試験に参加し大学病院の臨床研究支援センターと協力しながら安全に行っています。
医学科 血液・腎臓・膠原病内科学講座	教授 高橋 直人 講師 鶴生川 久美	哺乳類の赤血球にはなぜ核 がないのか？ ヒト赤血球造血のメカニズム を明らかにする研究	哺乳類の赤血球には核がありません。赤血球造血の最終段階で核を放出(脱核)して赤血球になるためです。なぜ・どのように脱核するのかを中心に、ヒト末梢血造血幹細胞から分化誘導した赤芽球を用いて研究しています。将来的に、iPS細胞から輸血用赤血球を作り出したり、骨髄異形成症候群などの病因特定につながることを目指しています。
医学科 消化器外科学講座	教授 山本 雄造 准教授 打波 宇	肝臓のプレコンディショニング 研究	肝臓がんを治すために大量の肝切除が必要な場合、残される肝臓が少なすぎたり、肝細胞の働きが低かったり、手術操作で肝臓にストレスが加わったりすると、残った肝臓だけでは生命を維持できません。もし、残される肝臓を手術前に大きくしておいたり、肝臓を鍛えてストレスに強くしたり、潜在的な再生能力を高めたり出来れば、たくさんの患者さんを手術で治せます。動物実験等でその方法を開発し、分子生物学的手法でメカニズムを明らかにしています。
医学科 消化器外科学講座	教授 山本 雄造 助教 阿部 ゆき	外腸骨静脈の人工血管再建 の意義と安全性に関する研究	膵臓がんの手術では小腸の血液を肝臓に運ぶ門脈という血管を合併切除することでこれまで手術不能であった患者さんを助けることができるようになってきました。ところが、切り取った門脈の代わりに使う血管を脚から採取するのですが、代わりに脚が腫れてしまいます。そこで、脚の血管の欠損部を人工血管で置換した場合の安全性やリスクを評価研究をしています。
医学科 消化器外科学講座	教授 山本 雄造	肝静脈分岐における新規分 類の作成	肝臓へ流れ込んだ血液は肝静脈から出て、下大静脈という大血管を通じて心臓に戻っていきます。肝臓はたくさんの区域に分かれており、肝臓を切除する際には肝静脈の切除も必要になります。それぞれの区域から出た静脈は合流して最終的に左・中・右肝静脈の3本になります。これらの内、左肝静脈の分岐は多岐にわたるため、肝切除の際に、複雑な分岐のため、術後に血液のうっ滞が生じることがあります。そこで、CT画像を3D化し、多くの患者さんのデータを用い、肝静脈の分岐形態を細分化し、新たな静脈分岐の分類作成を試みています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 消化器外科学講座	助 教 中川 康彦	ATP依存性カリウムチャネルによるラット肝切除後の残肝増殖における遺伝子発現解析	肝切除の後、肝細胞の再生や増殖を加速させることができれば、患者さんの回復もよくなり、合併症も減らせます。肝臓のエネルギー産生の中心であるミトコンドリアに存在するイオンチャネルをある化学物質で開いてやると再生が加速されることがこれまでの研究でわかってきました。この現象を将来臨床で使えるように、また、新たな薬を開発できるようにそのメカニズムをDNAマイクロアレイなどを用いて、分子生物学的に調べています。
医学科 胸部外科学講座	教 授 南谷 佳弘 准教授 今井 一博	外科手術中に正確な癌の診断を可能にする方法の開発	抗原抗体反応を利用して、細胞内のタンパクを見る方法を「免疫染色」と言いますが、その反応には多くの時間がかかります。私たちは、電気力を借りることによって、スライドガラスに乗る液体を素早く混ぜ、反応を促進する技術を開発しています。この原理を応用することによって、それまで2時間以上かかっていた「免疫染色」の行程時間を、「20分」まで短縮することができました。手術中でも、より精度の高い癌の診断を行い、治療法を決定することができます。
医学科 胸部外科学講座	教 授 南谷 佳弘 講 師 寺田 かおり	乳癌手術中の迅速で正確なリンパ節転移診断	乳癌がいちばん最初に転移するリンパ節をセンチネルリンパ節と言います。手術でこのリンパ節を見つけ出し、手術中に顕微鏡で観察して、癌の転移があれば、他のリンパ節も切除します。転移がなければ不要な切除は省略でき、患者さんの負担の軽減につながります。上記の「外科手術中に正確な癌の診断を可能にする方法の開発」を乳癌の手術にも応用して、より正確で速い、リンパ節転移診断の方法を開発しています。
医学科 腎泌尿器科学	教 授 羽瀨 友則 准教授 成田 伸太郎 准教授 齋藤 満 講 師 沼倉 一幸	腎泌尿器疾患に対する新規の診断と治療の開発	○ロボット(=ダヴィンチ)支援手術や内視鏡手術の改良を行い、手術の侵襲(負担)をより軽くする最先端の研究や手術を行っています。 ○肥満や高脂肪食で癌が進行する、って知ってますか？近年、非常に増加傾向にある泌尿器癌の背景となっている高脂肪食や肥満の影響を分子レベルで解明しています。 ○腎移植を日本でも有数の件数施行しています。この腎移植の成績向上のための新規免疫抑制の方法や個別化医療の最先端研究を進めています。 ○腎臓、腎盂尿管、膀胱、前立腺、精巣などの癌の発生機序の分子レベルの解析と新規診断、新規治療法や新規治療標的分子を見つけています。
医学科 臨床腫瘍学講座	教 授 柴田 浩行	「がん」の作り方	明治の頃、山極勝三郎は苦心惨憺して「がん」を作った。その鍵は遺伝子にあった。今や「がん」の設計図を手にした我々は遺伝子改変技術で「がん」を作り、解析できる。
医学科 臨床腫瘍学講座	教 授 柴田 浩行 助 教 福田 耕二	What is your cancer?	「がん」にも個性がある。「がん」には弱点がある。遺伝子を解析することで、それらが分かる。「がんゲノム診療」は新しい医療の未来を切り開く。
医学科 臨床腫瘍学講座	教 授 柴田 浩行 助 教 島津 和弘	「がん」の糧道を断て！	難攻不落の「がん」を支えるライフライン、「腫瘍血管」。このアキレス腱を攻撃する治療法に挑む。
医学科 臨床腫瘍学講座	教 授 柴田 浩行 助 教 吉田 泰一	「がん」を予防できるか？	毒物ではなく、毎日の食事で、「がん」を未病のうちに抑える。そこに免疫細胞の働きは？「食食同源」の実現を目指す。
医学科 臨床腫瘍学講座	教 授 柴田 浩行 医 員 田口 大樹	がんの「クスリ」を求めて	「クスリ」はどうやって作るのか。それには神が創る場合と人が神を真似て作る方法とがある。創業はいわばトレジャー・ハンティング。誰が幸運を射止めるのか？
医学科 地域がん医療学講座	教 授 本山 悟	ロボット支援下食道癌手術	食道癌の手術は操作範囲が頸部、胸部、腹部に及ぶため、患者負担がとて大きく、高度な技量を必要とする難易度の高い手術です。私たちは、「ダヴィンチ」と呼ばれる手術用ロボットをこの食道癌手術に導入し、患者さんに対する侵襲が少しでも小さくなるように、そしてより精度の高い手術が行えるように、日々研究を重ねています。
医学科 地域がん医療学講座	教 授 本山 悟	食道癌リンパ節転移リスク診断法の開発	食道癌は容易にリンパ節転移を引き起こしやすい癌です。そして、この「リンパ節転移」が治療および治療後の経過に大きく関与しています。ところが、転移リンパ節は数mm大と非常に小さく、精度の高い画像診断機器でも完全に診断することができません。これに対して私たちは、「CRP遺伝子」を使った新規の「リンパ節転移リスク診断」法の開発を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 地域がん医療学講座	教授 本山 悟	アカデミアからみた秋田県がん医療施策	秋田県がん医療改善のためには、高いがん死亡率からの脱却、急増する高齢がん患者に対する適切ながん医療の提供、がん治療成績の地域間あるいは施設間格差の解消、マクロ施策とミクロ施策に別けた対策が必要だと考えます。私たちは秋田県内各医療圏のがん統計、社会情勢を詳細に分析し、秋田県がん医療改善策を模索しています。
医学科 心臓血管外科学講座	医員 桐生 健太郎 教授 山本 浩史	心臓血管外科周術期における骨格筋電気刺激によるリハビリテーション	心臓の手術では心臓を一度止め、その後再鼓動させる必要があります。手術の負担が大きく、術後は薬で眠った状態で、集中治療室で数日過ごすこととなります。術後のリハビリは特に高齢者において早く進めていくの理想ですが、このような理由から、自発的な運動は困難です。そこで昔のアプトロニック、今はシックスパッドの様な装置を鎮静下の患者に使用することで術後早期からのリハビリを行い、術後の筋力維持、QOLの改善への貢献を研究しています。
医学科 心臓血管外科学講座	医員 高木 大地	肺静脈心筋の電気生理学的研究	世界で一番多い心房細動という不整脈は、肺静脈という心臓ではないところにある心筋より発生することが知られています。種々の動物の肺静脈心筋の電気生理学的研究を行うことで、心房細動の原因を担う電気的な性質を明らかにするための研究を行なっています。
医学科 心臓血管外科学講座	医員 田中 郁信	術後QOL(Quality of Life:生活の質)から見た高齢者心臓血管外科手術	現在平均余命の延長に伴い80歳以上のおじいちゃん、おばあちゃんに対して手術を行う機会が増えています。手術をすることで、元気に退院できる患者さんも多くいますが、手術によって著しく体力が低下するために、術前よりも質の低い生活、場合によっては寝たきりの状態になってしまう患者さんもいます。そこで、患者さんが手術を受けるか受けないかの判断するためには、手術を受けることで自分がどのような状態になりやすいかなどの情報が非常に重要になります。手術を受けた患者さんや、受けなかった患者さんの状態を調べ、どのような患者さんの場合には手術を受けることでメリット受け、どのような患者さんの場合手術を受けないことがメリットであるかを研究しています。
医学科 整形外科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 永澤 博幸 医員 土江 博幸	糖尿病による骨や筋の萎縮予防について	動物モデルを用いて糖尿病による骨折や身体機能低下を、運動や薬が予防・改善できるか研究しています。
医学科 整形外科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 永澤 博幸 医員 土江 博幸	骨折が早く治るために	動物の骨折モデルを用いて、どうすれば骨折が早く治るか研究しています。
医学科 整形外科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 永澤 博幸 医員 土江 博幸	肥満に対する運動と薬の効果	動物モデルを用いて、肥満や骨折を運動や薬がどの程度予防・改善できるか研究しています。
医学科 整形外科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 永澤 博幸 医員 土江 博幸	慢性腎臓病による骨や筋の萎縮予防について	動物モデルを用いて慢性腎臓病に伴う骨折や筋力低下を、運動や薬が予防・改善できるか研究しています。
医学科 整形外科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 永澤 博幸 医員 土江 博幸	寝たきりにならないために	運動や薬で寝たきりにならないような対処法を研究しています。
医学科 整形外科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 粕川 雄司 助教 野坂 光司 医員 土江 博幸	骨折による痛みを減らす研究	薬物治療で骨折による痛みを減らす研究をしています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 本郷 道生 講師 粕川 雄司 医員 工藤 大輔	秋田県における脊椎手術	秋田県内の脊椎手術の数や内容を調査・分析し、脊椎の病気に対する手術の改善に取り組んでいます。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 本郷 道生 講師 粕川 雄司 医員 工藤 大輔	高齢者の転倒予防	転んで骨折することが多い高齢者の筋力や姿勢の特徴を調べ、その対策により高齢者の転倒を防ぐことを目指しています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 本郷 道生 講師 粕川 雄司 医員 工藤 大輔	高齢者に対する包括的ソーシャルサポート	高齢者に対して身体的・精神的・社会的に多方面から支援を行い、一人暮らしの多い高齢者の身体・精神・生活環境の改善に取り組んでいます。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 本郷 道生 講師 粕川 雄司 医員 工藤 大輔	脊椎手術のロコモ改善効果	脊椎の病気に対する手術が、運動機能が低下するロコモティブシンドローム(ロコモ)を予防・改善できるか検討しています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 本郷 道生 講師 粕川 雄司 医員 工藤 大輔	超高齢者に対する脊椎手術治療成績	秋田県は世界一の超高齢県であり、先進国の未来を映し出すモデル地域である。超高齢者の手術治療成績を検証しています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 本郷 道生 講師 粕川 雄司 医員 工藤 大輔	リウマチ患者の脊椎疾患	秋田県のリウマチ調査から、脊椎関連疾患の頻度と推移、薬による治療効果などを評価しています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 本郷 道生 講師 粕川 雄司 医員 工藤 大輔	頸椎疾患の手術治療成績	頸椎手術調査から治療成績を向上させる因子の解析を行っています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 本郷 道生 講師 粕川 雄司 講師 石川 慶紀 医員 工藤 大輔	秋田県における脊髄損傷の疫学調査	最も高齢化が進んでいる秋田県における脊髄損傷の受傷原因、発生率、重症度、急性期治療の動向を調査しています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 本郷 道生 講師 粕川 雄司 医員 工藤 大輔	高齢者のせぼねの変形などの病気に対する家庭でできる運動療法	高齢者で多い、せぼねの変形や、痛みに対して、家庭でできるような安全で効果のある運動の研究をしています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 本郷 道生 講師 粕川 雄司 医員 工藤 大輔	側弯症の早期発見と治療	小児期から思春期にかけて発生する側弯症は、進行すれば手術が必要になります。早期発見のため、学校検診が行われており、その効果を検証しています。さらに器具による側弯症の治療の効果を検証しています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 准教授 松永 俊樹 講師 本郷 道生	3次元筋骨格モデルを用いた、高齢者の脊柱変形の解析	3次元筋骨格モデルというコンピューターシミュレーションにより、高齢者のせぼねの変形に対する、新しいリハビリテーションや手術を再現する研究を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 粕川 雄司 医員 土江 博幸	非定型大腿骨骨折と低ビタミンD血症との関係	非定型大腿骨骨折の発生要因の一つとして、低ビタミンD血症が関係しているかを調べています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 粕川 雄司 医員 土江 博幸	神経内科疾患と骨代謝	神経疾患により体の動きに制限がある患者において、骨代謝が健常人とどのように異なっているかを調べています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 永澤 博幸 医員 土江 博幸	粘液線維肉腫の遠隔転移と予後に関する原因の解明	粘液線維肉腫という悪性腫瘍は、肺などに転移を発生させる事で命を奪う事があるため、生命予後を悪くする要因を調べています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 永澤 博幸 医員 土江 博幸	アクリジンオレンジによる軟部肉腫局所再発の抑制効果	アクリジンオレンジという試薬は、軟部組織に発生する悪性腫瘍(軟部肉腫)に対して再発を抑制する効果が期待されています。当院における軟部肉腫患者さんに対するアクリジンオレンジの効果を調べています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 永澤 博幸 医員 土江 博幸	超高齢発症の軟部肉腫症例の治療成績の検討	高齢化が進む近年、85歳以上の超高齢者に悪性腫瘍が発生する事がしばしば見られるようになったため、このような超高齢者に対して、適切な治療方法を調べています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 講師 永澤 博幸 医員 土江 博幸	骨軟部腫瘍におけるデノスマブ使用患者の骨代謝	骨に転移したがんや、骨巨細胞腫という骨腫瘍に対して、デノスマブという、骨吸収を抑制する薬剤が使用されます。この薬剤を使用する事での正常骨組織への影響を調べています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 助教 齊藤 英知 医員 齊藤 公男	変形性膝関節症に対する膝関節温存手術(膝周囲骨切り術)について	膝関節温存手術は日本で古くから発展してきた手術技術です。当科では、欧州から最新の技術を導入し、日本の技術と融合することで良好な成績を得てきました。最新の光学式歩行解析装置や各種センサーを用いてモダンな歩行解析を行い世界にアピールしています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 助教 齊藤 英知 医員 齊藤 公男	変形性膝関節症患者さんの膝関節面傾斜	歩行時の膝関節面は地面に対して平行ですが、変形性膝関節症では傾いています。最新の膝周囲骨切り術を施行するとその関節面傾斜は再度水平化していることが判明しました。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 助教 齊藤 英知 医員 齊藤 公男	変形性膝関節症の病態に関する研究	変形性膝関節症の病態については未だ未解明な部分が多いです。当科では、single photon emission computed tomographyという画像装置を用いて、病態解明に迫っています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 助教 木島 泰明 医員 河野 哲也	高齢者の股関節の骨折について	高齢者に多い股関節の骨折について、独自の分類を作成し、その分類に基づいた新しい治療体系を作ること、怪我をしてしまった高齢者がより早く社会に戻ることができる治療法を世界に向けて発信しています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 助教 木島 泰明 医員 河野 哲也	股関節の人工関節について	股関節の軟骨がすり減ってしまい、人工の関節に取り換える手術を受けなくてはならなくなった患者さんが、痛みなく、より早く社会復帰するための、独自の手術方法や独自の手術後の評価の方法などについて研究しています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 助教 齊藤 英知 助教 木島 泰明	成長期アスリートのスポーツ障害について	中学生のスポーツ選手を中心にスポーツ検診を行い、どのような競技のどのような選手にどのような怪我や障害が起こりやすいかを研究することで、怪我や障害の予防に役立っています。
医学科 整形外科科学講座	准教授 宮腰 尚久 助教 齊藤 英知 助教 木島 泰明	高齢者の膝関節の痛みについて	高齢者を中心に骨や関節に関する検診を行い、高齢者の膝関節の軟骨が減ったことによる痛みが起きるメカニズムを研究することで、高齢者が健康な状態で長く過ごせる方法を追求しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学部附属病院 リハビリテーション科	准教授 宮腰 尚久 准教授 松永 俊樹 助教 齊藤 英知 医員 齊藤 公男	高齢者の転倒防止を目的とした6軸座位バランス機能評価・訓練装置の開発	高齢者の転倒予防においてバランス機能評価は非常に重要ですが、立位及び歩行でのバランス機能評価は評価そのものが転倒リスクとなり正確なバランス機能評価を行えない場合があります。私たちは座位という安全面でのメリットを確保しながらバランス能力の評価を可能にするため、座面に水平外乱刺激を加えた状態で重心動揺が計測できる座位バランス機能評価装置を開発しました。本研究では装置を更に発展させ、座面に三次元的に任意の外乱刺激を加えられるシステムを開発しより安全で正確なバランス計測装置を開発しています。
医学部附属病院 リハビリテーション科	准教授 宮腰 尚久 准教授 松永 俊樹 医員 齊藤 公男	新型リハビリテーションロボットの開発	病気や怪我で手足が不自由な患者さんのリハビリテーションを行う新型ロボットを、理工学部機械工学科や秋田工業高等専門学校などの共同研究で開発しています。将来は、再生医療におけるリハビリテーション医療の強力なツールとして実用化が期待されています。
医学科 皮膚科学・形成外科学講座	教授 河野 通浩	皮膚バリア機能の研究からアトピー性皮膚炎を治療し、予防する	皮膚の表面にある角質は、外界から体を守るバリアとして働いており、アトピー性皮膚炎の発症にも関係していることが分かっています。私たちは、(1)培養細胞で、このバリアの重要成分であるセラミドの解析を行い、新しい治療法の開発を目指しています。さらに、(2)角質バリアの強さには、生まれつきの体質、つまり遺伝子も関係しているので、皆さんの遺伝子を解析して、アトピーだけでなく、食物アレルギーや花粉症などの予防する方法の開発を目指しています。
医学科 皮膚科学・形成外科学講座	教授 河野 通浩	皮膚の遺伝病のあたらしい治療法の開発(1)～色素異常症～	いろいろな皮膚の遺伝病が知られていますが、治療法が開発されている病気はほとんどありません。私たちは、これまでに患者さんの協力により遺伝子解析を行い、(1)遺伝性対側性色素異常症、(2)網状肢端色素沈着症の2つの皮膚の遺伝病の原因遺伝子を突き止めることに成功しました。現在、これらの病気の治療法を開発しています。
医学科 皮膚科学・形成外科学講座	教授 河野 通浩	皮膚の遺伝病のあたらしい治療法の開発(2)～拘束性皮膚障害～	命に関わるような皮膚の遺伝病もあります。遺伝子の異常によっておこる、拘束性皮膚障害は非常に稀な病気ですが、この病気の赤ちゃんは生まれて数日のうちに亡くなってしまいます。私たちは、この病気の遺伝子診断を行い、また、遺伝カウンセリングを行っています。また、新しい治療法の開発も行っています。
医学科 皮膚科学・形成外科学講座	教授 河野 通浩 医員 野口 奈津子	皮膚のバリア機能やアトピー性皮膚炎に対する細胞極性の影響	地球に北極と南極があるように、細胞にも極性があります。私たちは皮膚の細胞の極性がおかしくなった時に、皮膚のバリア機能に異常があるのか、アトピー性皮膚炎などの湿疹になりやすいのかどうか、を調べています。これによって新しい関連因子を見つけて、新しい治療法の開発につなげます。
医学科 皮膚科学・形成外科学講座	教授 河野 通浩 助教 能登 舞	皮膚がん切除後に皮膚に起こる現象の解明	皮膚がんの中で最も悪性度が高いメラノーマでは、十分切除したにも関わらず、その外側の皮膚にメラノーマが残ってしまう現象がみられます。これはメラノーマの取り残しなのか、早期の再発なのか、それとも全く別の意味を持つ細胞なのか？これを解決することで、メラノーマの手術法が変わる可能性がある研究です。
医学科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学	教授 山田 武千代 准教授 鈴木 真輔 講師 川崎 洋平 助教 小泉 洸 助教 椎名 和弘 助教 飯川 信子 助教 登米 慧	耳鼻咽喉科及び頭頸部外科学に対する新規の診断と治療の開発	1) 難治性のアレルギー性鼻炎とはどういうものかをアンケートで調査し背景を明らかにしました。 2) 難治性好酸球性副鼻腔炎・難治性上気道アレルギー疾患の新しいエンドタイプと診断・層別化医療。新規治療の開発を目指しています。カビに対するアレルギーによる副鼻腔炎の病気のメカニズム解明しています。 3) 頭頸部癌の分子レベルの解析と癌幹細胞の診断・新しい治療標的分子の同定を行っています。 4) ノーベル賞を受賞した免疫チェックポイント阻害剤と抗がん剤との組み合わせでどのように癌に効くかを明らかにしました。 5) 手術の侵襲を軽減するために、頭頸部癌および頭蓋底手術に対する内視鏡手術の改善に努めています。 6) 新生児スクリーニングで難聴がどの程度存在するか長年にわたり調査しています。
医学科 脳神経外科学講座	教授 清水 宏明 講師 高橋 和孝 助教 小田 正哉	良性脳腫瘍の最適治療とは？	良性脳腫瘍(髄膜腫や下垂体腺腫)は、悪性のものと異なり、脳組織に浸潤したり転移したりすることはありません。しかし、徐々に大きくなって、脳や脳神経を圧迫しますので、摘出術が治療の基本で、全摘できれば治癒します。そのために脳や脳神経をいかに傷つけないで腫瘍を摘出するかという手術の役割が重要な疾患です。そのための手術法、残存した場合の放射線治療との組み合わせなどを研究しています。神経内視鏡による体に負担の少ない手術も導入しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 脳神経外科学講座	教授 清水 宏明 助教 高橋 佑介	脳卒中の血管内治療	脳卒中の治療や予防に脳血管内治療が進歩してきました。脳血管が急に閉塞する脳梗塞では、血流不足に弱い脳は数時間の内に壊死してもとに戻れなくなりませんが、それを防ぐための薬物療法に加え、1mm程度の太さのカテーテルを使った脳血管内治療が普及しつつあります。また、脳動脈瘤が破裂しておきるくも膜下出血の治療や予防のため脳動脈瘤を血管内コイル塞栓やステンドで治療する方法もあります。
医学科 脳神経外科学講座	教授 清水 宏明 助教 小野 隆裕	悪性脳腫瘍の最適治療とは？	脳組織に浸潤する脳腫瘍を悪性脳腫瘍と呼んでいます。神経膠腫や膠芽腫が代表的です。治療の基本は摘出術ですが、腫瘍が浸潤した脳組織をすべて取ることはできないので、術後に放射線治療、薬物治療を併用します。このとき、腫瘍の種類によって治療効果が異なるため腫瘍を顕微鏡で観察して行う病理診断が重要となります。最近では遺伝子を含め著しい進歩があり当科でもハイデルベルグ大学などと共同研究をしています。また脳の部位別機能を測定しながら手術することで脳機能温存と最大限の腫瘍摘出の両立をはかるよう研究しています。
医学科 脳神経外科学講座	教授 清水 宏明 助教 小田 正哉	ターゲットを絞った放射線治療(定位的放射線治療)の研究	定位的放射線治療は、コンピュータで病変の場所を正確に計算し、正常脳にはできるだけ放射線がかからず、病変に集中的にかかるようにする特殊な放射線治療です。3cm未満の脳腫瘍、脳血管奇形などの病変に有効性が高く、手術の危険性が高い場合(高齢・心臓や肺などの機能低下など)や手術で取り切れなかった腫瘍などが治療対象になります。照射量や何回かの分割照射などを工夫し最適な条件を研究しています。
医学科 脳神経外科学講座	教授 清水 宏明 講師 高橋 和孝	くも膜下出血後における脳血管のれん縮に関する実験的研究	くも膜下出血の治療の第一歩は脳動脈瘤が再破裂しないよう手術または血管内治療で処理することです。しかし手術が無事終わっても、術後2週間までの間に脳血管れん縮(脳の多数の動脈が細くなって血流が低下する)がおき、ひどい場合は脳梗塞をきたして麻痺などの後遺症につながります。れん縮の原因はくも膜下血腫に接した動脈壁の炎症ですが、まだ十分解明されておらず、確実な予防や治療もありません。当科ではラットなどの脳動脈を取り出してれん縮の原因や治療を研究しています。
医学科 脳神経外科学講座	教授 清水 宏明	ラットを用いた実験的脳虚血研究 虚血後に再開通させたときの過灌流について	頸動脈などの太い動脈が非常に細くなって脳梗塞の原因になることがしばしばあります。この狭窄をとる手術や血管内治療が普及していますが、問題点として、急に太くすることによって脳への血流が増えすぎることがあります。過灌流といわれまだ理由がよくわかっていません。ラットなどでこの病気に似た状態を作成し病態を研究することで、新たな治療法の開発を目指しています。
医学科 循環器内科学講座	教授 渡邊 博之 准教授 飯野 健二	冠動脈疾患治療における冠動脈微小循環の研究	狭心症や心筋梗塞は冠動脈の動脈硬化が原因です。動脈硬化によって狭くなった血管を治療する手法として、狭い部位を特殊な風船で拡張したり、筒状の金属のメッシュ(ステント)にて拡張する方法があります。この際に動脈硬化の組織が冠動脈の末梢へ流れることにより冠動脈微小循環を閉塞すると心筋障害を引き起こします。この動脈硬化治療法の冠微小循環への影響を検討し、心筋障害の低減・心筋保護を目指した研究をしています。
医学科 循環器内科学講座	講師 寺田 健	不整脈の症状について	不整脈でも症状がない人、軽い人、苦しくて生活できない人がいます。その理由はわかっていません。無症状の人は治療が遅れて、合併症が起こります。その機序を解明する研究をしています。
医学科 循環器内科学講座	助教 鈴木 智人	狭心症に対するステントレスPCIの長期予後の研究	心臓は全身に血液を送る役割をしていますが、心臓自体にも血液が必要です。心臓に血液を送る血管を冠動脈です。冠動脈が狭くなって血液が充分行き渡らなくなる病気を狭心症と言います。カテーテルを用いて狭い血管を拡張しますが、現在はステントという金属を入れて拡張を維持するのが主流です。しかし、ステントは人の体にとっては異物です。ステントを入れない治療が長期的に問題ないかを研究しています。
医学科 循環器内科学講座	教授 渡邊 博之 助教 高木 祐介	心血管疾患に対するカテーテル介入ペーパーに関する研究	近年の医療技術の進歩により、心臓や全身の血管病、心臓弁膜症や先天性心疾患が、カテーテルにより低侵襲に治療可能となってきました。私達は、カテーテル治療の有効性や、治療を受けた患者の予後を研究すると共に、新たな治療体系の確立に取り組んでいます。
医学科 循環器内科学講座	教授 渡邊 博之 助教 佐藤 和奏	新しい超音波技術を用いた血管や心臓の評価	従来の検査では、微小血流を評価することは困難でしたが、新しい超音波技術を用いることによってこれを可視化することが可能となりました。微小血流は、炎症や創傷治癒との関連が近年注目されています。私たちは、血管炎や動脈硬化、心不全など様々な病態の早期診断、治療効果判定の発展のため、この新しい技術のさらなる活用方法を研究しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 呼吸器内科学講座	教授 中山 勝敏 特任准教授 佐藤 一洋 特任助教 奥田 佑道	肺癌のテーラーメイド治療の確立	肺癌に対する新規抗癌剤が多数開発されてきています。癌の組織型や遺伝子変異によって、使用する薬剤は確立してきていますが、人によってその効果は一定ではありません。その一つの根拠として、薬剤の血中濃度の個人差が考えられます。薬物血中濃度と予後の関係、またその血中濃度に代謝酵素の遺伝子多型が関与している可能性について研究を行っています。
医学科 呼吸器内科学講座	教授 中山 勝敏 特任准教授 佐藤 一洋 特任助教 浅野 真理子	特異性肺線維症の早期診断にむけた経皮的超音波検査の研究	特異性肺線維症は進行性に肺が線維化する予後不良な疾患です。治療のため早期診断が重要であるものの、CTを用いても早期病変の鑑別および診断は容易ではありません。経皮的超音波検査は特異性肺線維症の初期像をとらえる能力があり、また他の間質性肺疾患との鑑別にも有用な可能性があることから、その臨床応用を目指し研究しています。
医学科 呼吸器内科学講座	教授 中山 勝敏 特任准教授 佐藤 一洋	抗癌剤治療や臓器移植後に出現する非感染性肺疾患の調査	非感染性の肺疾患が抗癌剤使用後や臓器移植の数か月から数年後に出現することが示唆されています。しかし、現在でもどのような抗癌剤や移植治療がそのリスクとなっているのかは明らかにはなっていません。その危険因子を見出すべく調査を行っています。
医学科 呼吸器内科学講座	教授 中山 勝敏 講師 竹田 正秀	喘息の病態における好酸球と気道上皮細胞の関わりについての検討	喘息には好酸球という免疫細胞の活性化が重要と考えられています。好酸球は活性化すると、galectin-10というタンパク質を放出して細胞死します。このgalectin-10が気道上皮細胞の機能にどのような役割を果たすのか研究し、喘息の病態解明を目指しています。
医学科 呼吸器内科学講座	教授 中山 勝敏 講師 竹田 正秀	イノシトールリン脂質からみた喘息新規治療薬の探究	イノシトールリン脂質は、ヒトの細胞が活性化し機能を発揮する際に重要な役割を果たします。喘息は現在も多くの患者さんが悩んでいるアレルギー疾患です。喘息発症には好酸球という細胞の気道局所での存在と活性化や気道上皮細胞の活性化による粘液産生が重要です。このような観点から好酸球や気道上皮細胞の細胞機能におけるイノシトールリン脂質の役割を解明することで喘息の新規治療薬の探究を行う研究を行っています。
医学科 情報制御学・実験治療学講座	教授 齋藤 康太 助教 前田 深春	巨大分子コラーゲンの分泌機構の解明	コラーゲンは全タンパク質の約3割を占め、生体内で最も多いタンパク質ですが、小胞体で合成されたのち巨大な複合体を形成し、通常の輸送小胞に入りきらないため、分泌機構は未解明です。わたしたちの講座では、コラーゲンの小胞体からの分泌に特異的に関与するタンパク質群(cTAGE5/TANGO1/Sec12)を同定し機能解析を行ってきましたが、機能の解明にはまだまだ今後の解析が必要です。わたしたちは「巨大分子コラーゲンの分泌機構の解明」を目指しています
医学科 情報制御学・実験治療学講座	教授 齋藤 康太 助教 前田 深春	巨大分子キロミクロンの分泌機構の解明	キロミクロンはリポタンパク質の一種で、食事を取り込んだ脂肪を全身の組織に送る役割を担っていますが、これも小胞体で巨大な複合体として合成されます。最近、キロミクロンの分泌もコラーゲンとよく似た機構であることが明らかとなりましたが、詳細は不明です。わたしたちは「巨大分子キロミクロンの分泌機構の解明」を目指しています。
医学科 情報制御学・実験治療学講座	教授 齋藤 康太 助教 前田 深春	小胞体出芽部位形成機構の解明	哺乳細胞の小胞体出芽ドメイン(ER exit site)は、1つの細胞あたり数百個存在しますが、細胞周期や栄養状態などによって、その数や大きさ、局在が変化することが知られています。しかし、その分子機構はあまり明らかになっていません。私たちのグループは、最近コラーゲンの積荷受容体TANGO1がER exit siteの局在の決定にも関与することを明らかにしました。この結果を足がかりにして、高等真核生物でのER exit siteの局在がどのように決定されるのか、またER exit siteがどのように作られるのか(バイオジェネシスの分子機構)を明らかにしたいと考えています。この研究は、ER exit siteが関係する病気(ガンなど)の治療法の開発などに役立つことが期待されます。
医学科 情報制御学・実験治療学講座	教授 齋藤 康太 助教 前田 深春	肝繊維化抑制の新規標的の探索	ウイルス慢性肝炎に対する治療法の進歩により、今後非アルコール性脂肪肝炎(NASH)が慢性肝炎の主因になることが予想されることから、肝繊維化を直接阻害する治療薬の開発がますます期待されています。脂肪肝から肝繊維化に至る過程では、ビタミンA貯蔵細胞である星細胞が多量のコラーゲンを分泌する繊維芽様細胞に分化します。分化によってコラーゲン繊維が大量に分泌されること、それが蓄積されることが肝繊維化の主な要因であることはよく知られていますが、分泌動態の変化に着目した研究はあまり多くありません。私たちのグループは肝繊維化の際のコラーゲン分泌に着目することで、新たな因子を標的とした新しい肝繊維化治療薬の開発を目指します。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学科 小児科学講座	教授 高橋 勉 医学部講師 野口 篤子	遺伝性疼痛疾患の病態と 遺伝疫学研究	繰り返して疼痛を訴える遺伝性疾患の原因が近年解明されてきた。その中で、小児期に発作性に疼痛を繰り返す「小児四肢疼痛発作症」の原因が末梢神経に存在する電位依存性ナトリウムチャンネルであることが分かった。このチャンネルは末梢神経の電気刺激である活動電位の発生調節に関わっており、病態解明には電気生理学的な解析が重要である。この疾患の病態や国内における遺伝疫学などの研究を行っている。
医学科 小児科学講座	准教授 豊野 学朋	隠れ肥満が体に及ぼす影響 について	肥満状態が続くことで、心臓病や脳卒中、糖尿病の原因となり得ることが知られています。一方で肥満は美容的な問題でもあり、多くの方が気に掛けていることです。病気の予防として肥満の対策を立てることは重要ですが、誤った食事療法により「筋肉量を減らすことで体重が正常となるものの外観では分からない内臓脂肪量が多い」状態を隠れ肥満といいます。隠れ肥満は女性や若年者で増加しているとされ、近年、肥満と同等かそれ以上に病気に密接につながる危険性が示唆されています。現在、隠れ肥満が心臓や血管、ホルモンバランスの及ぼす影響を研究しています。
医学系 産婦人科学講座	教授 寺田 幸弘 准教授 熊澤 由紀代 講師 佐藤 亘 助教 白澤 弘光	難病子宮腺筋症による不妊症の患者さんへの先進医療	子宮腺筋症は子宮の壁に子宮内膜症が発症してしまう、月経困難(生理痛)不妊症などをともなう若い女性に辛い病気です。当科では日本で4番目先進医療として認定を受けた「子宮腺筋症」を手術で取り除き赤ちゃんを抱っこしていただける新しいチャレンジをしています。
医学系 産婦人科学講座	教授 寺田 幸弘 准教授 熊澤 由紀代 講師 佐藤 亘 助教 白澤 弘光	ヒト受精卵発育の連続観察による良好な受精卵の選別	秋田大では日本の大学病院では有数の年間400例の体外受精を行っています。最近受精卵の発育の挙動をタイムラプスビデオレコーダーつきの培養器で観察ができるようになりました。不妊症の女性にできるだけ負担無く妊娠赤ちゃんを抱っこいただけるように、この器械を用いた私たちのチャレンジを紹介します。
医学系 産婦人科学講座	教授 寺田 幸弘 准教授 熊澤 由紀代 講師 佐藤 亘 助教 白澤 弘光	がんが罹患してしまった若い未婚女性が将来妊娠できるように	がんが発症してしまった若い、未婚女性が恐ろしい病気の治療を乗り越えたあとに、赤ちゃんを抱っこできるように私たちは卵子や卵巣の凍結保存をおこなっています。
医学系 産婦人科学講座	教授 寺田 幸弘 講師 三浦 広志	静脈麻酔による簡便な無痛分娩	分娩時の痛み(陣痛)は誰も怖いことです。そのため、欧米では無痛分娩が一般的となっています。その方法は、背骨近くの太い神経を麻痺させて陣痛の痛みをとるものが主流です。しかし、技術の習熟が必要なことと、重篤な合併症があるため、慎重に施行するよう国から通達がありました。当教室では、点滴から麻酔薬を入れる無痛分娩を取り入れています。麻酔効果は高くありませんが、自己調節ができるため妊婦の満足度は高く、重篤な副作用もありません。希望する妊婦さんに広く提供できるよう、安全性を高める研究を続けています。
医学系 産婦人科学講座	教授 寺田 幸弘 講師 三浦 広志	音波を用いた安全な早産予知の試み	早産といって、分娩(お産)予定日からだいぶ前に分娩する病気があります。早産の赤ちゃんは未熟なため、後遺症を残したり、時に命を落とすこともあります。早産の分娩予知ができれば、産科医療の大きな進歩となります。しかし、いまだに正確な分娩時期の予測ができないのが現状です。当教室では、赤ちゃんに影響の少ない音波を用いて、赤ちゃんが生まれてくる子宮の出口の硬さを計測して分娩予知する試みをしています。早産を予防するという大きな目標に向かって研究をしています。
医学系 産婦人科学講座	教授 寺田 幸弘 准教授 清水 大 助教 菅原 多恵	遺伝性発生した子宮体癌の臨床研究	遺伝性に発生した子宮体癌を、分子学的に探索し、遺伝学的に診断する臨床研究を進めている。遺伝性子宮体癌と分医学的類似癌の特徴を明らかにし、最適な識別・検診・予防の方策を考案している。遺伝性・家族性癌の患者さんとその家族に、個別的・予防的な医療を、適切に提供するための基盤研究である。
医学系 産婦人科学講座	教授 寺田 幸弘 准教授 熊澤 由紀代 講師 佐藤 亘 助教 白澤 弘光	着床前診断の臨床と基礎研究	着床前診断とは受精卵の一部(胎盤に分化してゆく栄養膜細胞を5から10個)採取して、その受精卵の遺伝子や染色体に異常がないか調べる検査です。当科は東北の大学病院では唯一着床前診断を開始しています。着床前診断には諸般の倫理的な議論がさらに必要です。また、手技自体がヒトの命に及ぼす影響も今後さらに検証してゆかなければなりません。私たちはこの技術の基礎的な検討をもっており貴重な学術情報として発信しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
医学系 産婦人科学講座	教授 寺田 幸弘 准教授 熊澤 由紀代 講師 佐藤 亘 助教 白澤 弘光	骨盤性器脱のロボット支援手術	赤ちゃんを産んでくれた女性がお年をめされると子宮や膣が骨盤の底から下がってきてしまいます。これを骨盤性器脱と呼び、悪性疾患ではありませんが中高年の女性のQOL(生活の質)を大きく低下させます。当科では手術支援ロボットダビンチを用いた最新の骨盤性器脱手術を行い、女性のQOL向上に貢献するとともに手術技術のさらなる向上にむけた研究をおこなっています。
医学科 小児外科学講座	准教授 水野 大 助教 森井 真也子 医員 渡部 亮	腸管不全関連肝障害の機序と予防	腸管壊死や腸管機能不全によって経腸栄養が望めない患児には、経静脈栄養が必須となります。しかし経静脈栄養により胆汁うっ滞、肝機能障害を引き起こし、ついには致死的となる肝硬変へと進行することも少なくありません。この、肝硬変に至る機序の解明と、有効な予防法・治療法の研究を行っています。
医学科 社会環境医学系・法医学講座	教授 美作 宗太郎 助教 大谷 真紀	法医学画像診断の研究	法医学講座は事件や事故で亡くなった遺体の死因究明に携わっています。死因究明は主に法医学解剖を通じて行いますが、近年は解剖前にCTという機器で全身を断層撮影して死因究明に役立てる研究を行っています。本学の放射線医学講座との共同研究も行っています。
医学科 社会環境医学系・法医学講座	教授 美作 宗太郎	打撲傷の証拠化を中心とした臨床法医学研究	法医学は死者のみが対象ではありません。虐待などで暴力を受けた被害者の生体検査を行い、傷をわかりやすく証拠化する研究を行っています。
医学科 社会環境医学系・法医学講座	助教 大谷 真紀	歯科所見による個人識別の研究	法医学解剖では身元不明の遺体も少なくありません。東日本大震災では、個人識別に歯科所見が有用であることが再確認されており、歯科X線画像などの歯科所見を用いた個人識別の研究をしています。
医学科 衛生学・公衆衛生学講座	教授 野村 恭子 准教授 前田 恵理 医学部講師 岩田 豊人 助教 南園 佐知子 助教 ヨン ロザリン	少子高齢化に関する研究 働く人の健康に関する研究 メンタルヘルスに関する研究	①妊娠前の健康状態や母乳栄養成分と子どもの成長に関する研究をしています。 ②職場で使われる化学物質がヒトの神経にどのような影響を与えるかについて研究しています。また、女性の社会進出と月経・排卵など性に関する健康影響や不妊症について研究をしています。 ③秋田県の自殺に関し、若者のメンタルヘルスについて研究をしています。
医学科 医学教育学講座	教授 長谷川 仁志 准教授 ウッド ドナルド	国際認証時代における理想的医学教育開発に関する研究	各分野の医師として必須である『プロフェッショナリズム』『人間力』『医学・医療知識』『診療技術』『生涯学習能力・教育力』について、実践レベルの修得が保証される新たな教育手法を開発するための実践と研究を国内外の機関と連携して進めております。特に各種シミュレーション教育・eラーニング・パフォーマンス評価をハイブリッドした各分野・学年横断的な統合教育を実践し研究成果を世界に発信していきます。
医学科 医学教育学講座	教授 長谷川 仁志 准教授 ウッド ドナルド	初年次からの基礎医学とリンクした医療面接OSCE、心エコー・腹部エコー・聴診OSCEの教育効果に関する研究	本講座では、理想的な医学教育を展開するために、世界に先駆けて、初年次から日本語と英語による胸痛・腹痛医療面接OSCE(客観的臨床能力試験)、心エコー・腹部エコー検査・肺の聴診OSCEを実施して、臨床医学の重要ポイントを基礎に結び付けて実践的に学習する効果を検討しております。
医学科 医学教育学講座	准教授 ウッド ドナルド	文化・経済人類学、民俗学に関する研究、医学英語教育学に関する研究	文化・経済人類学、民俗学の観点から、日本における中央と地方との関係、地域社会、干拓地・農村社会の研究、経済地域の歴史と民俗史の研究を進めております。特に、17年にわたって大潟村の歴史と社会を研究し、その成果を世界に発信しております。また、医学英語教育学に関する研究も進めております。
医学科 医学教育学講座	准教授 片平 昌幸 助教 大佐賀 敦	病院情報システムに関する研究	病院の医療情報システムは非常に重要な情報を扱う上に、間違いがあってはならないものです。本講座では、電子タグ(無線で情報のやり取りができる名札のようなもの)を利用した医療情報システムの開発や、電子カルテのユーザーインターフェース(情報システムを利用者が扱うときの操作方法)の改善などといった、より高度で安全な医療情報システムをめざすための研究などを行っています。

■ 医学部保健学科

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
保健学科 看護学講座 健康科学分野	教 授 吉岡 政人	癌の診断・治療における 画像解析	患者さんの病気、特に腫瘍（できもの）を診断する際、いろいろな画像検査を行い、腫瘍がどこにあるのかを探ります。しかし、腫瘍には命にあまり影響が無く切除する必要のない良性のものや、命に係わる悪性の物、いわゆる“がん”というものがあります。がんを切除する場合、患者さんにとっては体に大きな負担がかかる手術が必要になります。そこで、画像検査をいろいろな角度から検討し、画像検査で良性か悪性かを判定できないかということの研究をしています。
保健学科 看護学講座 健康科学分野	准教授 佐々木 久長	メンタルヘルスと地域づくり 型自殺対策	身近な人が自殺を考えているときに、どのように対応したらいいでしょうか。死にたいと思っている人へのかかり方、地域での支え合いの仕組みづくりについて、実際に介入しながら研究しています。またメンタルヘルス(心の健康)とコミュニケーションの関係を分析し、特に職場や学校でみんなが仲良く助け合ってやっていく方法を検討しています。これらを通して、秋田県の自殺率を下げることに取り組んでいます。
保健学科 看護学講座 基礎看護学分野	教 授 佐々木 真紀子 准教授 長谷部 真木子 准教授 工藤 由紀子 助 教 杉山 令子 助 教 菊地 由紀子	がんの治療現場における医療 従事者や家族の健康管理 のための方策	医療現場では看護職やその他の医療従事者の健康に影響を与える因子が多くあります。その中でも、治療に使われる抗がん薬は健康な人にも様々な影響を与えることが知られています。医療従事者のみならず、一緒に暮らす家族への健康影響も懸念され、予防策を確立することが重要です。治療の現場での抗がん薬の取り扱い方や、防護策、実際の健康への影響を明らかにしながら、適切な取り扱いによる予防策など、研究を行っています。
保健学科 看護学講座 基礎看護学分野	助 教 菊地 由紀子 教 授 工藤 由紀子 准教授 佐々木 真紀子 准教授 長谷部 真木子 助 教 杉山 令子	バーチャルリアリティを用いた 看護技術教材の開発	看護学生は在学中に多くの看護技術方法を学び、学内演習を行います。これらの看護技術の中には、注射や採血など主に看護師になってから経験を重ねることで、その技術を高めることができるものもあります。このような看護師の勤やコツによる緻密な動作を、看護学生のうちに身に付けることを目指し、仮想空間で注射や採血を繰り返し練習することができる看護技術教材の開発に取り組んでいます。
保健学科 看護学講座 基礎看護学分野	准教授 長谷部 真木子 教 授 佐々木 真紀子 准教授 工藤 由紀子 助 教 杉山 令子 助 教 菊地 由紀子	看護技術の教育方法につい ての研究	看護職にとって必須なのは看護技術です。確実に分かり易く看護技術を習得できる様にするための、教育方法について研究しています。例えば医療現場は急速に変化していますが、その中でも看護技術の原理・原則を理解し、臨床で応用できる様な教材の精選や開発に取り組んでいます。
保健学科 看護学講座 基礎看護学分野	准教授 工藤 由紀子 教 授 佐々木 真紀子 助 教 菊地 由紀子 助 教 杉山 令子 准教授 長谷部 真木子	看護技術の効果の検証	患者さんに対して行う看護技術、例えば温罨法、冷罨法、足浴、手浴、マッサージなどの効果を検証する研究をしています。自律神経活動を測定したり、サーモグラフィで皮膚温を測定したり、様々な機器を使用して人の心と体にどのような影響があるかを調べています。
保健学科 看護学講座 基礎看護学分野	助 教 杉山 令子	外来がん化学療法をうける 患者の支援に関する研究	がん治療のひとつである抗がん薬治療は、近年外来でも行われています。自宅を過ごしながらかんがん薬治療を行えることは、とても多くの利点があります。しかしトラブルがおきた時などには、対処が難しいこともあります。患者さんの不都合や、必要なことを明らかにし、より安全で快適な療養生活を送れる支援ができるよう研究を行っています。
保健学科 看護学講座 基礎看護学分野	助 教 菊地 由紀子 教 授 佐々木 真紀子 准教授 長谷部 真木子 准教授 工藤 由紀子 助 教 杉山 令子 助 教 武藤 諒介	看護の職場の危険防止対策 に関する研究	看護の職場には、感染性病原体やアレルギー物質、腰痛の原因となる作業などの様々な危険因子が存在します。これらの危険は病院に勤務する看護職だけではなく、訪問看護師や看護を学ぶ学生にも起こり得る可能性があります。看護職や看護学生に起こり得る危険を低減する方策を見出すために、研究に取り組んでいます。
保健学科 看護学講座 基礎看護学分野	助 教 菊地 由紀子	看護職が健康に働き続ける ための勤務形態に関する研究	看護職には日中の勤務だけではなく、深夜の勤務や休日の電話当番など様々な勤務形態があり、日々ローテーションをしながら異なる勤務に就いている看護職もいます。より良い看護を実践するために、看護職自身が健康を維持しながら働き続けるための方策を、勤務形態の視点から考えていきます。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
保健学科 看護学講座 基礎看護学分野	助 教 武藤 諒介	看護職のバーンアウトについて	バーンアウトとは今まで熱心に働いてきた人がまさに燃え尽きたかのように意欲を失い、働かなくなることであり、抑うつ気分を伴う適応障害であるとも言われています。人と人との関わりをケアに活かす看護師特有の精神的ストレスをどのように緩和していくことができるかを、バーンアウトの視点から考えていきます。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	教授 安藤 秀明	医療技術シミュレータの開発	医療技術習得のために使用するシミュレータを開発しています。これまで、皮膚縫合、消化管吻合、乳房触診モデル、血管確保シミュレータなどを開発しました。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	教授 安藤 秀明	子どもに対するがん教育	小学生から高校生に対して「がん教育」を行い、その効果を分析しています。また、教育委員会とも連携して教育法について講習会を開催しています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	教授 安藤 秀明	治療期がん患者支援	秋田大学医学部附属病院 緩和ケアセンターで、入院中のがん患者さん、外来中のがん患者さんにごん治療を行っている医師と連携して、症状緩和療法・心理的問題軽減にあたり、最新の対策を研究しています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	教授 安藤 秀明	アクティブ・ラーニングの開発	医療系学生が能動的に問題を見だし、自ら問題解決する学習手法を開発・実践しています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	准教授 煙山 晶子	終末期の看護に関する教育方法	若い世代の看護学生でも、亡くなる前の患者さんやご家族に必要な看護援助をイメージできたり、実際に援助できるようにするための教育方法を研究しています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	准教授 眞壁 幸子 講師 利 緑 助 教 高階 淳子 助 教 宗村 暢子 助 教 赤川 祐子 准教授 煙山 晶子 教授 安藤 秀明 教授 伊藤 登茂子	美容院・理容院を活用した健康プロジェクト	秋田県は、高齢化率全国1位、がん死亡率全国1位など課題の多い県です。そこで、本研究では、地域に多く点在し、人々が定期的に足を運ぶ美・理容院を活用して、人々の健康の維持・増進ができないかを検証しています。ちなみに、秋田県的美・理容院の数は全国1位(人口に対して)です。これまでのアンケート調査から、美・理容師の健康への意識は高く、すでに様々な健康に関する取り組みが行われていることがわかりました。現在は、「美・理容院における身体活動量改善プロジェクト」を行っています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	講師 利 緑 准教授 煙山 晶子 教授 伊藤 登茂子 教授 安藤 秀明	エンド・オブ・ライフ・ケアに関する研究	がん患者および高齢者に対するエンド・オブ・ライフ・ケアについて、秋田県内の病院や訪問看護ステーション、老人介護施設で働いている看護師が学べる研修会を開催し、その教育効果について研究しています。講義の他に、少人数によるケーススタディやグループディスカッション、ロールプレイ等を通して、質の高いエンド・オブ・ライフ・ケアについて学び、死を意識してもなお人生を豊かに生きられるためのケアや支援体制が県内全域において整っていくことをめざしています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	助 教 高階 淳子 准教授 眞壁 幸子 准教授 煙山 晶子 教授 安藤 秀明	がん治療に伴うアピアランスケア(外見ケア)に関する研究	抗がん薬治療では、脱毛などの外見の変化が起こります。これは患者さんの社会生活やQOLに大きく影響しています。このようながん治療に伴う外見変化への支援を充実するための研究を行っています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	助 教 高階 淳子	リンパ浮腫ケアに関する研究	リンパ浮腫は、リンパの流れが滞ることで起こるむくみです。多くはがん治療でリンパ節を切除したり放射線治療などによって起こります。リンパ浮腫の症状を緩和するためのケアやリンパ浮腫に悩む方々の生活に関する研究しています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	助 教 赤川 祐子 准教授 眞壁 幸子 教授 安藤 秀明 教授 伊藤 登茂子	がんになった親をもつ子どもへの支援体制の構築	子どもの持てる力を信じて、親ががんであっても、子どもらしく前向きに生活が出来るような支援をどのように行なったら良いのかについて研究しています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	准教授 眞壁 幸子 助 教 須田 智美 助 教 赤川 祐子	新たな研究方法である混合研究方法における研究の質の検証に関する研究	研究の方法に関して研究しています。混合研究方法とは数字で表される量的なデータと文章などで表される質的なデータを合わせて課題を明らかにする手法です。比較的に新しい研究方法ですので、その研究方法の質を検証することが大切です。どのように質を検証するべきかの研究を行っています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	准教授 眞壁 幸子 助 教 赤川 祐子	身体活動量に関する研究	日常生活にて運動などの活動量を高めることは、糖尿病、心臓病、脳卒中、がん、うつなどの予防ができることは明らかになっています。そこで、どのような方が活動量が少なく、どのような関わりが、活動量を高めるのかを研究しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	准教授 眞壁 幸子 助教 赤川 祐子	全人工股関節術を受けた患者の退院指導について	人工股関節術とは、股関節の炎症などにより、ももとの関節を人工物に変える手術のことです。日本の生活様式に、正座、和式トイレの使用、布団で寝るなど、欧米の様式生活とは異なる状況があります。このような生活様式のため、日本では、退院指導が追加で行われます。患者さんへの影響などを検証しています。
保健学科 看護学講座 成人看護学分野	助教 須田 智美 准教授 眞壁 幸子	災害時の健康情報管理	災害時に妊婦が母子健康手帳の情報を、すぐに持ち出して避難できるように、日頃からの防災について研究しています。
保健学科 看護学講座 母性看護学分野	教授 兒玉 英也	乳児の睡眠発達に関する研究	乳児の夜泣き調査を行い、夜泣きには児の睡眠覚醒リズムが関係していることから、睡眠覚醒リズムとホルモン(メラトニン分泌)との関係について調査しました。また、乳児の睡眠構造を知るために睡眠時脳波の分析を行い、睡眠構造と児の発達との関係についても分析しました。乳児の睡眠発達を促すケア方法を明らかにする目的で研究を続けています。
保健学科 看護学講座 母性看護学分野	教授 兒玉 英也	授乳拒否と母乳の味との関係	乳児が授乳を拒否する背景には母乳の味の変化があり、その味の変化の原因として乳房トラブルがあるという仮説のもとに味覚センサーで母乳の味を分析しています。
保健学科 看護学講座 母性看護学分野	教授 兒玉 英也 准教授 成田 好美	妊娠期における歯周病菌検出の臨床的意義	妊娠期の歯周病は早産や低出生体重児の出産と関連があり、歯周病対策が必要である。妊娠初期から末期にかけて唾液を採取し、歯周病菌の4つの菌を、PCR-インベーター法にてスクリーニングしました。そして妊婦健診時のデータ、食生活、日常生活、口腔ケアとの関連について分析し結果、歯周病対策に重要な菌種はP ₁ 菌、P ₆ 菌であることがわかりましたが、口腔内からの除去は一般の口腔ケアでは難しいことから専門家によるケアの必要性が示唆されました。
保健学科 看護学講座 母性看護学分野	教授 兒玉 英也 准教授 成田 好美	出産不安を抱く妊婦の自律神経活動と心拍変動バイオフィードバックの効果	妊娠末期の出産不安が自律神経活動に与える影響を、健康な妊婦を対象に調べ、出産不安を軽減する方法として心拍変動バイオフィードバック(専用機器を使用して行う呼吸法)の効果を検証しています。
保健学科 看護学講座 母性看護学分野	教授 兒玉 英也 講師 工藤 直子	出産後の母親のストレス軽減に向けた呼吸法の効果	出産後の母親のストレスを軽減する目的としての呼吸法の効果について研究しています。小型の器械を使って、その人の呼吸リズムに合った呼吸法(心拍変動フィードバック)を毎日5～10分くらい行い、母親のストレス程度が軽減することがわかりました。
保健学科 看護学講座 母性看護学分野	助教 熊谷 真倫子	妊婦の妊娠後期の睡眠と精神健康状態が出生後の乳児の睡眠と泣きに及ぼす影響	妊婦の妊娠後期の睡眠と精神健康状態が、出生後の乳児の睡眠と泣きに及ぼす影響について研究しています。後方視的調査では、妊娠後期の睡眠やストレスが、乳児の睡眠覚醒リズムの発達、泣きや気質と関連のあることが示唆されました。
保健学科 看護学講座 小児看護学分野	准教授 大高 麻衣子	子どもの骨発達とスポーツ障害予防について	小学生、中学生を対象に超音波診断装置を用いて骨の発達について調査しています。また、骨発達に合わせて、スポーツ障害を予防できるようにストレッチなどの支援方法を検討しています。
保健学科 看護学講座 小児看護学分野	助教 齋藤 雅世	小児がん患者と家族の看護について	小児がん患者と家族を対象に、病院を退院してから必要な支援を調査して、安心して自宅での療養生活や学校生活を過ごすためのサポート体制の検討をしています。
保健学科 看護学講座 小児看護学分野	助教 菊地 麻里	子育て世代への支援に関する研究	子どもや子育て世代が、地域の様々な力を借りて、のびのび成長し、楽しく子育てができるような支援について研究しています。
保健学科 看護学講座 地域看護学分野	教授 中村 順子	訪問看護、訪問看護ステーション管理者、死生観、在宅看護システムに関する研究	訪問看護のあり方、訪問看護ステーション管理者の役割などの研究を行い在宅看護の推進に役立てたいと考えています。
保健学科 看護学講座 地域看護学分野	教授 中村 順子 助教 藤田 智恵	多様な看護提供の場に応用可能な看護技術のコアの教育に関する研究	看護の提供の場が多様化する現代において求められる看護技術のコアとは何かそれをどう教育したらよいか、訪問看護の実践をもとに研究を行っています。
保健学科 看護学講座 地域看護学分野	講師 長岡 真希子	地域医療連携、退院支援に関する研究	保健・医療・福祉に関わる職種間の連携や、病院を退院しても安心して治療を続けながら生活するための支援について研究しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
保健学科 看護学講座 地域看護学分野	講 師 熊澤 由美子	地域精神保健福祉活動に関する研究	地域で障害があっても、より心身の健康を維持し暮らせるために必要な当事者活動や住民組織活動の支援について研究をしています。
保健学科 看護学講座 地域看護学分野	助 教 藤田 智恵	地域包括ケアシステムに関する研究	高齢になっても住み慣れた地域で安心して生活するための支援について研究しています。
保健学科 看護学講座 精神保健看護学分野	教 授 米山 奈奈子	アルコール依存症の総合的医療に関する研究	アルコール依存症は精神疾患ですが、患者及び家族は、専門的医療を受けられる機会が少なくまた知識や情報が乏しいことで、相談や受診が遅れることによって、その回復が阻まれる場合が少なくありません。本研究では厚生労働科学研究の分担研究として、アルコール依存症の普及・啓発に関する研究を行い、依存症の当事者・家族がどのように相談機関に繋がることができるのかについて、視聴覚教材としてのDVDを作成しました。
保健学科 看護学講座 精神保健看護学分野	教 授 米山 奈奈子	地域における性暴力被害者支援プログラム開発及び関係機関のネットワークに関する研究	北米ではフォレンジック看護という新しい看護領域が認知され、暴力被害者への看護支援や、重篤な精神疾患等によって犯罪者となった患者の看護ケア、法廷での専門的視点からの証言活動などが含まれています。本研究では日本におけるフォレンジック看護の発展をめざし、性暴力被害者への看護支援プログラムを開発し、地域の関係機関による連携およびネットワークの構築に関する調査研究を行っています。
保健学科 看護学講座 精神保健看護学分野	助 教 小原 育子 教 授 米山 奈奈子	うつ病を有する方の家族に関する研究	うつ病はだれでも罹患する可能性がある精神疾患の一つです。うつ病を有する方への支援はもちろん必要ですが、同時に、家族への支援も重要です。そこで、うつ病を有する方の家族はどのような経験をしているのか、どのような支援を行ったら良いかを研究しています。
保健学科 看護学講座 老年看護学分野	教 授 鈴木 圭子	高齢期の健康増進とケアに関する研究	日本は長寿国として知られていますが、平均寿命の延長と共に世界各国で健康寿命の延伸が課題となっております。そのため、どのような要因やケアが高齢者の健康増進及び生活自立に関係するかを、身体・心理・社会面から調べています。
保健学科 看護学講座 老年看護学分野	講 師 永田 美奈加	高齢者の虐待防止に関する研究	高齢者介護の現場において、ケアを行うスタッフによる虐待など高齢者の人権に関わる問題が起きています。虐待防止対策を検討するために、高齢者ケア施設で働いている看護職員を対象に調査を行い、虐待に対する認識や関連が予測される要因について分析しています。
保健学科 理学療法学講座	教 授 岡田 恭司	超音波を用いた運動器の研究	超音波を用い、関節周辺の軟部組織の形状、動き、硬さなどから変形性膝関節症、野球肘、シンスプリントなどの運動器疾患の特徴を研究しています。
保健学科 理学療法学講座	教 授 岡田 恭司	足圧分布から見た運動器疾患の研究	足圧分布の測定機器を用い、変形性膝関節症、脳血管障害、変形性股関節症、骨粗鬆症など運動器疾患の特徴を研究しています。
保健学科 理学療法学講座	教 授 岡田 恭司	遅発性筋痛軽減についての研究	遅発性筋痛を軽減する方法としてオリジナルな方法を開発し、登山を例に研究しています。
保健学科 理学療法学講座	教 授 岡田 恭司	メタボリック症候群に対する運動療法の効果の研究	メタボリック症候群の実験動物を用い、運動療法による効果を遺伝子学的に研究しています。
保健学科 理学療法学講座	教 授 岡田 恭司	膝靭帯損傷の発症機序の研究	膝の靭帯損傷がどのような状況で生じやすいか、全身的な動き、関節にかかる負荷などから研究しています。
保健学科 理学療法学講座	教 授 佐竹 将宏	呼吸運動療法についての基礎的研究	人は酸素を吸って二酸化炭素を吐き出しています。その量は呼気ガス分析装置で測定できます。その呼気ガス分析装置を用いて、姿勢の維持や運動時の酸素摂取量や呼吸反応についての研究を、高齢者や呼吸器疾患患者など様々な人々を対象に行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
保健学科 理学療法学講座	教授 佐竹 将宏	治療用下肢装具による装具療法についての研究	脳卒中により麻痺症状を呈した患者に対して、立位の安定や効果的な歩行獲得のために下肢装具を用いて行われる装具療法は、理学療法の主要な治療方法のひとつです。特に発症後早期に用いられる下肢装具やその下肢装具を使った効果について研究しています。
保健学科 理学療法学講座	教授 若狭 正彦	高齢者に対する運動介入・長期継続効果の検討	高齢者に対する運動指導の介入効果とその後の長期継続効果の検討を行うことにより、高齢者の健康寿命延伸に寄与する運動プログラムを開発することを目的としています。
保健学科 理学療法学講座	教授 若狭 正彦	遠隔医療リハビリテーションシステムの開発	ICT技術・情報端末機を用いた運動指導、介護予防指導を行うことにより、大学と遠隔地の物理的・時間的・空間的制約を克服し、都会型医療と地域型医療の医療サービス格差を減らす積極的かつ継続的な予防医療的アプローチシステムを構築することを目的としています。
保健学科 理学療法学講座	教授 竹内 直行	運動麻痺に対する新しいリハビリテーションの開発	脳卒中後の運動麻痺を改善させる新しいリハビリテーションシステムを開発しています。
保健学科 理学療法学講座	教授 竹内 直行	脳刺激を用いた脳可塑性についての研究	頭皮の上から安全に実施できる脳刺激を用いて、いろいろな病気や学習後における脳の変化を研究しています。
保健学科 理学療法学講座	教授 竹内 直行	心のメカニズムの研究	相手の気持ちを考えたり共感するような心のメカニズムや記憶などに関わる心理学的な研究を行っています。
保健学科 理学療法学講座	准教授 佐々木 誠	呼吸理学療法に関する研究	呼吸理学療法は呼吸リハビリテーションの中核をなすものです。慢性閉塞性肺疾患をはじめとした慢性期の呼吸器疾患患者さん、集中治療室や新生児集中治療室で呼吸器疾患を伴っている患者さんは呼吸理学療法の対象となります。理学療法士の立場から、このような呼吸器に問題のある種々の患者さんに対するアセスメント、コンディショニング、運動トレーニング、呼吸筋トレーニングの方法や効果について研究しています。
保健学科 理学療法学講座	准教授 佐々木 誠	日常生活活動中の呼吸循環反応についての研究	歩いたり、自転車を漕いだり、食事をしたり、着替えたり、荷物を持ち上げたりと私たちは生活するために毎日のように繰り返し同じ活動をしています。このような日常生活活動の最中は、呼吸が速く深くなり心臓も速く大きく打って、多くの酸素を含んだ血液を体の隅々にまで届けます。活動の際の姿勢や動作の速さ、腕を使うか脚を使うかによって、身体にかかる負荷は異なります。呼気ガス分析器や心電図などを用いて、日常生活活動中の呼吸循環反応を検討しています。
保健学科 理学療法学講座	准教授 佐々木 誠	日常生活活動時の動作分析に係わる研究	寝返る、起き上がる、坐る、立ち上がる、歩く、階段を昇り降りするなどの動作は、様々な日常生活活動の中で基本的な動作と考えられます。健康者は毎日当たり前のように行っていますが、障害を負うと基本的な動作をうまく行うことができなくなる場合があります。この能力障害があると、理学療法によって動作を再獲得させたり、援助の方法を介護者に指導したり、支援機器を用意したりすることになります。介助者の介護負担を含めて基本的な動作の分析を行っています。
保健学科 理学療法学講座	准教授 上村 佐知子	睡眠導入剤服用後の残余効果について	睡眠導入剤を使用した高齢者やアスリートを想定して、翌日の認知や運動に薬の影響があるか調べています。
保健学科 理学療法学講座	准教授 上村 佐知子	医療従事者のメンタルヘルスや対人関係技能	医療従事者の燃えつきの実態や、そのための予防策を考えています。特に、医療従事者のストレスマネジメント能力とコミュニケーションスキルの向上は重要だと考え、調査や実験を行っています。
保健学科 理学療法学講座	准教授 上村 佐知子	睡眠に影響を与える生理学的介入	入浴は入眠や熟眠に良い影響をもたらすことがわかっていますが、特に温泉が効果的であることがわかってきました。
保健学科 理学療法学講座	准教授 上村 佐知子	温泉が人体に与える効果	人工炭酸泉や塩化物泉、硫黄泉を用いて、血行改善とこれによる筋肉痛や疲労の回復、ダイエットなどを実験しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
保健学科 理学療法学講座	助教 齊藤 明	成長期の野球肘と肘関節周囲の筋の硬さとの関係	成長期(特に小学5、6年生)の野球選手を対象に、超音波を用いて肘関節周囲の筋肉の硬さを調べ、野球肘とどのように関連するかを研究しています。またこれらの筋肉が硬くなるのは、投球フォームの影響か、姿勢や柔軟性か、または練習時間や投球数なのか、その要因についても合わせて研究しています。
保健学科 理学療法学講座	助教 木元 稔	身体に障害があるお子さんの歩き方・止まり方	身体に障害があるお子さんでは、特徴的な歩き方をするため疲れやすかったり、急に止まったりすることが難しいです。私は、バーチャルリアリティー(VR)やプロジェクションマッピングなどの最新映像技術、3次元動作解析機や床反力計という専用の動作解析機器などを用いて、身体に障害があるお子さんの歩く動作を解析しています。リハビリにゲームの要素を取り入れ、お子さんやそのご家族が行っていて楽しいと思える動作練習法の考案を目指し、研究を行っています。
保健学科 理学療法学講座	助教 照井 佳乃	歩行の不安定さを加速度計を使って検証する研究	私は加速度計を使って脳卒中患者さんや呼吸器疾患の患者さんが歩いているときの体の動きについて研究しています。脳卒中患者さんは後遺症のせいで歩くのが不安定になるといわれています。また、最近呼吸器疾患の患者さんも病気を持っていない人と比べて歩行が不安定だといわれています。加速度から調べた左右対称性が体の動きの不安定さと関係があると考えており、研究しています。
保健学科 作業療法学講座	教授 新山 喜嗣	精神医学からの死生学の研究	終末期医療においては、精神科医療が患者の精神症状だけではなくスピリチュアルペインに対しても関与をもとめられる場面が増えつつあります。ところで、治療者は患者と同様に死に臨む存在であるが、そのような意味において患者と治療者はすでに「同胞関係」にあると言えます。患者は、死から照り返される‘今’というかけがえのない時間を治療者と共有することによって、この同胞関係の存在を気づくこととなります。そこで、患者が治療者との同胞関係を実感できるための具体的な方法を、精神医学の観点から研究をしています。
保健学科 作業療法学講座	教授 石川 隆志	作業・作業活動が心身機能と生活リズムに及ぼす影響	私たちの毎日の生活は、さまざまな作業で構成されており、作業することにより心身機能が働き、ひとの生活リズムにも良い影響を及ぼすと言われています。このテーマについて講座のメンバーや大学院生とともに研究しています。
保健学科 作業療法学講座	教授 吉岡 年明	インテグリンが関わるがんの進展に関するメカニズムの解明	私達は、細胞接着分子であるインテグリンのうち、インテグリンβ4やインテグリンαVβ5などが、増殖因子の受容体などに影響を及ぼして、いくつかの種類のがんの進展に関わっていることを見つけてきました。これらのインテグリンが、他のいろいろながんとどのように関わっているのかを、そのメカニズムも含めて病理学的に研究しています。
保健学科 作業療法学講座	教授 吉岡 年明	臓器特異性転移のメカニズムの解明	私達は高肝転移細胞を作製して肝転移のメカニズムに関するいくつかの知見を得ましたが、さらに、高肺転移細胞や高腹膜播種細胞、また高リンパ行性転移細胞を樹立して解析し、それぞれの転移に特徴的な、臓器特異性転移のメカニズムの解明に向けて研究を進めています。
保健学科 作業療法学講座	教授 吉岡 年明	肝細胞がニューレグリンを産生するメカニズムの解明	大腸がん細胞が肝臓へ転移すると、肝臓の肝細胞は傷害を受けてニューレグリンという増殖因子を産生すること。また、このニューレグリンを転移したがん細胞は利用して、肝転移をさらに進めることがわかりました。なぜ肝細胞はニューレグリンを産生するのか、その解明に向けて研究を進めています。
保健学科 作業療法学講座	教授 金城 正治	障がいのある方の動作分析と福祉用具の支援	子供から高齢者までの方や障がいのある方の動作で出来ない事や大変な事を、人の発達、発生学、解剖学、運動学、人間工学をふまえながら動作の分析をしています。そして、生活での動作は家具、道具や住まいなどの環境、介助方法の影響を受けていますので、自立する為の動作方法や福祉用具の適応・製作・開発などの支援を研究しています。また、この分析を応用して介助者に多い腰痛の予防研究と予防の為の講習会をしています。
保健学科 作業療法学講座	准教授 浅野 朝秋	認知症のリハビリテーション	認知症を持つ方が生活しやすい環境の工夫や、認知症をもつたのコミュニケーションの取り方、および注意機能のリハビリテーションに関する研究をおこなっています。一例としては、認知症の方に若い頃のお話をうかがって、その内容をまとめてデジタルアルバム化し回想ツールとして活用し、効果を調べています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
保健学科 作業療法学講座	講 師 高橋 恵一	発達障害に対する作業療法	医学的な視点から特別支援教育と連携して発達障害をもつ子どもの支援を行ったり、重度の肢体不自由の子どもの福祉用具の開発に関する研究を行っています。
保健学科 作業療法学講座	講 師 久米 裕	高齢期の睡眠と活動に関する研究	高齢期における睡眠と活動の間のアンバランスな状態を改善するためのリハビリテーションを研究しています。
保健学科 作業療法学講座	助 教 津軽谷 恵	高齢者の心身機能と生活時間構造について	高齢者の健康を生活時間構造という視点から考察するために、障害高齢者や地域在住高齢者の身体機能(筋力やバランス能力、柔軟性、歩行能力など)や精神機能(うつ状態など)・認知機能・社会的機能(コミュニケーション能力や他者との関係性など)と様々な日常生活に費やす時間との関連について研究をしています。
保健学科 作業療法学講座	助 教 石井 奈智子	精神障害者に対するリハビリテーション	精神障害者の生活上の困難を理解し、生活が良い方向に向かうための作業療法プログラムの検討や有効性についての研究に取り組んでいます。

理工学部

Faculty of Engineering Science

未来を生き抜く
チカラを育む



Challenge your future

理工学部では、医理工連携による医療・福祉機器の開発や健康寿命延伸のエイジ工学、航空機産業振興の秋田発イノベーションなど、世界と勝負できる最先端の研究開発を推進しています。あなたの未来を生き抜くチカラを育みませんか。

生命科学科

- ▶生命科学コース
生命の不思議を科学し、医療や産業界に貢献

数理・電気電子情報学科

- ▶数理科学コース
数理の科学で自然の不思議を解明
- ▶電気電子工学コース
次世代のエネルギー技術とエレクトロニクスを担う
- ▶人間情報工学コース
人の暮らしを豊かにする情報通信技術を創造

物質科学科

- ▶応用化学コース
新しい化学技術の可能性を探る
- ▶材料理工学コース
先端機能材料の開発を担う

システムデザイン工学科

- ▶機械工学コース
輸送機・エネルギーからナノテク・福祉・医療に至る基盤技術を担う
- ▶土木環境工学コース
地球環境に配慮した社会基盤整備の創造

ここに注目！

- 6年一貫教育(学部4年+大学院博士前期課程2年)で、社会を生き抜く理系人材を育成
- 課題解決型学習による、行動力、対人力、創造力の養成
- 理系博士号を修得した外国人教員による英語教育でグローバルなプレゼンテーション能力UP!
- 医理工連携コース(大学院)で、未来の高齢化社会を担う人材を輩出!
- 国際通用性のある技術者教育(JABEE認定)

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
生命科学科 生命科学コース	教授 涌井 秀樹	ヒトと病気について研究し医療に貢献する	人体の正常構造と機能、日本人に多い病気の特徴について、最新の動向を理解した上で、健康維持と病気に関するテーマで、広く研究を進めています。病気の研究では、特に血液・腎臓・膠原病を対象とし、新しい診断法の開発と治療薬の作用機序の研究を行っています。また、ヒトの病気の成り立ちを理解する上で、進化生物学の視点も重要であり、ヒトと魚類の解糖系酵素生化学的特性について、比較研究を行っています。
生命科学科 生命科学コース	教授 疋田 正喜 教授 久保田 広志 講師 藤田 香里 助教 田村 拓 助教 本田 晴香	遺伝子制御による病気の治療法の開発を目指した研究	様々な病気から身体を守っている免疫系で働いている細胞群のうち、主にリンパ球の分化や活性化に重要な分子を発見し、その役割を遺伝子工学や細胞工学の手法を用いて動物の個体レベルで明らかにしようとしています。また、がん抑制遺伝子である p53 と老化の関係についても研究しています。さらに、共焦点レーザー顕微鏡などで細胞内のタンパク質を可視化することで、様々な疾患の原因となる異常タンパク質の分解機構を明らかにしたいと考えています。
生命科学科 生命科学コース	教授 藤原 憲秀	生命現象を制御する有機化合物の創成	生命は様々な生体分子間の相互作用により支えられています。相互作用は生体分子と比較的小さい分子量の物質(小分子)の間でも起こります。その相互作用を解析すると、新たな生体分子の機能を発現できる可能性があります。この小分子と生体分子の相互作用による生命現象の制御の様子を詳しく解析するため、生物活性を持つ天然由来の小分子を精密に合成する研究や、人工的な改変を加えた分子を創出する研究を展開しています。
生命科学科 生命科学コース	准教授 秋葉 宇一	ナノバイオ化学操作電極の創生	ナノサイエンスとナノテクノロジーは、これからの生命・医療の新たな発展への道を切り拓く可能性を秘めた挑戦的な科学と技術です。本研究では分子ナノテクノロジーを駆使して、ナノバイオ電極上にユニークな分子機能インターフェースを精密に化学構築します。作製したナノバイオ化学操作電極を用いて、生細胞内をin vivoで電気化学操作することができれば、新しい生命化学操作技術の開発につながると期待しています。
生命科学科 生命科学コース	准教授 近藤 良彦	生物機能を模倣する分子の合成とその機能性の解明	ある分子が他の分子を認識・識別する性質を「分子認識能」と言います。この分子認識は生体内での様々な有機分子やイオンの識別だけでなく、産業的にも重要な要素となっています。我々は、主に大環状化合物を基本骨格として新規有機分子を合成し、その分子の3次元構造と分子認識能について研究しています。更に、それらの分子の分子間相互作用を明らかにし、分子集合体の構造と性質についても研究しています。
生命科学科 生命科学コース	教授 尾高 雅文 准教授 天辰 禎晃 助教 桐明 絢	タンパク質の形と働きを知り、産業に導く研究	タンパク質には、例えばヒトには10万種類が存在すると考えられ、様々な生命現象で主役を担っています。我々は、産業用触媒として役立つモノ、環境浄化に役立つモノ、あるいは、ナノマテリアル材料となるモノなど、重要なタンパク質を選択し、それらの働き(機能)と形(構造)を分子レベルで明らかにすることで、科学技術の発展や環境に優しい社会の実現に貢献する研究を行っています。また、秋田県の県魚であるハタハタのタンパク質の性質を調べることで、地域資源の活用、地域貢献を目指して研究しています。
生命科学科 生命科学コース	准教授 松村 洋寿	タンパク質の分子レベルの解析に基づいた薬の作用機序解明と異常タンパク質が原因となる腎疾患の発症機序解明を目指した研究	多種多様なタンパク質の働きは生命現象を支えており、異常なタンパク質が生産されたり、タンパク質が異常な働きをすると、様々な疾患の原因となります。多くの薬は、タンパク質をターゲットとして特異的に結合することにより働きます。我々は、作用機序が不明である薬のターゲットタンパク質を探索し、薬との結合を分子レベルで明らかにすることで、薬の作用機序や副作用の発症原因を解明したいと考えています。また、腎疾患の原因となる尿タンパク質の性質や形を分子レベルで明らかにすることで、腎疾患が発症する原因を解明したいと考えています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
物質科学科 応用化学コース	教授 寺境 光俊 講師 松本 和也	新規熱可塑性エラストマーの合成	熱可塑性エラストマーとはゴムのような弾力性と熱可塑性プラスチックの加工性を兼ね備えた材料で、ペンのグリップのゴムやサンダルの底などに使われている材料です。我々は分子レベルから高分子の構造をデザインし、合成して機能を測定しています。分岐高分子や自己修復材料など従来にはない新しい材料の開発も行っています。
物質科学科 応用化学コース	教授 寺境 光俊 講師 松本 和也	生分解性高分子の合成と生体分野への応用	ポリ乳酸などの生分解性高分子は自然界で加水分解されることから、環境に優しい高分子です。我々は生分解性高分子を生体内で無毒で吸収・分解されることに着目し、生体内に埋め込み可能な新しい生分解性高分子の開発を行っています。医学部との共同研究を行っており、材料界面が血液と接触した時の挙動や分子構造と加水分解特性について検討しています。
物質科学科 応用化学コース	教授 寺境 光俊 講師 松本 和也	新規希少金属回収剤の開発	パラジウムや白金、ロジウムは触媒や宝飾品などに用いられる希少で価値の高い金属であり、使用済み製品からのリサイクルが重要です。我々はこれらの希少金属を廃液から回収するための回収剤を分子レベルで設計・合成し、実用性の高い回収剤の開発を目指し、研究を行っています。
物質科学科 応用化学コース	教授 加藤 純雄 准教授 小笠原 正剛 助教 齊藤 寛治	環境浄化材料の開発	環境汚染物質、特に自動車から大気中に放出される排ガス中の有害物質を窒素、水などの無害な物質に変換する、「排ガス浄化触媒」の開発をしています。浄化触媒には白金、パラジウムなどの高価なレアメタルが用いられているため、これらの金属の使用量を減らしつつ、従来よりも浄化性能を高めるための新たな物質、材料の合成を行っています。
物質科学科 応用化学コース	教授 加藤 純雄 准教授 小笠原 正剛 助教 齊藤 寛治	機能性多孔質材料や有機無機複合体の調製と評価	私達の生活の中では様々な“多孔質材料”が使われておりますが、一般的な“珪藻土”は1マイクロメートル程度の細孔を持ち、“ゼオライト”の多くは1ナノメートル以下の細孔を持っています。秋田県でも採掘されているこれらの天然多孔質材料のほか、研究室で“新規に調製したメソポーラスマテリアル”の機能について評価しています。また、無機層状化合物と有機化合物から得られる“有機無機複合体”の“酸塩基触媒活性評価”を行っています。
物質科学科 応用化学コース	教授 加藤 純雄 准教授 小笠原 正剛 助教 齊藤 寛治	環境浄化・エネルギー製造プロセスを目指した光触媒の開発	光触媒は光エネルギーを利用して化学反応を促進することができる材料です。太陽光、蛍光灯やLEDといったありふれた光源と固体光触媒を用いた有害物質の分解無害化や水からの水素生成は、環境浄化・クリーンなエネルギー製造プロセスとして注目を浴びています。当研究室では“層状構造”を有する光触媒を用いることにより、従来よりも高活性/高機能な光触媒を調製するユニークな手法を開発することを目指しています。
物質科学科 応用化学コース	教授 村上 賢治 助教 中村 彩乃	天然炭素資源からの水素製造触媒の開発	水素は酸素と反応させることでエネルギーを取り出すことができます。しかもこの反応では水しか生成しないので、クリーンなエネルギーとすることができます。私たちは未利用の天然炭素資源である石炭(亜瀝青炭や褐炭)やバイオマス(樹木や稲わらなど)を高温で水蒸気と反応させると水素が発生することに注目し、水素を低温で効率良く製造するための安価な触媒の開発を行っています。
物質科学科 応用化学コース	教授 村上 賢治 助教 中村 彩乃	温度に応答する吸着剤の開発	高分子の中には水溶液中で低温では膨張、高温では収縮するものがあります。この高分子と吸着剤を複合させると、温度によって吸着挙動が変化する吸着剤を作ることができますと期待されます。高分子と吸着剤を複合させる方法の開発および合成した複合体の吸着挙動の温度依存性の検討を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
物質科学科 応用化学コース	教授 村上 賢治 助教 中村 彩乃	濁水処理のための新規薬剤の開発	発展途上国では、生活に利用している水がとても濁っていたり、有害な重金属イオンや細菌を含んでいることが問題とされています。私たちは、有害な金属イオンを除去した後、濁りの原因となる細かい土の粒子を集め、きれいな水と分離するための新しい薬剤の開発をしています。この薬剤は、放射性セシウムを含む濁水や大規模工事(新幹線用線路の建設など)で発生した汚濁水の処理への応用も考えています。
物質科学科 応用化学コース	教授 村上 賢治 助教 中村 彩乃	バイオマスから液体燃料をつくるための触媒開発	二酸化炭素の排出を抑えるために、近年、再生可能な植物由来の有機性資源(バイオマス)を原料にした燃料が注目されています。このバイオマスを自動車などの燃料に利用するためには、液体にする必要がありますが、高温・高圧条件や貴金属触媒などを利用するためコストがかかってしまいます。私達は、より温和な条件、かつ低コストでバイオマスを液体燃料に変換するための触媒の開発を行っています。
物質科学科 応用化学コース	教授 進藤 隆世志 講師 井上 幸彦 助教 北林 茂明	金属ナノ粒子と多孔性固体を統合した高機能触媒開発	白金、コバルト金属ナノ粒子の大きさを制御できる調製法と界面活性剤を用いる規則的な反応空間をもつ多孔質固体の調製法を組み合わせ、環境浄化やエネルギーの有効活用に役立つ高機能触媒の開発を行っています。
物質科学科 応用化学コース	教授 進藤 隆世志 講師 井上 幸彦 助教 北林 茂明	水と高分子から作られるヒドロゲルの研究	ヒドロゲルとは水を取り込んだ高分子からできる複合体で、身近には寒天、ゼリーなどとして存在しています。近年このヒドロゲルに新たな性質を持たせた機能性ヒドロゲルというものが開発されています。この機能性ヒドロゲルをうまく利用するために、ゲルの作成法と性質の間にある関係を明らかにすることを目的とした研究をしています。
物質科学科 応用化学コース	教授 進藤 隆世志 講師 井上 幸彦 助教 北林 茂明	チタニア/マイカ複合化光触媒の開発	光触媒作用を持つチタニア(TiO ₂)を疎水性有機化合物への吸着能が期待されるフッ素マイカと複合化させることにより、環境中の汚染物質の吸着および分解に有効な光触媒を開発しています。
物質科学科 応用化学コース	教授 後藤 猛 助教 横田 早希	トランスグルタミナーゼを用いた未知タンパク質の新規フィッシング法	トランスグルタミナーゼ(TGase)はタンパク質同士を連結させたり、グルタミン残基やリジン残基を修飾したりする反応を触媒する酵素です。本研究は、このTGaseと既知タンパク質を連結させ、既知タンパク質に相互作用する未知のタンパク質をTGaseの近接依存反応によって特異的に蛍光標識して検出・探索する新しい手法の開発を行うものです。
物質科学科 応用化学コース	教授 後藤 猛 助教 横田 早希	生体機能を模倣した分子インプリント法による標的物質に特異的な吸着担体の開発	様々な物質に対して強い親和性を示したり水中でも強力な接着性を有する等、非常に特異な性質を有するタンパク質が天然には存在しています。私たちはこのようなタンパク質の部分構造と無機物質であるシリカ粒子を利用して、標的物質の鑄型を取ることができる汎用性の高い分子インプリント技術を開発しました。これを利用し、希少金属などの様々な有用物質を高選択的に吸着・分離することができる担体の開発研究を行っています。
物質科学科 応用化学コース	教授 後藤 猛 助教 横田 早希	昆虫細胞におけるバキュロウイルス結合レセプターの探索	昆虫細胞に特異的に感染するバキュロウイルスは、安全な遺伝子キャリアーとして昆虫細胞培養による哺乳動物タンパク質の大量生産に利用されています。私たちはこのシステムの改良を目指し、昆虫細胞表面にあるバキュロウイルス結合レセプターの探索を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
物質科学科 応用化学コース	教授 後藤 猛 助教 横田 早希	天然ゴム生合成関連タンパク質の機能解析	天然ゴムはさまざまな植物から生産されるバイオポリマーであり、特に熱帯地域で栽培されるパラゴムノキ由来のゴムは優れた物性を示します。私たちはパラゴムノキやイチジクにおいて天然ゴム生合成に関与するタンパク質を微生物に作らせ、天然ゴムの生合成や物性における役割を研究しています。
物質科学科 応用化学コース	准教授 大川 浩一 講師 加藤 貴宏	エネルギー資源のクリーン化技術の開発	地球環境の保全ならびに有限な資源の高効率利用の観点から、化石エネルギー資源のクリーン化技術の開発が望まれています。石炭やオイルサンドなどの重質炭化水素に含まれる硫黄化合物を酸化反応やイオン液体による抽出などの技術を駆使して選択的に取り除いたサルファーフリークリーン燃料の製造プロセス開発を行っています。
物質科学科 応用化学コース	准教授 大川 浩一 講師 加藤 貴宏	超音波照射下で生成する化学反応場を利用した機能性材料の合成	溶液中に強力な超音波を照射することで、酸化もしくは還元反応を進行させることができます。超音波照射条件を制御することで、目的とする反応を選択的に利用します。この反応を用いて、酸化剤・還元剤の添加を行うことなく、常温・常圧で高性能なリチウム電池用正極活物質、環境浄化材料など機能性材料を合成する研究をしています。
物質科学科 応用化学コース	准教授 大川 浩一 講師 加藤 貴宏	省エネ型エレクトロセラミックス製造プロセスの開発	焼結反応が短時間で完結するナノ微粒子の合成を行っています。また固体界面反応や有機バインダー分解速度を制御することにより、コンデンサーや蛍光灯、リチウムイオン電池などを少ないエネルギーで製造し得るプロセスの開発を行っています。
物質科学科 応用化学コース	准教授 大川 浩一 講師 加藤 貴宏	レアメタルならびに貴金属の分離回収プロセス開発	E wasteと呼ばれる廃電子基板には多くのレアメタルや貴金属が使用されています。例えばその中の金の含有量は鉱石よりも一桁以上高い値となっています。これらを塩化揮発反応や炭素による還元反応を利用して、短時間で選択的に分別回収するプロセスの開発と反応装置設計を行っています。
物質科学科 応用化学コース	准教授 高橋 博	海洋除染技術の開発	膜分離装置内で各種化学反応を行う新しい技術を考案し、海洋除染作業で発生する処理液からの廃棄物の分離と使用した薬剤の再生を目指したシステム開発を行っています。
物質科学科 応用化学コース	助教 山下 剛司	四級塩の溶解状態とヒドロゲルの膨潤挙動	水にも油にも親和性を持つ四級塩の水溶液中での溶け方や温度などの外部刺激の変化による相状態を観察し、四級塩の構造と相分離との関係性を明らかにします。また、四級塩と類似の構造を持つ液体を保持したまま形状を維持するヒドロゲルを合成し、水中での添加物の濃度変化や外部刺激の変化に対する膨潤・収縮挙動を詳細に観察し、四級塩の溶解状態との関係性を明らかにします。
物質科学科 材料理工学コース	教授 齋藤 嘉一	ヘテロ構造制御による次世代型マグネシウム製構造材料の開発	マグネシウム(Mg)は実用金属中最も軽量で、自動車をはじめ鉄道・航空輸送機、携帯用機器の筐体の軽量化に有用であり、低炭素社会や環境保護の推進に適う材料として注目されています。しかし、さらなる社会的普及と用途拡大を進めるうえで、強度と延性能について一層の改善が必要です。本研究は、Mgに対して第2、第3元素の合金添加と適当な熱処理をもって組織・構造の絶妙な制御を図り、従来材を圧倒する高性能化を追及しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
物質科学科 材料理工学コース	講師 長谷川 崇	真空とナノテクでつくる強い磁石	本研究室では、真空成膜装置や微細加工装置を用いた新しい磁性材料の開発を行っています。材料の結晶構造や組織などを人工的に制御してやると、通常の材料ではみられない性質が現れることがあります。例えば大きさがナノメートル台の材料では、高速・大容量ストレージ、光発電の高効率化、生体適合性の向上、摩擦低減効果など、多種多様な有用性が報告されています。中でもナノ磁性体は、電子情報デバイス、バイオ医療材料等の分野での活躍が期待されています。
物質科学科 材料理工学コース	講師 肖 英紀	準結晶物質の創製とその特性評価	物質の中の原子は、多くの場合「結晶」と呼ばれる規則正しい配列で並んでいます。一方、ガラスのように原子が不規則に配列した「アモルファス」物質も存在します。「準結晶」とは、そのどちらでもなく、「5回回転対称性」や、「黄金比」と呼ばれる無理数に司られた特殊な原子配列をもつ物質であり、普通の結晶やガラスとは異なる新しい特性が現れる可能性を秘めています。このような物質を多くの元素の組み合わせから創製し、その新奇な性質を調べています。
物質科学科 材料理工学コース	講師 辻内 裕	有機分子の薄膜および半導体などの分子エレクトロニクス研究	有機分子の優れた機能は、ミクロの世界では、電子移動や光を吸収して電子を出したり発光したりする、分子レベルでのエレクトロニクス現象として、複雑な生命現象までも理解できます。これは生物物理学という分野です。この分野の知見を活かして、有機分子の機能性薄膜の研究、ゲル固体電解質によるバイオセンサの研究、低コスト光電池および紫外線エネルギー利用技術の関する物質およびシステムの研究を行っています。
物質科学科 材料理工学コース	講師 河野 直樹	高エネルギー粒子やX線、ガンマ線を検出するための蛍光体材料の開発	無機単結晶やガラス、セラミックス、有機無機ハイブリッド材料を用いた蛍光体材料に関する研究を行っており、その中でも特に高エネルギー粒子やX線、ガンマ線を検出するための蛍光体材料の研究をしています。これらの放射線は、医療、セキュリティ、石油探索、高エネルギー物理学など様々な分野で用いられおり、それぞれの用途に応じた蛍光体材料が必要となります。当研究室では、様々な材料の構造や物性を制御することで、用途に応じた蛍光体材料の開発を目指しています。
物質科学科 材料理工学コース	教授 大口 健一	材料に生じる変形の予測方法に関する研究	材料を安全に使用するには、材料に力が加わったときに、どのくらいの変形が生じるのかを予め知っておく必要があります。そこで、材料に生じる変形と力の関係を様々な実験で調べた上で数式化し、その数式をコンピュータシミュレーションに応用して実際の製品で生じる変形を正確に予測するといった研究を行っています。そして、その結果に基づき、製品の破壊を防止するための方法や寿命を延ばすための方法について考察しています。
物質科学科 材料理工学コース	准教授 仁野 章弘	新たな硬質セラミックスの開発	炭化物および窒化物をベースとした硬質セラミック材料の開発、および微細組織制御と機械的性質に関する研究を行っています。
物質科学科 材料理工学コース	助教 福地 孝平	様々な熱的特性を有する新機能材料の開発	2種類以上の材料を組み合わせることで複合材料にすることで高性能化することができます。複合材料は作製方法や構造の違いによって特性が異なるため、実験により材料特性を調べ、必要な特性を得るための作製方法について検討しています。例えば、アルミニウムに炭素繊維を含有させた軽量で熱伝導性の良い複合材料やパラフィンのような低温で溶ける材料をプラスチックに含有させた蓄熱性能を有する複合材料の開発をおこなっています。
物質科学科 材料理工学コース	准教授 福本 倫久	脱炭素社会を実現するための水素エネルギーに関する研究	脱炭素社会を実現するために必要不可欠なエネルギーである水素を高効率で製造するための電極開発を行っています。さらに、この製造した水素を貯蔵するために水素吸蔵合金の開発を行っています。そして、この水素を燃料として発電用ガスタービンや航空機用ジェットエンジンに用いた際の材料特性評価を水素測定ガスセンサーにより解明する研究を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
物質科学科 材料理工学コース	准教授 佐藤 芳幸	計算機を用いた材料設計に関する研究	パソコンを始めとする計算機を用いた分子や原子に関するミクロレベルでの特性計算を、分子動力学法や分子軌道法を用いて行うことにより、新材料の材料設計における指針として活用することを検討しています。具体的には、材料界面における金属とガスの化学反応に基づく原子や分子の移動の仕方を詳細に把握することで、1000℃以上の高温領域における腐食現象を予測し、腐食メカニズムを明らかにして新合金の材料設計を行います。
物質科学科 材料理工学コース	講師 高橋 弘樹	新規燃料電池および省エネルギー電極材料の開発	持続可能な社会の確立には、環境への負荷が少ないエネルギーシステムの開発や二酸化炭素の削減などがきわめて重要です。研究室では、高効率でクリーンな燃料電池に必要なとされる高活性で耐久性に優れた電極触媒の開発や、素材製造プロセスで重要な省エネルギー型電極材料の研究を行っています。また、地球温暖化の原因物質と考えられるCO2の削減に向けて、電気化学を利用した電解還元処理システムの開発に取り組んでいます。
物質科学科 材料理工学コース	准教授 魯 小葉	高温酸化物超伝導体に関する研究	①Bi系高温酸化物超伝導テープ材の開発と特性評価に関する研究、②Bi系高温酸化物超伝導体の生成機構、熔融・凝固による組織制御に関する研究、③強磁場中での高温超伝導体の育成などの研究を行っています。
物質科学科 材料理工学コース	准教授 粟 千修	計算材料科学とデータ科学を融合した金属材料のスマートシミュレーション技術の開発	金属材料の組織・構造には様々な物理現象が関与しています。その複雑な物理現象の解明と材料製造プロセス最適化のために、計算材料科学(材料工学・熱力学・流体力学・動力学などを組み合わせたマルチフィジクス・シミュレーション)とデータ科学(機械学習(AI)、データ同化などによる統計学的推定法)を融合した知的で高性能な材料プロセスシミュレーションソフトウェアの研究・開発を行っています。
物質科学科 材料理工学コース	講師 後藤 育壮	鋳物の高性能化に関する研究	高機能部品・複雑形状部品のための鋳物材料や、それらの製造に適した鋳造プロセスについて研究しています。特に、熱伝導性・電気伝導性に優れた純アルミニウム部品や純銅製部品に着目し、それらを鋳造により効率良く製造するための技術の確立を目指しています。また、鋳ぐるみ接合による金属とセラミックスのモジュール化技術や、鋳造欠陥の発生予測のための鋳造シミュレーション技術に関する研究にも取り組んでいます。
物質科学科 材料理工学コース	教授 林 滋生	天然原料を利用したセラミック環境浄化材料の創製	セラミックス(無機材料)の様々な機能は、物質が本来持っている性質と、作製プロセス(手法)によって構築された構造・組織の、2つの要因が合わさって発現します。私たちは、イオン交換機能を持つ天然物質(秋田県産天然ゼオライト)を原料として用い、エネルギー消費の少ない最新のセラミックス作製プロセス技術を用いることで、高性能かつ安価で大量に使用できる環境浄化用セラミック材料を創製するための技術を研究しています。
数理・電気電子情報学科 数理科学コース	教授 小野田 勝	量子波の伝搬における幾何学的な位相の効果	周期的な構造の中を伝搬する電子や光子などの量子力学的な粒子の波(量子波)が見せる奇妙な振る舞いについて、幾何学的な観点から研究しています。量子力学的な状態はヒルベルト空間と呼ばれる抽象的な空間における点として表すことができるのですが、それらの点同士のつながり方の特徴、つまり幾何学的な特徴が物理現象としてどのように現れてくるのかに興味を持っています。
数理・電気電子情報学科 数理科学コース	教授 河上 肇	逆問題(特に形状推定逆問題)と、確率論の応用	例えば、スイカの中がどうなっているか分かれば、叩いた時どんな音がするかは計算で分かります。でも、叩いた音からスイカの中を推測するのは難しい。前者は順問題の例で、後者は逆問題の例です。このような逆問題(特に、未知の形を推測する逆問題)を、数学的に研究しています。そのための数学的ツールとして、確率論と積分を主に使っています。理論的な事だけでなく、コンピューター・シミュレーションもしています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
数理・電気電子情報学科 数理科学コース	准教授 小林 真人	幾何学(トポロジー)を利用した物体の形状の把握	1 多様体とよばれる高次元図形の形状を、平面や2次元球面などに投影したときにできる陰影線の様子から推察する理論を研究をしています。気象・天文データなど、多量で多要素からなるデータがどのように分布しているのかを調べるのに役立つでしょう。 2 物体の表面がつくる曲面、高層の大気の流れを表す曲線、物体の輪郭線や、文字、記号で代表される線図形など、実際に目に見えるかたちから、窪みや変曲などの特徴を調べる新しい方法の研究をしています。
数理・電気電子情報学科 数理科学コース	助教 新屋 良磨	オートマトン・形式言語理論	形式言語理論は「文字列の集合(言語)」を計算論的・数学的に厳密に研究する分野です。言語を解析する道具にもいろいろあり、その中でオートマトンは最も単純かつ強力な道具の1つです。私の興味は特にオートマトンの代数的・組合せ論的性質にあり、その周辺で研究を行っています。また、オートマトンを「プログラムの計算量の解析」や「プログラムが正しく動くことの自動証明」に応用する研究も行っています。
数理・電気電子情報学科 数理科学コース	准教授 菅原 透	酸化物融体の高温物性についての理論的、実験的研究とそれらの応用	1000°C以上の温度で融けた状態にある酸化物の物性や反応について、熱量測定や計算熱力学と呼ばれる手法を用いて研究をしています。またそれらを応用して、地球内部のマグマの発生の仕組みの解明、高レベル放射性廃棄物のより安全な処理方法の開発、低環境負荷のガラス製造プロセスの検討などを行なっています。
数理・電気電子情報学科 数理科学コース	准教授 田沼 慶忠	ユニフォームでない超伝導体の数理的手法による研究	超伝導体接合といったユニフォームでない系では、系の対称性が破れるため、不思議な物理現象や量子効果が起こります。例えば、強く局在した表面状態の形成や奇関数の周波数を持つ超伝導状態の誘導などが挙げられます。これらを踏まえて、超伝導体接合について数理的手法による解明を試み、研究に取り組んでいます。
数理・電気電子情報学科 数理科学コース	講師 中江 康晴	2次元や3次元の柔らかい幾何学(トポロジー)	ドーナツとコーヒーカップはどちらも穴が1個だから同じ形である、というような柔らかく図形を変形する方法で図形を分類する、トポロジーと呼ばれる幾何学の分野の研究をしています。特に2次元や3次元の図形に対して、その図形上に描ける模様(葉層構造)に着目して、その模様が作れるか作れないかを調べることで、図形を分類する研究をしています。
数理・電気電子情報学科 数理科学コース	准教授 Fazekas Szilard Zsolt	オートマトン・離散数学	主に研究している分野の一つにオートマトン理論というものがあります。オートマトンとは単純化されたコンピュータの理論モデルで、有限のメモリーを持ち、インプットに基づいて内部状態が変更されます。身の回りには例として、電気のスィッチ、自動販売機のような単純な例から、自動お客様サポートシステムや自動生産システムのような複雑な例まであります。
数理・電気電子情報学科 数理科学コース	教授 山村 明弘	代数系、離散数学と計算機科学、情報セキュリティへの応用	代数系(群・半群)に関する決定問題やアルゴリズム問題に取り組んでいます。離散数学は計算機科学分野に多くの応用があり、特に、数学的構造の対称性(偏対称性)を表現する数学的概念である群・半群は数学だけでなく数理科学全般に多くの応用があります。計算機科学分野では、離散構造とその(偏)対称性を理解することが、効率的なアルゴリズムを構成するための必要な条件であり、その理解を研究テーマとしています。
数理・電気電子情報学科 数理科学コース	助教 橋爪 恵	結び目理論・低次元トポロジー	ひもを1本用意しよう。これを適当に絡め、その端点をつないでできたものを結び目といいます。このひもは適当に絡めて良いのだから、出来上がる結び目には様々なものがありますね。結び目理論の大きな問題の一つに、「2つの結び目が与えられたとき、この2つは同じか？異なるか？」というものがあります。抽象的に感じられますが、タンパク質やDNAの形状把握や溶けたガラスなどの流体の効率的な巻き混ぜ方の研究など、様々なところで応用されています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	教授 熊谷 誠治	もみ殻を原料にした蓄電デバイス電極材料の開発	電気・ハイブリッド自動車やスマートフォンなどに多く使用されているリチウムイオン電池やコンデンサなどの蓄電デバイスの電極材料を、もみ殻を主原料に製造します。秋田県で農業廃棄物として多量に排出されるもみ殻は、植物由来の有機成分の他、土壌由来の無機成分を多く含んでいます。その特性を上手に活かして、これまでにない環境適合性が高く、かつ、高性能な蓄電デバイスの電極材料を開発します。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	准教授 Kabir Mahmudul	環境浄化技術の開発	東日本大震災後に福島原子力発電所の事故による、いま問題となっているセシウムの除染を目指しています。我々が考案した水平式電極動電処理法(FEM-EK)を用いることで、研究室レベルでセシウムの除染に成功しており、近々、共同研究企業とともに現地に除染の実証実験を計画中です。この手法は、汚染された土壌や沼地に二本の電極を設置し、太陽光発電などによる電気をを用いてセシウムや重金属を陰極へ移動させ、吸着による除染する技術です。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	助教 富岡 雅弘	リチウムイオン電池の特性シミュレーション技術の開発	電気自動車やスマートフォンの普及に伴い、効率の良いリチウムイオン電池の研究開発が進んでいます。電池の性能を評価する主な手法は実機検証であり、多くの試作品が作られ、特性を評価するために試験しています。それには多くの時間と費用、労力が必要となり、より効率的な電池の性能評価手法が求められています。我々はリチウムイオン電池の新たな評価手法としてシミュレーションによる特性の予測手法について研究開発しています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	講師 福田 誠	非線形超音波を用いた非破壊検査についての研究	モノを壊さずに内部の状態を調べる非破壊検査の分野において超音波が利用されています。従来の超音波法では見つけられなかったとても小さいき裂や欠陥を検出したいという要望があり、それが可能とされる非線形超音波に注目が集まっています。非線形超音波は普通に使われている超音波と比べて非常に小さい音圧であり、これを感度良く検出するための方法(探触子の開発・信号処理など)について研究を行っています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	助教 西平 守正	超音波の発生と伝搬の数値解析と計測への応用	構造物などの状態を確認する際に、分解や損傷などの影響を与えない非破壊の検査法として超音波を利用する方法があります。このような超音波非破壊検査の技術向上のために、超音波が構造物の中を伝搬する様子や超音波を発生させる素子について解析を行っています。これらの数値解析結果に基づいて、超音波非破壊検査の新たな手法を開発することを目指して研究しています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	准教授 田中 元志	ヒトの活動による音と生体情報の解析とその利用	ヒトの活動によって発生する音(足音、生活音、楽器演奏音など)に着目し、マイクなどを用いてコンピュータに取り込み、解析する基礎研究と、その知見を用いた歩行者の識別、家屋内事故などの異常検出、音符認識などに関する研究を行っています。また、生体情報として脳波(α 波、事象関連電位など)、心電図、視線などを計測し、解析・処理によって抽出した特徴量を、ヒトの状態や感性などの評価に利用することを研究しています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	准教授 室賀 翔	電子機器のノイズ計測と対策用デバイスの開発	IoTデバイスなどの電子機器は、小型薄型化、多機能化や低消費電力化が進んでいます。小さなデバイス内で隣り合う素子や配線間で電磁界が干渉すると、誤作動や性能劣化が生じる可能性があります。そこで機器内の狭い領域の電磁ノイズを計測により可視化して、磁性体などの新しい材料を使って電磁界をコントロールする技術について、試作や実験、シミュレーションを使って研究しています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	准教授 佐藤 祐一	光る半導体のナノサイズ結晶の形成と新しい照明や画像システムへの応用	半導体はスマートフォンやロボットなどを動かす電子回路に利用されますが、きれいな光や目に見えない光を出す半導体もあり、発光ダイオードなどとして利用されています。この研究では、ナノメートルのサイズの光る半導体の結晶を、大きな面積のプレートの上に人工的に作ることで、将来的には、すぐ明るいけどまぶしくない照明や、とても小さな領域の画像をリアルタイムで高品質に大きな画像として表示できる装置などに応用することを考えています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	教授 倉林 徹	ミリ波・テラヘルツ波領域の素子開発と生体物質の高感度検出への応用	超高周波(ミリ波やテラヘルツ波)の発生とその応用に関する研究を行っています。テラヘルツ電磁波は、発生と検出が難しいことから世界中で開発が遅れ、長い間『未踏領域』と呼ばれてきました。しかし、最近の技術革新によってテラヘルツ波の利用が可能になり、さまざまな応用が世界中で開発されつつあります。当研究室ではミリ波やテラヘルツ波帯の電磁波発生・検出技術を用いた、生体物質の高感度検出など新たな技術革新を目指しています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	講師 淀川 信一	ミリ波・サブミリ波帯の電磁波伝搬と応用に関する研究	自動車の衝突防止レーダなどに使われているミリ波から、今後の発展が予想されるさらに高い周波数のサブミリ波までの電磁波の伝搬や応用について電磁界シミュレーション解析と実験の両面で研究しています。例えばレーダのビームが素早く左右に動かすこと(走査)ができれば、広い範囲の障害物を検知することができます。私たちは、プラズマに磁界をかけることでミリ波のビーム走査を可能にする技術について研究しています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	教授 齊藤 準	ナノスケール磁気計測システムの開拓とその先端磁気デバイス評価への応用	ナノテクノロジーの進歩により、磁気センサーや磁気記録装置の性能が飛躍的に向上しています。磁気デバイスの性能アップには、磁気的性質をナノメートルサイズで評価・解析し、研究開発の場にフィードバックすることが重要です。本研究室では走査型プローブ顕微鏡を応用して世界最高水準の空間分解能をもつナノスケール磁気計測システムを開発し、先端磁気デバイスに関して産業界のニーズに応える微視的な評価法を提案しています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	教授 山口 留美子	ネマチック液晶の物性およびその応用に関する研究	電卓表示やテレビ、スマートフォンディスプレイに応用されているネマチック液晶において、それらの製品化の際に重要となる液晶分子の配向現象を研究しています。さらに、ディスプレイ以外への応用として、透明-光散乱状態を電気的に切り替えることができる電子カーテン、角度によって光を遮ることができる電子ブラインドへの応用、またそれらの低電圧駆動化に関する研究を行っています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	准教授 河村 希典	液晶をつかった電子制御レンズの開発	液晶材料は、比較的低い電圧により液晶分子の配列状態や光学的特性(屈折率分布)を容易に変化できる他の光学材料には見られない特長を持っています。この優れた光学的特性をもつ液晶を使って、機械的な駆動部を必要としない全く新しい「液晶プリズム」、「液晶レンズ」、またそれを用いた「光学応用システム」の開発を行っています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	教授 田島 克文 講師 吉田 征弘	未来を支えるモータの設計開発	日本で使われる電力の5割以上がモータで消費されているのを知っていますか?日々の暮らしの快適性や利便性、産業の発展はモータに支えられています。そのため、高効率で高性能なモータの開発は将来にわたって欠かすことのできないキーテクノロジーになります。このような背景のもと、本研究室では高効率・高性能モータの設計および解析技術の開発を行っています。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	准教授 三浦 武 助教 松尾 健史	小形モータの制御法に関する研究	日常生活で用いる電気製品や電子機器、デジタル機器の内部には、「動き」を与えるための制御用のモータが様々な目に見えない形で組み込まれています。近年では特に、正確な「動き」を素早く実行することが求められています。本研究では、その実現のための技術開発に取り組んでいます。
数理・電気電子情報学科 電気電子工学コース	准教授 三浦 武	秋田県の民俗芸能の数値解析に関する研究	秋田県は、全国の都道府県の中で最多の国指定の重要無形民俗文化財を有しています。近年では、民俗芸能の舞踊の身体動作をセンサを用いて記録できます。本研究では、記録された動作データの数値解析により、それぞれの民俗舞踊の動きの特徴が伝承地の文化とどのような関連を持っているのかを探っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 水戸部 一孝	VRシミュレータの開発と交通事故防止技術の研究	世界最先端の超高齢社会を迎えた秋田県を舞台に、高齢者の交通事故について研究しています。ここでは、バーチャルリアリティ技術とモーションキャプチャ技術を組み合わせたVRシミュレータを開発し、仮想空間を実際に高齢者が歩いたり、自転車や自動車を運転したりする時の行動を解析して、交通事故発生要因の解明や自動運転技術への活用を進めています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 水戸部 一孝	ハイパーサミアによる悪性腫瘍の治療技術の研究	医学部胸部外科との共同研究として、悪性腫瘍が熱に弱い性質を利用した副作用の少ない物理的な治療技術である「温熱療法(ハイパーサミア)技術」を研究しています。既に動物実験では薬剤を併用することで生存率が向上することを実証し、現在、臨床試験に向けた装置の大型化、自動制御手法を研究しています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 水戸部 一孝 技術職員 齋藤 正親	AR・MR技術を活かした採血手技訓練用シミュレータの開発	医学部保健学科との共同研究として、1/100mmの高い分解能で計測できるモーションキャプチャ技術を利用し、採血における指先の細かな動作を計測・解析することで技能を評価すると共に、自学自習用のAR・MR教材を研究しています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 水戸部 一孝	在宅看護支援技術の研究	高齢化が進む本邦は、近い将来、病院で収容可能な患者数を超過するため、在宅での治療・看護が不可欠となると予想されています。我々は、訪問看護の先進県である秋田県を舞台に看護師の在宅での患者業務を支援するICT・IoTを開発しています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 水戸部 一孝 技術職員 齋藤 正親	ロボットやAIを活用した単身高齢者世帯の見守り支援技術の研究	秋田県では高齢化が進み高齢者の単身世帯数が増加しています。都市部にある病院の医師や首都圏で暮らす子供世帯が必要に応じてロボット(Pepper)を介して見守りができたり、3Dカメラにより高齢者の日々の行動(服薬)をチェックして、ADLの変化に気付けるシステムの開発をめざしています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 水戸部 一孝	THz帯の電磁波を利用した生体由来物質の可視化技術	電波と光の間の帯域であるTHz波帯の電磁波により、目で見ることができない人のタンパクを可視化して、様々な疾患に起因するタンパク質の異常を簡便に可視化する技術を研究しています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	准教授 藤原 克哉	手指を使った動作の計測による高齢者の見守り技術の研究	一人暮らしの高齢者の増加に伴い、気づかないうちに病気で倒れたりすることがないように日々の変化を察知する見守り技術が必要が高まっています。そこで、図や文字を描く手指を使った細かな動作を計測し解析することで、隠れ脳梗塞など自分では気付けない体の変化の発見に繋げる技術を研究しています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	准教授 藤原 克哉	コンピュータシステム・ソフトウェアシステムの設計技術の研究	コンピュータのハードウェアとソフトウェアは、作ってから出荷する前に、想定通りに動くことをテストして不良品を排除する必要があります。コンピュータが大規模で複雑になるとともに、テストコストが製造コストの大部分を占めるようになりまし。そこで、テストが容易になるコンピュータの設計法を考えて、大規模化しても対応できるように研究を進めています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	講師 中島 佐和子	音声合成やARによる映画のバリアフリー化技術	日常生活を営む上でテレビや映画は重要な要素です。しかし、視覚や聴覚に障害を有する方々が映像や映画を楽しむための環境は十分に整ってはいません。視覚や聴覚に障害を有する方々の映画環境の問題点を調査し、課題を解決するための技術開発を進めています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 景山 陽一 助教 白井 光	UAVデータを用いた環境モニタリング技術の開発	ドローンなどのUAV(無人航空機)により取得されたデータを用いて、環境をモニタリングする技術の開発を行っています。例えば、湖などの水質状況を把握する場合、採水することが一般的ですが、この場合では水面全体の状況を把握することは困難となります。このため、対象物の特徴やUAVデータがもつあいまいさを考慮して、環境をモニタリングし国土の保全を支援する技術の開発を行っています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 景山 陽一 助教 白井 光	UAVデータを用いた機械学習による植生個体数の推定	国連が提唱する持続可能な開発目標(SDGs)にもある通り、陸上生態系の保護は重要です。生態系の種別判別や管理は、人手により行われており、人手不足やコストが課題とされています。このため、UAV(無人航空機)により取得されたデータを用いて、画像処理と機械学習による自動個体数推定法の開発を行っています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 景山 陽一	高齢者を対象とするe-スポーツ実施時のヒューマンセンシング	超高齢社会の到来に伴い、高齢者の健康寿命の延伸に関する取り組みが行われています。その中で、社会との多様な繋がりを持つことは、高齢者の認知症発症リスクを低減できることが明らかにされています。このため、高齢者を対象としてe-スポーツ実施時のヒューマンセンシングを行い、得られたデータを解析し、e-スポーツが高齢者に対してどのような効果があるのかを研究しています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 景山 陽一	表情認識と発話内容の識別	私たちは顔情報を用いて他者とのコミュニケーションを図っています。特に、表情は目や口などの様々な部位の動きが複合し多くの情報を発信しています。また、言葉を発する時には口が動くため、発話に伴う口の動きを解析することにより発話内容の識別が可能になります。このため、人と人、さらには人とコンピュータとの理解を深めるインタフェースを開発するために、表情認識と口の動きに着目した発話内容識別について機械学習などを用いて検討を行っています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 景山 陽一	情報技術を用いた心理・体調変化、関心度の推定	日常生活において、自分自身や周りの人たちの体調の程度、心理状態を理解することは質の高い毎日を過ごす上で重要です。このため、顔に表出される情報や口の動き特徴、視線、体動などに着目し、画像処理や機械学習、IoTにより対象者の心理や体調の変化、関心度を検出する技術の開発を行っています。これらの検出技術は、超高齢社会において、遠隔地から他者を見守るシステムやコミュニケーションを支援するシステムに利用することができます。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 景山 陽一	物流における倉庫内業務支援とデータ解析	私達の日常生活を支えている基盤の一つとして、物流があります。特に過疎化が進む地域では、必要なものをネットなどにより発注し配達してもらう機会が増えるでしょう。このため、物流における倉庫内業務において、ICT(情報通信技術)による最適なピッキングおよび在庫ロケーションを支援する手法について検討しています。また、膨大なデータ解析により作業効率化を図ること、搬送計画の自動化など物流システムの要素技術について検討を行っています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 景山 陽一 准教授 石沢 千佳子	情景画像を用いた物体の認識	道路利用者の安全・安心を向上させるためには、目の前にある情景を撮影した画像・映像から看板や道路標識を認識し、利用者に提示することが重要です。また、日本語が苦手な方には、撮影した看板が自動翻訳されるシステムが有効でしょう。しかし、屋外では天候や時間によって明るさが大きく変化してしまいます。そこで、看板や標識が持つ色情報や形状情報に着目し、データ取得条件にロバストな認識技術の開発を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 景山 陽一 准教授 石沢 千佳子 助教 白井 光	熱赤外画像を用いた夜間 時の歩行者抽出法の開発 と動作解析	夜間屋外環境下における歩行者の行動パターンを観察し、検知した歩行者の行動を車両運転手に通知することができれば、不慮の事故を軽減することが可能になります。そこで、熱赤外画像を用いて歩行者を検出するとともに、動作の状態や程度を推定する手法の開発を行っています。検討している内容は、災害時の人命救助やクマなどの検出など、地域の課題を解決する要素技術となります。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 景山 陽一 准教授 石沢 千佳子 助教 白井 光	画像処理と機械学習による 対象物の種別判別と品質 推定技術の開発	廃電子基板をリサイクルするとき、基板の種別を判別したり、その品質を推定したりする作業は、人手により行われています。このため、さまざまな方法でセンシングされた情報を用いて対象物の特徴を抽出し、得られた特徴を基に種類や品質を推定する技術の開発を行っています。画像処理や機械学習を用いたSDGsに取り組む要素技術になります。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	准教授 石沢 千佳子	ヒトの視覚特性を利用した 疑似的画像表示技術の開発	ヒトの視覚には、異なる色が高速に切り替わって表示されたときに混ざり合った色を知覚するという特性があります。この視覚特性を利用し、異なる色の画像を液晶ディスプレイ上で切り替えて表示することによって、切り替え表示に用いた画像とは異なる色の画像を見せる技術の開発を行っています。例えば、切り替え表示によって見えた画像をカメラで撮影しても、実際に見えた画像ではなく、切り替え表示に用いた画像が写るため、ヒトが知覚した情報を捉えることができなくなります。このため、盗撮防止などへの応用が期待できます。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	准教授 石沢 千佳子	ユーザ支援のためのPC操作 履歴解析	PC(パソコン)のキーボードやマウスを押しした時刻や使用したソフトウェアの種類などの履歴を取得・解析し、ユーザのPC操作をサポートするための技術開発を行っています。例えば、あるWebサイトを参考にしながら文書を作成したときに、出典の記載漏れをユーザに知らせるなど、ユーザの「うっかりミス」を未然に防止するための手法について検討しています。また、キーボードを押しした回数やスピードなどを解析することによって、ユーザが順調に作業しているかどうかを判断する手法についても検討しています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 有川 正俊 助教 高橋 秋典	モバイルICTサービスと時 空間データ分析による地域 観光振興への貢献	日常的に使われているモバイルデバイスには、GPS受信機、加速・方位センサー、カメラなどの各種空間センサーがすでに搭載され、ユーザの振る舞いを時空間行動ログデータとして記録できます。このログデータを用いて、リアルタイムに気の利いたICTサービスを提供したり、ユーザ行動からデジタル日生成や健康管理を実現する応用が考えられます。特に地域観光振興を対象に、新しいモバイルICTサービスの実現および大規模行動ログデータ分析のフィードバックによる観光サービスの改善手法などの研究開発を行っています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 有川 正俊 助教 高橋 秋典	世代間コミュニケーション 場の健全化と地域デジタル アーカイブの持続可能性	ICT社会では時間の進みが速く、人間社会文化は世代交代が急速に進み、過去の重要な知識と遺産は継承されずに失われる傾向にあります。デジタルアーカイブは地域の知を遺すためには有望ですが、高齢世代はICTなどの新しい文化に馴染まず、一方若い世代は歴史・地理スケールで地域を学ぶ機会をもてません。そこで、ICTやAIを活用し高齢世代と若い世代がWINWINとなるコミュニケーション場の研究を行っています。高齢世代は知識を遺す活動が生き甲斐となり、若い世代は地域の知を習得し豊かな地域未来をイメージできます。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 有川 正俊 助教 高橋 秋典	ITに基づく視線解析からの ヒトの関心度推測	訪日外国人旅行者が増え続けるなか、観光政策に必要なデータ収集技術の重要性が高まっています。中小規模の観光施設においても、訪問者が観光素材のどんな部分に興味を持っているかを知ることが、その後の施設の充実化に影響を与えます。ヒトの興味は、視線の動きを追跡することで評価できることから、視線解析技術を応用して観光素材に対する関心度を推測・可視化する検討を行っています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	教授 有川 正俊 助教 高橋 秋典	高精度インドア・ポジショ ニングを利用したARナビゲ ーション技術	GPSを用いた位置情報サービスは、屋内や地下などの電波環境が良くない場所ではほとんど利用できません。このようなGPSが利用できない場所で高精度の位置情報サービスを提供するため、スマートフォンに備えられている光学空間センサーやモーションセンサーを用いて自分の位置を計測して、目標物までの案内をARを用いて示してくれるアプリの研究開発を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	准教授 橋本 仁	トラフィックエンジニアリングとコストメトリックに注目したネットワーク最適化	(1)急増するトラフィックをネットワークリソースを有効活用して、効率的に收容するトラフィックエンジニアリングと、(2)経路制御が容易で、QoS(サービス品質)を考慮した経路制御に適したコストベースの制御に関して、両者のメリットが融合した経路制御法、その際のコスト決定法、ネットワーク評価手法、等の研究を行なっています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	准教授 橋本 仁	スマートデバイスのユーザビリティ向上手法	ネットワーク接続されAI等も連動して機能するスマートデバイスが広まってきています。最も身近な例としてはスマートスピーカーがあります。しかし例えば高齢者の見守り目的にも使用することを考えると、高齢者がスマートスピーカーに合わせた話し方、伝え方をする必要があります。この点を課題と捉え、音声認識等を活用して解決を図ります。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	准教授 橋本 仁	WEBアプリケーションによるパーソナライズされたスマートホーム実現技術	屋内に設置され、ネットワーク経由で外部からもアクセス可能な家のスマート化につながるデバイスが増えています。しかし、それらを利用する際、どうしても、その機器を提供するメーカー等によるサービスに限定され、操作性や”やれること”も制限されやすいです。本研究では、ユーザにも比較的変更等しやすいスクリプトベースのWEBインターフェースを使用し、屋内のデバイスとやり取りし、各個人に合わせたpersonalizeされた仕組みの提案、構築を目指します。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	准教授 橋本 仁 助教 内海 富博	ad hocネットワークの接続性・ロバスト性評価とネットワーク設計手法	IoTエリアネットワークやセンサネットワークなどではネットワーク間のリンク接続が必ずしも安定しなかったり、間欠的であったりします。こうしたネットワークの接続性・ロバスト性の評価を、まず、コネクティビティを有する全サブグラフを列挙し、次にそのグラフ集合の発生確率を計算することで行う研究です。条件を満足する大量のグラフを高速に列挙するツールを活用することを特徴としています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	准教授 橋本 仁 助教 内海 富博	IoT ネットワークシステムとサービスの構築(1)	IoTネットワークシステムの高齢者等の見守りへの応用システムを提案し、さらに実際に構築し、動作を実証します。例えばSNSを用いたリアルタイム通知とオンデマンド通知を行うシステムをつくります。ローカル環境に相互アクセス可能な、そしてグローバルにアクセス可能な仕組みを、クラウドや各種APIを活用して構築します。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	准教授 橋本 仁 助教 内海 富博	IoT ネットワークシステムとサービスの構築(2)	IoTネットワークシステムの高齢者等の見守りへの応用システムを提案し、構築、実証します。シンプルな通知・情報共有機構と異なり、(1)日常的な”健常”であることに注目した通知、(2)被見守り者が家の中のどこにいるかをなどを推測してのセンシング、等の特徴的なフィーチャーとして検討しています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	助教 内海 富博	無線センサネットワークを用いた高齢者の身体活動量測定技術の開発	高齢者の生活の質(Quality Of Life)を向上させるために健康寿命を延ばすことが求められています。そこで、健康状態と要介護状態の中間の状態(フレイル)、特に初期段階のプレフレイルを早期発見し、リハビリで回復することで健康寿命を延ばすことが期待されています。プレフレイルの早期発見には、活動量計など装着型のセンサが用いられていますが、装着を嫌がる高齢者も多く、測定が容易ではありません。そこで人感センサなど非装着型のセンサを使ったネットワークにより、高齢者に負担をかけずに身体活動量を測定する技術の研究開発を行っています。
数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース	助教 内海 富博	無線センサネットワークの省電力化に関する研究	無線通信機能を持つセンサで構成する無線センサネットワークは、農業や環境モニタリング、建築物の健全性診断など多くの分野での応用が期待されています。電池などのバッテリーで駆動するデバイスは、大量に設置した場合に、電池交換などの負担が大きく、できるだけ長期間動作するような省電力化が必要とされています。そのため、電力の消費効率が良いネットワークの形状やネットワーク設計方法について検討を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
システムデザイン工学科 機械工学コース	教授 村岡 幹夫	航空機複合材の製造技術 と電波吸収ナノ材料の開 発	軽くて丈夫な炭素繊維強化プラスチック(CFRP)は製造に 多数の手順と手間を要するため、高コストになってしまいま す。本研究では、航空機向けCFRP構造品を圧倒的に低コ ストで迅速に製造できる方法を確立するため、大手重工・ 地域企業と共に電磁場加熱成形法という独自技術を開発 しています。また、電波が飛び交う情報社会の安全安心を 守るため、革新的で高性能な電波吸収ナノ材料「メタルナ ノコイル」を開発しています。
システムデザイン工学科 機械工学コース	教授 奥山 栄樹	機械形状や変位などの精 密測定と超精密設計に関 する研究	機械形状が如何に数学的な直線や円に近いのか、また、機 械が如何に精密に運動するかをナノメートル単位で測定す る技術を研究しています。さらに、生産現場の製品の精度 を上げるために、精密に運動するメカニズムを開発してい ます。
システムデザイン工学科 機械工学コース	准教授 山本 良之	磁性ナノ粒子(磁性流体) の基礎的性質と医療応用 研究	ナノメートルサイズの直径で磁気を帯びた粒子を液体状に した磁性流体は工業用途だけでなく近年、医療やバイオ分 野への応用が期待されています。研究室ではこういった 磁性ナノ粒子材料を合成し、ナノサイズ領域で生じる新し い性質を調べることで、磁性ナノ粒子でがん治療を行う磁 性流体ハイパーサーミアへの応用に向けてナノ粒子の性 能評価を行っています。
システムデザイン工学科 機械工学コース	准教授 山口 誠	光散乱を用いた表面構造 の評価・新技術の開発	物質の表面に薄い膜を作ったり、ナノメートルの凹凸を作 るなどの工夫をすることによって、物質に新しい機能を付 与する技術が目まぐるしく進んでいます。その際に、物質の表面 の構造を原子レベルで評価したり、分析したりする技術が 重要となってきます。そのための手法の一つとして、光と物 質の相互作用によって光が散乱される物理現象を利用し たラマン散乱分光技術に着目し、それによる表面構造の 評価や新しい技術開発に取り組んでいます。
システムデザイン工学科 機械工学コース	准教授 宮野 泰征	自動車の軽量化実現に向 けた接合技術に関する研 究	自動車に代表される輸送機器の軽量化は環境負荷の低 減を目指す上での重要な課題です。一方、衝突安全性の 追求という観点では輸送機器の高強度化に配慮した材料 選定も不可欠です。このような課題に対し、近年我が国で は、材料と組み立て技術の革新により産学官連携で取り 組んで行こうという動きがあります。本研究室では、接合研 究の拠点である大阪大学と共同で、新型自動車用鋼板へ の摩擦攪拌接合技術の適用に向けた研究を実施していま す。
システムデザイン工学科 機械工学コース	准教授 宮野 泰征	微生物活動に誘導される 構造材料の腐食現象の可 視化に関する研究	発電プラントや、海洋構造物等の建造物には耐食性や長 寿命が信頼される材料が使われています。しかし、このよ うな優れた材料が微生物の活動により予期せぬ腐食影響 を受けてしまう事象が存在します。微生物腐食とよばれる 現象です。最近の研究で、微生物と材料(金属)中の欠陥 (結晶粒界、元素偏析)との関連性が疑われるようになって きました。本研究室では、金属に発生する微生物腐食可視 化し、腐食誘導因子の実証解明に向けた研究を行ってい ます。
システムデザイン工学科 機械工学コース	講師 趙 旭	原子マイグレーションの抑 制と活用	高密度電子流または応力勾配が駆動力とした原子拡散現 象を対象として、これらが微小電子部品の信頼性問題に 関わる抑制、およびマイクロ・ナノ材料の創製に関わる活 用を研究しています。目に見えない原子の拡散を制御し て、金属配線・次世代鉛フリーはんだの接合における信頼 性評価および金属ナノワイヤ・ナノコイルなどの微小材料 の創製に取り組んでいます。
システムデザイン工学科 機械工学コース	教授 田子 真	地熱エネルギー抽出のた めの地中熱交換器の性能 解析評価	地下の浅い領域の地熱エネルギーは低品位(低温)では あるものの、どこにでも賦存しています。地熱エネルギーを 取り出すためには、一般的に地中熱交換器を利用します。 地中熱交換器には、U字管方式、同軸型二重管方式、らせ ん管方式など、いくつかの方式があります。本研究では、こ れら各種の地中熱交換方式の性能・特性を明らかにする ために、数値シミュレーションにより検討しています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
システムデザイン工学科 機械工学コース	教授 田子 真	二成分系水溶液による氷層の融解挙動	氷が塩化カルシウム水溶液などに接すると、周囲からの加熱がなくても自発的に融解が始まります。氷が融解すると、融解面から融解水が放出され、水溶液中に濃度差が生じるとともに、融解面では潜熱が吸収され、水溶液と氷層に温度差が生じます。その結果、水溶液中には、濃度差と温度差に基づく複雑な二重拡散対流が発生します。本研究では、このような氷の融解に伴う二重拡散対流の挙動について、数値シミュレーションにより検討を行っています。
システムデザイン工学科 機械工学コース	准教授 小松 喜美	相変化を伴う伝熱現象に関する研究・開発	水の凍結速度や氷の融解速度を制御できるような機器・方法の開発を目指して、実験やコンピューターシミュレーションを用いた研究を行っています。例えば、寒冷地で問題になっている排水管の凍結を、ヒーターなどの機器を用いなくて防止する方法を開発しています。
システムデザイン工学科 機械工学コース	講師 杉山 渉	小型風車による風力エネルギーの有効利用	風は自然エネルギーとして注目され、風力発電に利用されています。しかし、風力発電に適しているのは、常に強い風が吹き、大型の風車を設置出来る広い場所に限られます。より多くのエネルギーを得るためには、強い風の吹かない場所でエネルギーを得ることも必要です。そのため狭い土地でも利用可能な小型風車の性能を向上させる工夫や、得られたエネルギーを有効に利用するための方法について、実験を中心に研究を行っています。
システムデザイン工学科 機械工学コース	准教授 古林 敬顕	持続可能な社会に向けた地域エネルギーシステムの設計	持続可能な低炭素・脱炭素社会を実現するために、エネルギーの上流(資源)から下流(消費)までを対象とする、エネルギーシステムの設計研究に取り組んでいます。秋田県などの具体的な地域を対象として、地域のエネルギーシステムをシミュレーションすることで、風力発電やバイオマスなどの再生可能エネルギーの導入に向けた課題と、その解決に求められる技術開発、政策、設備などを明らかにします。
システムデザイン工学科 機械工学コース	教授 長縄 明大	ロボティクスとその医療分野への応用	本研究室では、ロボティクスとその医療分野への応用に関する研究開発を行っています。ロボティクス分野では、玉乗りロボットの動きを制御する研究、2.7mmのモーターで物体を動かす駆動装置の開発などを進めています。また、これらの技術を医療分野へ応用し、消化管の運動を計測するためのカテーテル開発、眼窩を含む欠損部の補てつ物であるエピテーゼを置きさせる研究、多彩で高度な手術を行うための多指マジックハンドの開発などを行っています。
システムデザイン工学科 機械工学コース	教授 巖見 武裕	医療福祉工学とバイオメカニクス	多チャンネルの電気パルスで筋収縮を制御する医療技術を機能的電気刺激(以下FES)と呼びます。本研究室では、ロボット工学の観点から生体をひとつの動作機構としてとらえ、FESによる麻痺患者の運動再建に必要な研究と機器開発を医学部と共同で行っています。また、実験的な手法を用いて実施する事が困難な医療課題に、コンピューター・シミュレーションの技法を用いて取り組んでいます。
システムデザイン工学科 機械工学コース	准教授 佐々木 芳宏	IPネットワークによる油圧機械の遠隔制御法に関する研究	油圧機械は小型で高出力であるため、災害現場での復旧作業や宇宙、海中、大深度地下等の極限環境での作業に応用されています。このような、人間が立ち入れない悪環境では、遠隔操作による作業が効果的です。本研究室では、IPネットワークを使った仮想空間による映像伝送技術や、操作者が操作するジョイスティックへの作業現場の力を反力として提示することで、操作の安定性向上や操作者への精神的負担の軽減についての研究を行っています。
システムデザイン工学科 機械工学コース	講師 関 健史	光や機械を用いた医療用システムの研究開発	内視鏡で撮影された体内の患部の映像を見ながら手術を行う低侵襲治療は、患者への負担が少ない治療です。しかし、医師は、内視鏡の映像をもとに感覚や経験のみで、患部の情報(大きさ、血流、温度など)を判断するしかありません。そこで本研究では、より安全かつ適切な治療が行うため、患部の様々な情報を取得可能な、光や機械を組み合わせた医療用システムの研究開発を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
システムデザイン工学科 機械工学コース	教授 三島 望	環境にやさしくユーザーにとって魅力的な製品設計手法の研究	しっかりした設計戦略無しに製品を高性能化することは、ユーザーによってあまり重要でない製品特性を高めるために、環境に対する影響が増加する結果を招くこともあります。この研究では、製品設計の最も初期の段階で用いられる価値工学や、次の段階で用いられる品質工学と呼ばれる方法を応用し、ユーザーにとって魅力的で、環境影響の少ない”環境効率”の良い製品を設計するための指針を得ようとしています。
システムデザイン工学科 機械工学コース	教授 足立 高弘	円すいを水に浸けて回転させることで起る面白い現象の数々	円すいの頂角を下向きにして水に浸し回転させることで、水質浄化や繊維の製造あるいは水面を移動するお掃除ロボットなどに応用できる興味深い現象が現れます！
システムデザイン工学科 機械工学コース	准教授 高橋 護	材料表面を強くするダイヤモンド皮膜	ダイヤモンドは、高硬度、耐磨耗性、高い熱伝導率等の優れた性質を持っています。このダイヤモンドを大気中のアセチレン-酸素の燃焼炎を用いて、切削工具、人工関節、歯科インプラント用材料の表面へ直接合成して、材料の表面を強くし耐磨耗性、耐久性を向上させる研究を行っています。このことにより、製品の寿命を長くすることが可能となります。
システムデザイン工学科 機械工学コース	准教授 秋永 剛	Seawater Greenhouseの研究	水・食糧不足問題の克服を目指し、動植物にとって厳しい環境である高温乾燥地帯において行えるSeawater Greenhouseを用いた農法について研究しています。沿岸部の適当地域を選択すれば、(ほぼ)無尽蔵である海水・風・太陽光を基盤とするSeawater Greenhouse農法は、環境負荷が小さいばかりか、安価で単純な構造なので、アフリカ等にまだある裕福ではない地域においても十分導入可能な農法であると言えます。
システムデザイン工学科 機械工学コース	講師 平山 寛	人工衛星および宇宙探査機の研究	機械工学や軌道力学の観点から、人工衛星や月・惑星探査機のミッションアイデアを創造し、システムの実現性を研究します。現在は、宇宙ごみを除去する衛星、衛星の表面の異常を観察するカメラ装置、月面の溶岩洞窟に降下探査するロボット、小惑星の岩石サンプル回収装置、および惑星探査車に関する研究を行っています。
システムデザイン工学科 機械工学コース	講師 木下 幸則	原子間力顕微鏡を用いたナノ表面イメージング	原子間力顕微鏡は、鋭い探針と物質表面間に働く力を捉えることで、表面の凹凸や電氣的、磁氣的、機械的な性質をマッピングする顕微鏡です。大気中や溶液中など日常的な環境に置かれた表面でも観察可能で、原子が見えるほどの高い空間分解能を持ちます。また、探針で表面構造を動かし、人為的なナノ構造の作製も可能です。この顕微鏡を用いて、年々微細化が進む電子・磁気デバイスの動作評価や、表面で起きる新規な物理現象の探索を行っています。
システムデザイン工学科 機械工学コース	助教 佐々木 英一	水や空気の流れに潜む秩序	わたしたちの身の回りで見つけることができる水や空気の流れは乱流と呼ばれる不規則で複雑な運動をしています。乱流には、例えば、コーヒーにミルクを早く溶かすという、混合を促進する喜ばしい効果と、投げたボールの球速が落ちるとい、抵抗が増加する避けたい効果があります。工学的に重要な性質がどのような流れの運動によってもたらされているか、興味を持っています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	教授 後藤 文彦	木質構造や折り紙構造など各種構造物の研究	自然環境を守りながら、森林資源を有効活用するため、軽くて加工しやすい木材の特性を活かした木橋など、木質構造についての研究を行っています。また、折り紙構造やハニカム構造などの様々な構造物の性質をシミュレーションや3Dプリンタを用いて解析し、土木構造物に応用するための研究を行っています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	助 教 青木 由香利	サステナブルな建設部材 の開発研究及び構造解析	サステナブルとは「持続可能」という意味で、本研究では建物を持続可能にするだけでなく、建設段階やメンテナンスなど多くのポイントで環境問題を考慮できる建設材料の開発を試みています。今提案している新しい材料は鉄と木を組み合わせたハイブリッド構造で、強く・軽く、そして環境にも優しい材料を目指し、様々なモデルや建物を解析する研究を行っています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	准教授 渡邊 一也	津波避難シェルターを使用 した避難に関する研究	従来の高所避難のみに注目した避難だけでなく、浮体式津波避難シェルターと併用したハイブリッドな避難手法について検討しています。秋田県は低平地が多いので大規模な津波が来た場合には避難する時間があまりありません。その中で命を助けるための研究をしています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	准教授 渡邊 一也	河口部における地形変化 と入退潮に関する研究	秋田県には一級河川が3本あり、河川によって特徴があります。特に砂州の伸長が顕著である米代川では地形の影響を大きく受けます。現地観測やデータ解析、数値解析から河口水理特性についての検討を行っています。その結果、河口幅は、最大で約20m以上の拡大、閉塞する場合には最大で約10m程度となることが分かりました。地域の河川に関しての研究をしています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	准教授 渡邊 一也	水災害による被害調査	津波や洪水などの自然災害はいつ起きるか分かりません。しかし、そういった中で、被害の状況について調査し、また、それを今後の防災に役立てることは非常に重要です。被害拡大に繋がる要因について、観測・解析の両面からの研究を行っています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	准教授 渡邊 一也	津波の河川遡上に関する 研究	河川を遡上した歴史津波の数値計算から過去の津波においても高水位維持現象が見られました。津波周期は流入量と流出量に対して相関が見られない一方で、入射波高に対して流入量と流出量は明瞭な増加傾向がありました。過去の津波の状況を知るとは、今後の防災計画を立てる上で重要な研究です。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	准教授 渡邊 一也	波浪データを使用した海上 風の予測に関する研究	時間分解能の高い波高・周期データの観測が可能なHFレーダを使用した海上風の推定を行う手法について検討を行っています。従来行われていた手法の係数の決定方法についても新しい係数の決定法について検討しています。海上の風の状況について知る研究を行っています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	助 教 平川 知明	水面波と浮体の相互作用 に関する研究	海洋開発において重要となる、水面波と浮体の相互作用を高精度で数値計算する方法を開発しています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	助 教 平川 知明	第三世代海洋波モデルを 用いた海洋波に関する研 究	第三世代海洋波モデルを用いて、日本沿岸の波浪特性について調べています。

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名 氏名)	研究テーマ	研究内容
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	准教授 荻野 俊寛	データサイエンスを応用した土の性質や地盤の状態の推定に関する研究	人工知能や統計モデリングによって降雨量や土質データなどのビッグデータを解析し、広範囲の地盤内部の性質の予測や土砂災害の発生予測などを行っています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	助 教 田口 岳志	固化・破碎を伴う泥炭セメント安定処理土の動的強度・変形特性に関する研究	国土が狭い日本は、急な傾斜のある危険な場所や、軟弱な柔らかい地盤の上に居住施設を建設することが多々必要となります。秋田県では「泥炭(でいたん)」という腐食した植物から作られた土が沢山存在しており、とても柔らかくて、そのままでは構造物の重圧には耐えられません。そこで本研究では、泥炭をセメントで固めて、構造物を載せても大丈夫な強い地盤を作り上げる研究を行っています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	教 授 浜岡 秀勝	社会問題を解決する新たな道路交通システム	自動車は地方都市ではなくてはならないものですが、その利用が増えると交通事故・交通渋滞など多くの問題が生じています。こうした社会問題を解決するために、自動車1台1台の移動経路や走行速度を高精度で記録できるプローブデータを利用した交通流解析や、ラウンドアバウト・二段階横断・プロビーム照明など新たな交通施設の導入可能性に関する研究を行っています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	准教授 日野 智	高齢者が安全・安心に暮らせる社会のための都市・交通	秋田県は高齢化が進んでいますが、高齢者にとって暮らしやすい環境ではないと考えられます。そのため、高齢者が生活に安心を感じられるような、充実感や満足感を感じられる生活を送ることができるような都市を研究しています。また、生活の様々な活動をする上では交通による移動が必要不可欠ですが、現在の公共交通に不便さや不安を感じる人は少なくありません。そのため、高齢者も利用しやすい公共交通についても研究しています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	教 授 徳重 英信	コンクリートの耐久性と環境調和性能の向上	積雪寒冷地にさらされるコンクリートの劣化メカニズムやそれを基にした耐久性の向上に関する研究、石炭灰フライアッシュやもみ殻灰などのポゾラン材料といわれるものを材料の一部に用いたコンクリートの性能改善などを行なっています。さらに、ゼオライトを用いた保水性能や物質吸着性能を有したポーラスコンクリートの機能と耐久性に関する研究や、サンゴ育成基盤なども対象とした環境調和型コンクリートの研究開発を行なっています。
システムデザイン工学科 土木環境工学コース	助 教 網田 和宏	酸性雨が森林環境に与える影響に関する研究	酸性雨には、人間活動に由来する窒素分が含まれています。これらの窒素が、長期に渡って森林に供給され続けると、いずれ森林は「窒素飽和」の状態になり衰退することが知られています。そこで、森林域の河川や渓流水に含まれる窒素を調査・分析することで、森林が現在、どのような状態にあるのかについて研究しています。

各センターの研究内容

■ 地方創生センター

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
地方創生センター 地域協働・防災部門	教授 水田 敏彦	都市の地震防災・減災に関する研究	地震災害から人や街を守るための研究をおこなっています。研究の主な内容は、過去に発生した地震の被害に関する文献調査、地震による地面の揺れ方の観測(地震や常時微動の観測)、これら調査・観測を基にした、地震防災・減災のための都市の地震被害想定をおこなっています。また、得られた成果を地域社会へ還元する防災教育教材の開発もおこなっています。
地方創生センター 地域産業研究部門	准教授 丹野 剛紀	テラヘルツ分光の応用開拓	固体の中の分子はずっと振動しています。振動のはやさ(振動数)は分子の種類によっても違いますが、その分子のとなりの分子の種類や向きによっても変化します。いろいろな分子の振動のなかで、もっともおそいタイプの振動は、1秒間に数千回程度の振動数です。これをテラヘルツ振動といいます。テラヘルツ振動は隣の分子の影響をとっても受けやすい。今は、このことを利用して何か新しい技術を生み出そうと、世界中で競争しています。

■ バイオサイエンス教育・研究サポートセンター

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
分子医学部門	准教授 小代田 宗一	細胞を覆う糖鎖の生理的役割と調節機構の解明	体を構成する一つ一つの細胞は全て糖鎖で覆われています。細胞から放出されるタンパク質もそのほとんどは糖鎖付加された糖タンパク質です。近年、糖鎖の付加やその構造が、ウイルスや細菌の感染、免疫細胞による異常細胞の認識、がん細胞の浸潤や転移など、様々な疾病に関わることがわかってきました。糖鎖の生理的役割や調節機構を明らかにし、新しい医薬品開発の標的を見つけることを目指しています。
動物実験部門	准教授 関 信輔	メダカ生殖幹細胞の凍結と代理親への移植による絶滅危惧種の復元	日本や東南アジアの各河川に生息している野生メダカは絶滅危惧種に指定されている。受精卵の凍結保存が望まれるが、巨大であるため凍結保存の成功例はない。そこで、精子や卵子の先祖にあたるサイズの小さな生殖幹細胞(具体的には精原細胞)を凍結保存し、代理親に移植をすることで精子・卵子へ分化させることに成功した。野生メダカが絶滅しても、凍結精原細胞からメダカを復活させることが可能になった。

■ 評価・IRセンター

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
評価・IRセンター	助教 細川 慎二	学習成果の予測モデル構築に関する研究	大学で学ぶ学生の能力が、社会でどのように生かされているのかを予測するモデル構築の研究をしています。学生は、総合型選抜や個別学力試験等の入試を受験して入学し、入学後には教養基礎科目や専門科目を学びます。これまでに入学・卒業した多くの学生の入試や、入学後の成績データを人工知能で解析し、社会で必要とされる能力の予測モデルを構築し、入試や教育課程の改善につなげるための研究をしています。

■ 電動化システム共同研究センター

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
電動化システム共同研究センター	特別教授 渋谷 嗣	電動化航空機システムの効率性評価	航空機は空力を考慮した機体構造、エンジンによる推進、客室空調そして飛行のための制御系を上手く組み合わせて作られている。このような航空機の設計は、機械工学の構造力学、流体力学、熱力学および制御工学で学ぶ理論が必要である。この研究では、これらの理論とコンピューター解析を組み合わせて、環境負荷の小さい電動化航空機を設計するために、いろいろな飛行形態と統合した航空機システムの効率性を調べる研究を行っている。
電動化システム共同研究センター	特任教授 沓澤 圭一	小型軽量電動化システムの研究開発	地球温暖化対策として航空機から排出される二酸化炭素の低減を図るために、航空機の電動化システムの研究開発を推進する。具体的には、「電動化システム共同研究センター」を中核拠点として、モーターの性能評価試験、モーターで駆動する装置の耐久試験、グリッド(送電線)を使用したシステム試験などの各種評価設備を整備し、「新世代モーターの研究開発」、「新世代モーターの応用機器開発」、「新世代モーターのシステム設計・周辺技術の研究開発」などについて企業と共同で実施していく。
電動化システム共同研究センター	特任助教 半田 修士	モータの開発および特性評価	航空機電動化に際して、超高速で駆動するモータが必要とされている。また、国内において消費される電力で最も多いのはモータに関する電力である。そのため、高効率なモータが開発できれば環境に対する負荷を減らすことができる。本研究ではより高速で回転でき、かつ高効率なモータを設計することとモータの特性を評価することで、高回転・高効率なモータの開発を目標としている。
電動化システム共同研究センター	特任助教 安部 勇輔	電動航空機向け電力グリッドに関する研究	低炭素社会の実現に向けた動きが加速し、航空機分野においても、二酸化炭素の排出が少ない電気を使ったモーターで駆動する電動航空機の研究開発が進められている。機内で電気を使うためには電力グリッド(電気の通り道)をどのように構成し、いかに効率よく電気を送電するかが重要となる。このような背景から電動航空機に向く電力グリッドに関する研究に取り組んでいる。

■ 高齢者医療先端研究センター

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
高齢者医療先端研究センター	教授 大田 秀隆	高齢者認知症・フレイルの疫学、予防、治療に関する研究	少子高齢化社会の到来とともに高齢者の認知症やフレイルの方も増えてきています。高齢者は様々な課題を抱えていることが多く、それらに関する研究が急速に世界で進んでいます。現在、認知症やフレイルに対する治療法は存在せず、その対応も不十分であることが分かっています。そこで私たちの研究室では、医学のみならず、高齢者に関する様々な学問分野を横断的に活用しながら、老年学を中心とした研究を進めています。
高齢者医療先端研究センター	特任助教 小玉 鮎人	認知症やフレイルにおける疫学、介入方法に関する研究。高齢者における睡眠や日中の活動量に着目した生活リズムに関する研究。	在宅で過ごしている元気な高齢者から施設に入所している高齢者まで幅広く調査することで、認知症の疑いから重度まで様々な症状や課題について研究しています。また、要介護状態の前段階とされるフレイル高齢者に対して、どのような介入方法が有効であるのか追求しています。

■ 高等教育グローバルセンター

所属 (学科・コース・講座等)	教員名 (職名・氏名)	研究テーマ	研究内容
高等教育グローバルセンター	准教授 濱田 陽	リスニング力向上・発音向上のためのシャドーイング研究	聞いた音をそのまま再生するというシャドーイングについて、様々な角度から研究しています。どんな学習者に効果的なのか、なぜ効果的なのか、さらに、どうすればもっと効果的になるのかを理論的に解き明かし、実践的に証明するという研究です。これまではリスニング力への効果と方法について研究してきましたが、現在は発音への影響についても研究を行っています。
高等教育グローバルセンター	講師 Ben Grafström	文学、英語で俳句を句作、時間学、教育法、比較文学、異文化コミュニケーション	中世文学・文芸には、御伽草子、和歌、随筆、軍記物、説話など様々なジャンルがありますが、それぞれに固有の定義や歴史の変遷があります。一つのジャンルとして、幸若舞(こうわかまい)があります。幸若舞は、中世の後期から江戸時代の初期までは語り物の話ですが、江戸時代の初期には読み物になりました。内容は殆ど平治物語、平家物語、管我物語、義経記などに基づいており、室町時代の乱雑的な社会的な背景を何らかの形で反映しています。幸若舞に反映する室町時代の仏教の動向、民俗の生活、時間管理などについて研究し、分析をしています。
高等教育グローバルセンター	講師 吉沢 文武	死と生の意味と価値をめぐる哲学・倫理学	死は恐ろしく、できれば避けたい悪いことだというのが普通の考え方です。しかし、死が悪いことだとして、それがなぜなのかを説明するのは、じつは容易ではありません。生や死、善や悪などの言葉の意味を明確にして、論理の力で一步步考えて説明を試みるのが、哲学・倫理学のアプローチです。そこからさらに、動物にとっては？ 科学技術との関わりは？ 人類全体の絶滅は？ と問いを広げて、応用的な研究にも取り組んでいます。
高等教育グローバルセンター	准教授 市嶋 典子	シリア出身の日本語学習者の学習環境とアイデンティティ形成過程の動態について	現在、世界の137の地域で日本語教育が行われています。この中には、決して数は多くはありませんが、現在も紛争状況にある国々も含まれています。中でもシリアには、紛争渦中においても、日本語を学び続ける学習者が存在しています。また、シリアを離れ、難民として外国で生活しながら、日本語を学び続ける学習者もいます。このような学習者に聞き取り調査を行い、彼／彼女らがどのような環境で日本語を学んでいるのか、いかなるアイデンティティを形成しているのかを考察し、人がことばを学ぶことの意味を探求しています。
高等教育グローバルセンター	助教 浜田 典子	中上級日本語学習者の仲介行動の特徴	私達は予測不可能な時代を生きています。この時代を生き抜くには、背景の異なる人と協働しながら、アイデアを創出していくことが必要です。そのためには様々な調整を行いながら話し合いをすすめる対話力が必要です。意見の衝突が起きた場合やコミュニケーション上の問題が起きた時、私達はどのように調整していくのか、どうすればそういった調整力を育むことができるのかについて、主に日本語学習者を対象に検討しています。
高等教育グローバルセンター	助教 袁 曉犇	主に日本語と中国語を対象にして、語の形成の仕方を研究しています。	日本語の中で、「動詞連用形+動詞形」の形で作られている「複合動詞」があります。しかし、任意の2つの動詞を組み合わせるだけで、複合動詞が自由に作れません。たとえば、「お皿の汚れを洗い落とす」という文は普通に言えるが、「洗い落ちる」は言えません。また、「言い残す」は「言うことを残す」を表しており、「投げ入れる」は「投げることで入れる」を表しており、「思い至る」は「思いが、そこに至る」を表しています。同じく2つの動詞を並べても、意味解釈が全く異なります。現在は、人がどのように複合動詞を理解して、作っているのかという問題に取り組んでいます。